

潮音

令和六年度海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール受講生作品集

令和六年度

海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール受講生作品集

潮音

～若人の樹～

鹿児島県立図書館

目次

巻頭言

講師紹介

作品

自分らしき

鹿児島中央高等学校

二年

吉村 恵虹

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

2

ネモフィラ

武岡台高等学校

一年

武 凜々香

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

11

Amore macchiato

伊集院高等学校

二年

畑山 倫平

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

22

ドラマチック殺人

伊集院高等学校

二年

元山 道

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

34

血塗られた齒車

市来農芸高等学校

一年

平尾 椰智

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

43

アルテシア戦記

加治木高等学校

二年

上別府蒼真

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

50

バナナになった僕

種子島中央高等学校

一年

日高 晴央

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

56

蝉の声

大島高等学校

二年

大榮 奈穂

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

58

四番目のボタン

鹿児島実業高等学校

二年

前原 夷吹

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

62

りんご、それからミルクティー

鹿児島実業高等学校

三年

松元 莉乃

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

67

鷹とねずみ

鹿児島情報高等学校

二年

竹波 芽生

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

75

講師からの一言

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

87

講座の様子

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

88

編集後記

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

90

巻頭言

今年正月に公開され、豪華キャストやアクションシーンなどで一躍話題となった映画『室町無頼』。今年度の海音寺潮五郎記念文芸ゼミナールは、この作品の原作者で直木賞受賞作家の垣根涼介先生を特別講師にお迎えしました。

ミステリーから歴史小説まで幅広いジャンルの作品を世に送り出している垣根先生は、三十三歳での作家デビューまでは普通の会社員でした。その間、自分の得意な「文字」の力を伸ばそうと、働きながら多くの本を読み、また、旅行会社の勤務経験からは、各地の文化や歴史、暮らしなどを自ら体験することの大切さを学ばれたそうです。また、歴史小説の執筆に当たっては、多くの古文書や歴史書等に目を通して、史実や当時の人々の暮らしぶりなどを確認しながら作品の構想を練られるとのことでした。このように、読書によって想像力や言語能力を豊かにし、体験によって現場感覚を磨くことが、作品の中の情景や登場人物の心情を描写するのに役立つている、と垣根先生は話されています。

「自ら挑戦し、体験を積み、自分自身を成長させること」、「本当に好きなものを書くこと」、「自分の考えや感じ方をしっかりと育てること」の大切さなど、受講生に大きな示唆を与えてくださった垣根先生に深く感謝申し上げます。

さて、このゼミナールは、郷土出身の作家、故海音寺潮五郎先生の御芳志も踏まえ、氏の文業を称え、功績を後代に伝えるとともに、本県の文芸振興を図ることを目的に、平成二十六年度から開催しています。具体的には、高校生の受講者がおよそ半年間に

わたる八回の講義と演習を通して、それぞれ一つの文芸作品を完成させるといふものです。

今年度の受講生も、それぞれ日々の学業や部活動に励みながら、執筆活動に真剣に取り組みました。完成した作品を読んでもみすと、ジャンルは異なっても、どの作品も若い感性に溢れています。受講生の皆さんには、このゼミナールで同じ志をもった仲間と出会って文芸を語り合ったこと、講師の先生方から教わった執筆に当たっての技術や心構えなど、そして何よりも講座を通じて自分の力で一つの作品を仕上げたことを糧に、これからも文芸活動を継続されることを期待します。

また、このゼミナールの実施に当たり、常に熱心かつ丁寧な御指導を賜りました立石富男先生と出水沢藍子先生に心から感謝申し上げます。先生方の御指導は受講生にとって貴重な財産として、今後の文芸活動におおいに活かされるものと思います。今後も受講生の成長と活躍を応援いただければ幸いです。

結びに、このゼミナール受講生の作品集『潮音』を読んで、多くの方に文芸作品を創作することの楽しさを感じていただくとともに、それを機に、読者の中から新たな創作の担い手が誕生することを願っています。

令和七年三月

鹿児島県立図書館長 東條 広光

講師紹介

立石 富男 先生



枕崎市生まれ 鹿屋市在住
作家 文芸同人誌「火山地帯」主宰
九州芸術祭文学賞鹿児島地区選考委員

【文学賞】「記憶の翳」九州芸術祭文学賞鹿児島地区優秀賞

「うしろ姿」第十二回南日本文学賞「知覧へ行く」労働者文学賞

「ソロモンの夏」第十五回自由都市文学賞

【著書】エッセイ集『夢と想いと言葉』伝記『島比呂志』小説集『黄昏』『モンブラン』『石を持つ朝』『小説 島比呂志』ほか

出水 沢藍子 先生



奄美大島生まれ 鹿児島市在住

作家 小説教室主宰 「小説春秋」編集・発行人

南日本新聞文芸季評 新春文芸審査委員 九州芸術祭文学賞鹿児島地区選考委員

【文学賞】「グンセイフの夜」南日本文学賞「マブリの島」新日本文学賞

「還流」文学界同人誌優秀賞 「木瓜（もっか）」大阪女性文芸賞佳作

【著書】短編小説集『マブリの島』『銀花（ぎふあ）』大島紬小説集『爪』

共著『鹿児島の女性作家たち』伝記『何もいらぬ』ほか

自分らしさ

鹿児島中央高等学校 二年

吉村 恵虹

全国高校放送大会。毎年七月に行われ、全国の高校生が一年間磨き上げた技術で競い合う。大会は「アナウンス」、「朗読」、「ラジオ」の三部門で構成されており、個人、団体に分かれている。私が通うF高校は、強豪校だ。毎年全国まで行き、最低でも一つの賞を取っている。けれど、賞を取れずに終わった。

登校日の今日、ミンミンと蝉の声が体育館に響いている。全校朝会が行われており、校長先生が話している。私は、司会進行をしている。原稿には校長先生の話の次は部活動の表彰式が記載されている。例年通りなら陸上部、書道部、放送部が並んでいるが今回は違う。放送部ではなく、弓道部が書かれていた。放送部が賞を取れなかった事を実感した。目の端で生徒たちが一斉に動いた。校長先生の長い話が終わったのだ。マイクのスイッチを入れて、陸上部、弓道部、書道部の順に読んでいった。壇上に向かって歩いて行く生徒の顔は自信に満ち溢れており、放送するこちらの気分も上がってくる。書道部の最後の生徒になった。同じクラスの渡辺君だ。

彼には近寄りたいたいところがある。彼は無表情で気怠げに歩いていた。思春期特有の照れ隠しではない。きっと彼にとって表彰されるということは日常と変わらないのだろう。

「先輩、結菜（ゆいな）先輩」

顔を上げると、乃愛（のあ）ちゃんが不安そうな顔をしている。私が戸惑い、辺りを見回すと生徒たちは各々移動していた。

「もう朝会は終わりましたよ。体調悪いんですか？」

原稿用紙を見ると手に持ってた所がくしゃくしゃになっていた。私は「大丈夫だよ」と言い、片付けを始めた。話を聞くと表彰式が終わったのに私が放送せず、俯いていたから代わりに終わらせてくれたらしい。お礼を言うと乃愛ちゃんは笑顔で「はい！」と元気よく返事をした。

「おーい、お前ら。後は俺がやつとくから帰って良いぞ」

頭をかきながら気怠げな声で山ちゃんがやってきた。山ちゃんこと山田先生は放送部の顧問だ。いい意味で先生らしくないため、生徒から結構好かれている。私たちは一礼して入口の方に向かうと私だけ引き止められた。

「河元、何がとは言わないがあまり気にしすぎるなよ」

目を合わせず、分かちますただけ言って、その場から逃げた。教室に入ると同時にチャイムが鳴り、授業が始まった。

帰りのロングホームルームでは後期の係決めが行われていた。担任が黒板にずらりと係名を書いている時、生徒たちはあ

れが良いやあれだけは嫌など言い合っている。学級委員や体育委員はお調子者や運動部に所属している人がなることが多い。生徒会や学校行事委員などは活発な子たちがやってくれるだろう。私の狙い目は教科連絡だ。放課後や休日に活動が無く、部活動に支障が出ない。そのため競争率が高めだ。

教科連絡を希望する者が後ろに集められ、話し合いになった。教科で複数人いる場合はじゃんけんで決めていく。けれど、今回は希望者が多く全ての科目がじゃんけんになった。

「最初はグー、じゃんけんぽん！」

惨敗である。うなだれ、どうしようかなと黒板を見るとほとんど名前が埋まってしまった。まだ決まっていないのは図書係、学校行事委員、美化委員だ。どれも放課後や休日に活動がある。一番マシなのは図書係だろう。先生が図書係と言った時、私を含めた三人の女子生徒が手を挙げた。考える事は同じだ。手に力を込め、勢いよく腕を振った。

またもやじゃんけんで負けた私は、残り物の学校行事委員になった。席に帰る時、窓際に座る彼が見えた。頬杖をつきながら窓の外を見ている。顔が整っている彼がやると絵になる。周りの女子たちもチラチラと彼を見ていた。

家に帰り、自室で数学をしながら、電話で今日の係決めのことを幼馴染みの祐介に愚痴ると「運ないもんな、お前」と笑っている。普段は電話なんてしないが、今週の木、金曜日に実力テストがある。赤点は無いが、低い点を取ると山ちゃんに部活動をさせてもらえないため放送部員はテスト前にな

ると机に向かう。「学生の本分は勉強、それを怠るものに部活動をする資格はない」と言うことらしい。本当は今日も部活がやりたかった。その後、部活の練習メニューの話を少しして電話を切り、苦手な数学に戻った。

「キンコーンカンコーン」

テスト終了のチャイムが鳴り、生徒は一斉にシャーペンを置いて、どうだったやできなかったなどと話している。

「これでテストは終わりだ。放課後、はっちゃけすぎないよ。気をつけて帰れよ」

担任がそう言い、教室がさっきよりも賑わった。やっと長い二日間が終わり、開放感がすごいのだろう。私はすぐに片付け、放送室の鍵を借りて事務室に行こうと立ちあがろうとした。すると、目の前に普段は関わらない渡辺君が立っていた。驚くと同時に、周りの女子たちの視線が私に刺さる。一瞬、教室が静まった。

「河元さんって、学校行事委員だよな？」

私が頷くと彼は続けて言った。

「俺もなんだ。この後、家庭科室に十二時半に集合らしくて行ける？」

時計を確認すると時間まで十分あったので、祐介に伝えてから行くと言って教室を出た。祐介に伝えるのもあったが、何より早くその場から逃げたかった。

祐介に伝えた後は、駆け足で家庭科室に向かった。ドアを

開けるとほとんど揃っており、担当の先生がこちらを見ていた。先生に遅れた理由を言うと席に座るように促された。一礼して自分の席を探していると真ん中の列の前から五番目の席に座っている彼を見つけた。先生は私が座るのを確認してから口を開いた。

「約三週間後に文化祭がある。君たちには生徒会と文化委員を手伝ってもらおう。今からクラス言うから把握するように」
そう言っただ担当名と内容が簡易に書かれているプリントを配った。担当は「部品確認」、「舞台建設」、「観客誘導」、「ポスター制作」の四つに分かれている。クラス順で決めたらしい。不満を漏らす生徒がいたが、先生は気にしていない様子だった。

私たちは五組で部品確認だった。部品確認は学校側が部活動や委員会に文化祭で使う道具を貸し出す部品の個数を確認して報告をするらしい。結構大変そうだが、交代制なためそこまでらしい。他の担当の説明が終わり、二年生だけが残された。

「お前たちも知っていると思うが、毎年文化祭のオープニングで二年の学校行事委員が結束して出し物をする事になっている。お前たちは何か意見はないか？」

学校行事委員は文化祭の勢いをつけるために、最初のパフォーダンスを行う。去年はダンス部員が多くてヒット曲の派手なダンスだった。とても好評だったのを覚えている。

辺りを見渡すと今回の二年生は私も含めて派手なことを進

んでするような子達ではない。みんな顔を窺うだけで黙っている。先生がその様子に痺れを切らし、一人一個ずつ意見を発表することになった。学校に関するクイズや演劇、合唱などありきたりなものばかりだった。先生から考えてくるようにと来週の宿題が出された。

部室に行くとみんな活動の準備をしていた。私は荷物を置き、リュックからおにぎりを取り出してかぶりついた。後少して活動が始まる時間になる。一個だけでもお腹に入れておきたかったのだ。

今日から新しいメニューが始まる。今まで声帯を広げるためにストレッチを重点的に行ってきた。それに加えて腹筋とプランクをする。部員全員で腹筋とプランクをすると大変なことになるため、A班とB班に分かれて行うことになった。その間に裕介たち機材班は文化祭に向けてVTRを作るらしい。

全体のメニューが終わると山ちゃんが一人一人に作ってくれたメニューをこなす。私は自分のメニューをする前に部活日誌に「取り入れてみてプランクが出来ていない子たちが目立ち、経過を見ていきたい」と記録した。

五時半になり、私は部員を集合せた。金曜日のこの時間は来週の当番を決める。放送部は学校で行うほとんどの放送を担当しており、当番制になっている。輪番制なのだが、用事のある子や朝が苦手な子など、事情がある者同士を話し合わせ、変更を報告してもらい、私と祐介が山ちゃんに報告す

る。後は一週間の反省と、困ったことがあれば報告してもらい、放送部の活動は終わりだ。終わりが近づき、日誌に書き混んでいるとドアが開いた。山ちゃんが来たのだ。

「お疲れ様です」

私たちは立ち上がって一礼した。山ちゃんは軽く手を挙げて、近くにある椅子に座った。私が日誌を書き終わるのを見て山ちゃんが締めの話 시작했다。内容は一週間の良い点と悪い点だ。担当だった人は緊張した顔で話を聞いている。かく言う私も全校朝会でやらかしてしまったため顔をこわばらせている。

「……河元部長、何を考えていたのか知らないが、放送している時は放送に集中する。基礎の基礎だ」

言っているのはあっているが、一々「部長」とつけるのに悪意を感じる。すみませんでしたと返事し、話が終わった。

「よし、今日はこれで終わりだ。お前ら気をつけて帰れよ」

「ありがとうございます」

挨拶をして各々荷物を持って帰っていく。私と裕介は戸締りと機材の電源の最終確認をして山ちゃんに日誌と鍵を渡した。帰りが遅くなるため、いつも鍵は山ちゃんが返してくれる。廊下の窓を見るとすっかり暮れていた。

家に帰り、ソファで溶けているとお母さんにお風呂かお手伝いか迫られたため素直にお風呂に入った。

「輸出車輸出湯輸出中」

湯船に浸かりながら早口言葉を唱える。力が抜けていつも

より上手に言える気がする。何回か練習して上がった。

リビングに入るとテーブルに二人分の料理が並んでいた。私とお母さんだ。今日も父親は残業だと悟り、何も言わずに座った。私が席に座るとお母さんも座る。私たちは食事中ほとんど会話しない。お母さんはテレビ、私はスマホを見ている。ハンバーグを一口食べ、メールを開くと、学校行事委員二年のグループが作られていた。その中にはもちろん彼がいた。無難に優しくお願ひしますと返信し、溜まっているメールを整理した。お母さんは私の方を少しも見ない。中学校の頃から食事中はずっと静かだ。私はそそくさと食べて二階の自室に籠った。

「この量の部品確認どうやって一週間で終わらせるんだよ」

私は手を動かし続けた。昨日の昼休みに私たち部品確認担当は先生に呼び出され、校舎の離れにある旧芸術棟に連れられて行かれた。今は行事で使う部品や資料などをしまっているらしい。生徒が減多に近寄らない場所だ。文化祭に使う部品は二階の奥にある部屋だ。入ると埃っぽく押し入れのような匂いがした。三枚の用紙を取り出し渡してきた。そこにはぎつしりと部品の名前と番号、個数が書かれていた。先生は当番制で作業して、来週の月曜日に終わらせるようにと告げた。終わらなかつたらどうなるのかと三年の先輩が尋ねた。終わらないなら休日にもくるしかないねとバツサリ切られてしまった。一年生から順に確認することになったのだ。

現在、放課後渡辺君と二人で確認している。今日は元々部活が休みの日で良かった。休日にしなくていいように、できる限り進めたい。

「てか、昨日全然進んでないじゃん」

渡辺君がチェックしてあるのを見て嘆いている。三十分やっているが七個しか進んでいない。他の棚や段ボールを見るとやる気が失せる。渡辺君は愚痴を言いながら進めていた。六時半には鍵を返さないといけないので後一時間半だ。気合を入れるために髪を結んだ。

上の棚になり、そこまで背が高くない私が届くはずがないため脚立を持ってきた。上ろうとするとぐらつき危ない。彼と会話をするのが怖く、ずっと避けてきたが、さすがにそうもいかない。私は平然を装った。

「渡辺君、悪いけど脚立支えてくれない？ 上の棚の部品が取れないから」

「危ないし、俺が取るよ。河元さん、脚立支えてくれる？」
私はお礼を言い、脚立を支えた。こういうさりげなさもモテる理由なのかもしれない。それから、少しずつ話すようになった。

六時を知らせる音楽が鳴り、片付けを始めた。一枚目の分が終わった。これなら、休日は来なくて済むだろう。私は鍵を返してくると言っただけで旧芸術棟で別れた。

その後、渡辺君と連絡のためにメールを交換した。クラス内では今までは変わらないが、部品確認の時は軽く話すよ

うになった。

木曜日の昼休み、二年の学校行事委員が家庭科室に集められた。先週出された宿題のことだろう。何をすれば良いかわからず、何も案が出なかった。みんなも同じらしく、先週の意見と変わらなかった。

「お前たちがやりたいって思うことやお前たちの特技を活かしたものがいいな」

先生はどうしてもクイズはやって欲しくないみたいだ。だからと言って誰かの意見を待とうとしても時間がない。

「書道部と美術部がいるし……、組み合わせで何か創作するとか」

担当の先生はため息をつきながら、ほぼ答えのヒントを出した。来週の月曜日までに、後の細かいことは自分たちで決めろと言われた。

その日の夜、メールの通知がすごいことになっていた。今日言われた出し物の件でだ。みんなが自由に意見を出している。みんな絵の具を使い、即興で何かを創作するとか渡辺君がステージで書道するなど。私はどちらも良い案だと思っただけで多い方に合わせようと思う。メールを追っていると渡辺君が案を出してきた。内容は音楽に合わせて墨と絵の具で伝えたいものを即興で描くというものだった。墨で絵を描くという発想がなかったので驚いたが、書道部と美術部らしきが出ていた。満場一致で決まった。その後、色々の係が決まった。

私たちは日曜日の午前、旧芸術棟に集まった。金曜日で終わると思ったら、後一枚の半分が終わっていなかった。理由は簡単だ。先輩方が受験勉強が忙しい理由で全くしなかったからだ。少しでも楽しくするため出し物の話になった。

「河元さん、機材使えるんだね。正直意外だった」

「一年の時、機材班だったから。裕介みたいにはできないけどある程度のことならできるよ」

私は段ボールの中を覗きながら答えた。私は音響の係になつた。

「渡辺君大丈夫？ 部活でもステージ発表があるのに……」

「大丈夫だよ。こんな字でよければ」

彼は心配ないと答えた。それから世間話をした。

十二時になる前に終わることができた。まず、段ボールを探るのが大変で思ったよりも時間がかかってしまった。鍵を返しに行き、靴箱に行くと渡辺君がいた。

「ご褒美つてことでアイスでも食べない？」

彼が待っていたことも誘われたことも驚いたが、疲れて糖分を欲していたため、承諾した。学校から徒歩十分のところの公園にアイスの自動販売機がある。私はバナナ、彼はグレープ味のシャーベットを買った。ブランコに腰掛けた。

「俺、河元さんのこと誤解してた」

え？ と聞き返すと彼は続けて言う。

「無口で怖くて、何を考えてるか分からない感じ」

普通の女子と違っていつも一人で無表情で過ごしていて、

近寄りがたかったらしい。私が彼に思っていたのと同じだ。少しづつ分かってきて友達のようなだ。彼はアイスを食べ終わりに、漕ぎ出した。私もつられて漕いだ。ブランコなんていぶりだろう。私たちは数分ブランコを楽しみ、帰った。

文化祭まで残り二週間を切った。学校全体が一段と賑わい始めている。部品確認担当は仕事が終わったのでほとんど活動はない。出し物は美術部や他の子たちがやることになっていするため、部活動にも専念できるようになった。

いつもどおりのメニューを行うと、ブランコに苦戦していた。それに効果がある感じがしない。もっと増やしたりすべきなのかもしれない。判断するために自分のメニューをしながら部員をよく観察した。わいわい楽しくするのが放送部のいいところだけど、前よりも無駄な話をしている子が増えている気がした。

部活が終わり、裕介にさっき思ったことを相談した。裕介は気にしすぎだと言った。それにブランコも様子をもう少し見るべきだと。裕介の周りを見る目はだいたい正しい。私は考えすぎだと自分に言い聞かせた。

土曜日、十三時から部活動が始まる。十二時半に学校に着いた。職員室に鍵を借りに行くと、意外な顔を見つけた。胸が少しざわついた。

「結菜ちゃん、久しぶりー。元気してた？」

のんびりした、高く、可愛い声……。あおい先輩だ。「は

い」と小さく答えた。山ちゃんを睨む。サプライズらしい。今日の部活動に参加するらしい。

部活動を始める前に山ちゃんから先輩のことを話した。二年生が先輩を囲む。一年生はどうすればいいか分からず、戸惑っていた。山ちゃんがおおい先輩に原稿を読むように伝えた。初めての原稿なのに一分も使わずに読み上げた。ノーマスで人を惹きつけるアナウンス。ああ、やっぱり先輩はすごい。一年生は先輩に憧れの眼差しを向けた。

山ちゃんの声で活動が始まった。いつもどおり全体メニューから始める。その後は個人メニューだ。いつもなら山ちゃんに個人指導をしてもらうための列ができているが、みんな先輩の方に行ってるため少ない。いつも遠慮しているが、私は山ちゃんに見てもらおうことにした。

声帯は広がっているが、アナウンス技術がまだ足りない、プロのアナウンスを聞くようにと言われた。山ちゃんは正確なため頼りなる。個人メニューが変わった。「しっかりしないと」と、より一層思った。

五時になり、部活動は終了だ。窓締めをしているとおおい先輩が話しかけてきた。

「結菜ちゃん、部活動楽しい？」

私が頷くと優しい笑顔で良かったと言った。本当はまだ話したい事があったが、押し殺した。

その日の夜、祐介と電話で今後のメニューについて話をしていた。私は腹筋とプランクを一セット追加するのを提案し

た。すぐに、却下された。理由を尋ねた。

「この時期に急に量を増やすべきじゃないし、個人メニューだってある。みんな、習い事や塾に通って忙しい中部活動をしているに、これ以上負担をかけさせるべきじゃない。もっと部員のことを考えないと」

「私だってみんなのこと考えてるよ！でも、それで結果が残せてないじゃん。それに、先輩との差が大きすぎる。私たちは、詰めていかないと……」

裕介の意見も正しい。だが、そんなことを言ってる暇はないんだ。私たちはずっと意見のぶつかりあいをしてきた。

「すごく良い！特に墨がいい味を出してる」

担当の先生が私たちの出し物を絶賛している。文化祭まで残り一週間を切った。私たちはステージで出し物の練習をしていた。実際にするのは初めてだが、いい感じだ。

「渡辺、やるじゃないか！所々にお前の字があっという感じだ」

「俺なんかの字なんて全然です」

彼は軽く流している。最近、渡辺君のことに着いて分かってきた。とても優しく、しっかりしている。けど……。

ステージ練習が終わると文化委員に頼まれてテーブルクロスを持ってくるように言われた。

「さすが、渡辺君。先生にすごく褒められてたね」

段ボールにしまっているテーブルクロスを手に取りながら

話しかけた。

「いや、あれは先生が騒いでただけで、俺なんかの字なんて全然大した事ないよ」

彼は、自分の字に関するときだけ卑屈になる。自然とテークブルクロスを握る手に力が入る。

「ねえ、さっきからその『俺なんかの字』って何？ 謙虚なのかなんなのか知らないけど、馬鹿にしてるの？ 君はその字で沢山の賞を取ってきたんじゃないの？ 評価されてきたんじゃないの？ すごく不愉快なんだよ！ せめて、せめて嬉しそうにしてよ……」

顔を上げると彼は私を睨んでいた。

「何が、お前に何が分かるんだよ！ 個性を持って生まれたお前に何が分かる？ お前はその声、好きなのかよ！」

すごい剣幕に押し入れそうになりながらも、私も負けじと睨んだ。二人で睨み合っていると、ドアが開いた。私たちが遅いので、文化委員が様子を見にきたのだ。私は、テークブルクロスを抱えて体育館に戻った。

それから、委員の活動はあったが、私たちは目も合わせなかった。

今日の放課後、部活動の途中で山ちゃんに呼び出された。

「河元、何をそんなに焦っている？ まだ、時間はある。俺たちは俺たちなりに地道にやっつていこう」

「裕介ですか？」

私の質問にゆっくり頷いた。いつになく真剣な眼差しで私

を見ている。自分の気持ちを正直に話した。

「私は何も焦っていません。みんながのんびりしすぎているんです。それに、時間はないです。来年、新一年生が入ってきたとき、自分自身の時間が割かれます。あおい先輩の実力見て思いました。このままいけば、二年全員追いつくことは無理です」

「河元、その考えを改めない限り、部活動を禁止する。一回頭を冷やせ」

私は小さく返事をして放送室に戻った。乃愛ちゃんが心配してくれたが、大丈夫とそっけなく答えた。リュックを背負い、学校を出た。

一粒涙が流れると、もう止まらなくて、公園の遊具に隠れた。やっと見つけた居場所を失った。初めて自分で見つけた好きものもなく振りかけている。もう、どうすればいいの？ 体育座りで顔を埋めた。

十数分過ぎて、涙が引っ込んできた。顔を洗おうと立ちあがろうとすると首に冷たいのが当たった。振り向くと渡辺君がアイスを出していた。バナナだった。困惑する隣で胡座をかき、地面を軽く叩く。私が座ると同時に「ごめん」と一言。私は「ごめん」が言えなかった。

アイスの袋を開けながら「どうしてここが分かったの？」と尋ねた。裕介がすごい速さで向かってきて教えたらしい。二人は去年同じクラスで仲が良いと知った。

「河元さんは昔の俺に似てるんだ。周りからの期待に必死に

なって苦しんでいるところが」

彼は目を合わさなかった。しかし、優しい目をしていた。それから沈黙が続いた。私が話すのを待っているのだろう。

「中学に上がる頃、このアニメのような高い声が理由で軽いいじめを受けた。負けてたまるかと思って通い続けた。友達もいない、言葉も発さない。空気がだった。中学二年の秋。準備して玄関に行くと動けなくなった。親や先生からは気のしすぎだって言われた。それから、不登校になった」

私は今まで誰にも言っていない過去を話し出した。彼は驚きながら頷いて聞いてくれた。

「中学三年の夏、このままでは良くないと思ったのか親に近くのF高校の見学に無理やり行かされた。その時、あおい先輩に出会った。先輩は私と同じくらい高い声で平然と放送していた。周りの人たちがコソコソ話すのが聞こえて、馬鹿だと思った。自ら前に出るなんて。けど、終わる頃には先輩のアナウンス技術で誰も何も言わなくなった。かっこよくて私の憧れの人になった。私もあんなふうになりたいと思った」

深呼吸を一つ。

「今年の七月、私たちは一つも賞を取れなかった。誰も手を抜かず、一生懸命練習してきた。誰も悪い人はいない。だけど、先輩たちが積み上げてきた歴史はどうなるの？ 怖くないか。私の代で強豪校という肩書きがなくなるんじゃないかって。不安でたまらなくて君に嫉妬して八つ当たりをしたんだ」

彼の目をまっすぐ見つめて「ごめん」と頭を下げた。私たちは自分が思っていることを時間が許す限り話し続けた。彼の字についても。昔、書道の先生に自分の字が否定された。それから怖くて先生の字を真似するようになって周りから評価されるようになったらしい。彼自身、自分の字が分からない。だから、賞を貰っても無表情だったという。書道界の神童と言われ、学校で人気者の彼にもいろんな過去があるのだ。人は何かしら悩みやトラウマを持っている……。

私は彼の手を取った。

「今度、試し書きでいいから見せてよ」

ただ純粋に見たくなった。文字はその人を表すという。きっと彼の字はとても優しく美しいのだろう。彼は乗り気でないけど、いつかその気にさせようと思った。

文化祭当日。最後の気合い入力で学校行事委員のみんなで円陣を組んだ。私は彼に頑張れと肩を叩いた。機材のスイッチをすべてオンにして音楽を流した。ついに始まった。墨を大筆にたっぷりつけ大きな紙に書き始めた。この前よりも明るい表情をしている。次に先輩に会った時は元氣よく「楽しいです」と伝えよう。自分たちのペースで自分のことを好きになれるように。私たちは一歩踏み出し始めた。

ネモファイラ

武岡台高等学校 一年

武 凜々香

ふうー 目の前のろうそくを消す。五本立っているろうそくはすつと消えていた。「ろうそくが全部消えたよ。大きくなつたね」向かいに座るお父さん、お母さんは笑顔だ。「来年はもう一本多く消すから」自慢げに答えた。

——入道雲以外雲一つない真つ青な空が広がっていた日。「お父さん。お母さんはどこに行ったの、いつ帰ってくるの」と僕が聞くと父は、「大丈夫、お母さんは、帰ってこないけどどこかにいるよ」

お父さんの目には、たくさんの涙が溜まっていた。なんで帰ってこないの。なんで。

ピピ、ピピー。

聞きなれたアラームを止めるためスマホに手を伸ばした。遠い昔の夢を見たような気がする。少し気だるいが、二度寝しようとも思えない。横のカーテンを開け、目を浴び、目を覚ました。すると、キッチンから「葉空（はく）早く起きろよ。学校に間に合わないぞ」と朝から元気な声で父が俺を呼

んだ。呼ばれる前から起きていたけれど、心の中で文句を言い、ベッドから足を出し、立ち上がった。朝ごはんは、スーパーの惣菜。パックには、半額の文字が書かれている。それを素早く腹に入れ、慌ててスクールバッグを持ち家を出る。そして、道路で走っている車と競争。時間ギリギリだ間に合うか。疑問に思いつつも足は止めない。駅のホームに滑り込んだ。「セーフ」俺の高校は、電車で三〇分ほどかかる。

いつものように電車に乗る。するとすぐに扉が閉まり車体が揺れ始めた。今日も電車の出発時刻一〇秒前。学生の朝は忙しいな。いつものように鞆から有線のイヤホンを片耳につけて音楽を聴く。外の景色を見ながら。いつもこの車両で見る女子たちが、今日は誕生日の話に花を咲かせていた。今日のあの夢を思い出す。電車の窓から、見える町の建物を見ながら。

母は俺が六歳になる前に事故で他界した。飲酒運転の男が、信号が赤なのに気付かず、横断歩道を渡っていた母を轢いてしまった。俺は、人の死という概念はあまり分からなかったが、もう母には会えないんだという孤独感を感じていた。葬式の日父の、「大丈夫、お母さんは、帰ってこないけどどこかにいるよ」という一言が心の中に粘着物のように残っている。夢は、普段考えていることが集まって夜に現れる。夢のせいで眠りが浅くなった。脛が下がっていく。

キキー、車両が止まった。少しの違和感を持ちつつ目を開ける。朝一番危険なトラップに引っかかってしまった。今ま

で細心の注意を払っていたのに。俺は、寝過ごして目的地を通り過ぎ、終点まで行ってしまった。はあ、どこだここは。電車の時刻表を探すところから始める。この駅は、ひとけのない、古びたところだ。改札を通り過ぎると大きな柱があり、そこに時刻表らしきものが貼ってあった。これさえあれば。その表は、破れていた。この駅の景観が、紙に現れているかのように。まあこの時代はスマホというスペシャルアイテムがある。慌てることは何一つもない。スマホの側面に親指をあてる。画面は、真っ黒だ。俺は、再度同じ動作をした。ふう。まあ今日はもともと学校に行くことに、乗り気ではなかったから、ちょうどいいな。夕方になったら、電車も来るだろう。無理矢理ポジティブに考えて、今の状況を見て見ぬふりをした。俺は、現実逃避が昔から得意だ。

気分で目の前にある道を選び、ひたすら前に進む。一応、歩いた道は忘れないようにする。駅でおとなしく待っていていいもの、足の指が前に進みたいときかなくて。まあ、これも何かの縁だろう。気づけば、大きな公園に足を踏み入れていた。見上げると、視界には何も障害物はない。濃い青色の空と入道雲が、堂々と俺の前に現れている。「自信たっぷりなようでもいいですね」心の中で皮肉っぽく言った。公園もまた古びていた。さっきまで歩いていて、誰一人としてすれ違わなかった。出勤ラッシュの時間帯のはずなのに。ここは、いわゆる過疎地域に属するのかもしれない。と思考を止め、木の下のベンチに腰掛けた。入道雲め、お前はいいな。堂々と

自分の姿をいろんな人に見せるだけで、人はそれを見て、勝手に口が開いて一言「きれい」などと肯定の言葉を出すのだから。苦しいと感じることは、今までもこれからもないと思う。と雲を自分の今までの人生と比較して妬んだ。

父の職業はフロリストだった。昔は、父と父の兄で「ミリオンベル」という店を作り、地元で愛された花屋だった。店は、オーダー制で注文が入るとデザインして花のギフトを提供した。だから、特にイベントの日は、注文が殺到して、忙しそうだった。とは言っても、収入は不安定であることは変わらない。母は会社員でそれなりに安定した給料を毎月もらっていた。毎日、ご飯は食べることはできたし、誕生日、クリスマスのは、花のギフトと欲しかった物をくれる。そんな幸せな家庭だった。だが、母が他界してから、父は変わった。男一人で、俺を育てようと、今のままではまともな生活はできないと花屋の仕事を辞め、今までの努力も自分のデザインした花で多くの人を笑顔にできる未来も諦めた。アルバイトを掛け持ちすると同時に、会社員になれるようにいろいろな企業の面接を片っ端から受けて行った。だが、すぐには、うまくは行かず、俺たち家族の生活は、貧しくなった。限界だった。母の死とどうにかして息子と自分の腹を楽に満たせるか考えて、考え続けて、考えすぎて、父は壊れてしまった。自暴自棄になり、いつも笑っていた目からは、ハイライトが失われていた。

そして俺が小三の時、父は、詐欺の売り子をしてしまい、

捕まった。一人暮らしのおばあちゃんを狙った犯行だった。ああ、こんなにも人とは変わってしまう生き物なのかと思っただ。俺自身も死というものを知った後は、夜中布団が涙でぐちよぐちよになるほど泣きながら、枕に八つ当たりをしていた。でも、父が俺のために頑張っている事実を知っているから、これ以上、父に心配をかけないように、どこかで見ている母にも心配をかけないように、一人の時以外は、陽気に笑顔でふるまっていた。その時からだろうか、人に同情されるのが嫌になった。励ましの言葉をかけられても、どうせ形だけの言葉で、取り繕っていると感じてしまうようになった。それでも、この世界は、人と関わらなければ、生きていけない。人はそういう生き物だ。そのために、頑張って話すようになってしまおうと、相手が自分のことをどう思っているか過度に考えるようになってしまった。結果、本当に自分のやりたいことを、人に伝えて、続けることができなくなった。いつも自分の意見はまちがっているのかも思うようになってしまった。挑戦しようとしても、ブレーキが、かかるようになってしまった。

今日は、やけに昔のことを思い出すな。あの日と同じ入道雲が見えるせいなのか。いや、ポジティブに行こう。せっかくここまで来たのだから、ベンチに座ってないで町を歩こうと立ち上がり、街の探索開始の第一歩を踏み出そうとする。突然視界が真っ暗になり、気づけば、湖面の上に立っていた。は？ どういうこと？ 地面もないのになんで立っ

られるんだ？ 足をパタパタ動かしてみる。なんだこの怪奇現象。足がすくんだ。「めっちゃアニメみたいじゃん」と勝手に思ってもないことを口にした。

なんか自分の思考を捻じ曲げるのが癖になってきたな。はあ、ここでもまだいるのか入道雲め。入道雲は「どこにいても私の勝手です」とかすました顔をしてやがる。まあ俺の妄想だが。

人の目を気にしすぎて自分の挑戦したいことを言えなくなったのはいつからだろう。影と睨みあった。突然、自分の影が変形した。いや、俺の影と別にもう一つ影が見えた。はっと見上げると、少年が上から降ってきて、着地した。彼は、服を調べて、胸の前に手を持ってきて一礼した。

「ようこそお越しくれました。あなたがこれからの自分を進みたいのなら、この先を進んでください」

今ここで進んだら、俺は変わることができるのか？ 何か怪しくて、不審者に声をかけられたような状況だったが、相手が子供だということや、ここで、行かなかったら、必ず後悔すると何の根拠もないが、確信していた。そして、少年に向かって「進む」と言った。久しぶりに本音が言えた。少年はニコツと微笑み「では、ついてきてください」と言っていて、目の前の湖に足を踏み入れた。すると、水の表面に飛び石のようなものが浮かび上がってきた。少年は軽々と飛び、一つ目の石の上に着地した。俺もそのあとに続こうとするが、石と石の間は見た感じ間隔がかなり広い。思いつきりジャンプ

してもとどくかどうか。いや。ここまで腹をくくったんだ。帰宅部をなめるなよ。これでも毎朝、車と競争しているんだぞ。

はあはあ。きつい。少年は、息ひとつあがらずに、俺の体力の回復を待ってくれている。こんな大変な道に連れて行くから勘違いしていたが、意外と優しいんだ。あたりを見渡すと、青い花畑の真ん中に、オランダの風車のような建物がそびえ立っていた。それ以外は、何も見当たらない。そう言えば、中学で変な噂が広まっていた。ある日突然男が霧のように消えた。この男の関係者は町中を探し回った。すると、数時間後彼はけろっと帰ってきて、ずいぶん爽やかな、悩みから解消されたような顔で「オランダの風車と青い花畑」とつぶやいたそう。周りがどういことだと説明を求めると、彼は発言の内容を思い出せないと行って、彼の数時間の失踪はいまだに、詳しいことがわからないらしい。という噂だ。その発言にこの景色は、そっくりだ。どこまでも広がる青い花畑。ほんのり、朗らかな花の匂いがする。風車は絶えず回り続けており、一回り一回りが力強い。さすがにこんな景色は俺が暮らしていた世界とあまりにもかけ離れている。言い換えると、ここの世界は余りにも澄んでいて、優しい。少年は、俺の息が整ったのと確認して、真っ直ぐその建物に向かって歩いた。俺も後をついて行った。

沈黙が続いたので、目の前の彼を観察してみる。どう見ても、一五〇センチほどの少年は、さっきの驚異的な運動能力

と、威厳をもっているため、俺よりはるかに、大人っぽく見える。改めて、少年をよく見る。銀色の長髪に、着物のような服装をしている。今では、あまり見ない服装をしている。そして、スカイブルーの瞳と、それを際立たせているかのような、白い肌。普通の人間とは、別の独特ななんとも言い表せることのできない雰囲気をもっていた。少年は、建物の前で急に止まって、振り返り、言った。「自分で変わる選択をしたのなら、この扉は、自身で開けてください」

さっきまでの大人っぽさが少し薄れ、真っ直ぐ純粋な目をむけてきた。覚悟を決めないとな。俺は、思いつき扉を開いた。

ギギギー。建物の中は、俺の大好きだった花屋だった。奥には花をさしてある花瓶がずらりと並んでおり、窓からは、広大な青い花畑が見える。天井には、たくさんのドライフラワーが吊るされていた。すぐ目の前にあるのは、木製の机と椅子。花屋兼喫茶店みたいところだろうか。後ろからついてきた少年は、改めて、俺に向かってお辞儀をし、「いらっしやいませ。私は、案内人のネモと申します。この空間は、お客様が、暮らしていた世界とは、別の世界。いわば、虚像の世界です」

と言った。今の説明を聞いても、この状況について、わからないことが多すぎる。どうやったら、元居た場所に帰れるのか。これから、何をするのか。混乱している様子を見て悟

ったネモは、「立ち話もなんでしようし、この椅子に座って少し待っていてください」と言い、一番奥の扉を開いて、別の部屋らしきところに入って行った。

ああ、やっぱりこの空間が好きだ。目にはたくさんの花が映っている。父が経営していた花屋に俺も幼いころよく行っていた。その店で、注文を受けた品をデザインして一生懸命作っている父の姿が好きだった。でも、父は、俺は、それなりの生活ができるようにと、自分の長年の夢だった店を兄に渡した。父の兄も、それほど裕福というわけではないが、あの事件以降、俺ら家族のことを心配して色々と行動を起こしてくれた。お金を父の口座に振り込んだり、ご飯を留守番の俺に持ってきてくれたりしていた。だか、彼も彼の家族がいる。父は、兄の子供が私立の高校に行きたいと言っていたのを聞いて、振り込んだお金を返すようになった。そしてより忙しくなった。父は、朝五時に家を出て、俺が寝た後の深夜に帰ってくる。そのため、あまり会話はできなかった。その代わりに、俺が朝起きたら置手紙があり、それが会話の代わりだった。時間が経つにつれ、父は、より忙しくなっていた。そして、父が事件を起こす一週間前に手紙のやり取りは途絶えてしまった。

五分ほど経つと、ネモが、ハーブティーと洋菓子を持ってきてそれを机の上に置いた。そして、話を始める合図に視線を合わせてきた。初対面で向かい合わせに話すなんて、緊張するなあ。向こうから話し始めてくれるかな。

「俺の名前は葉空。きつきの説明だけじゃまだわからない。結局どうすれば、変わるんだ」

勝手に口が開いた。ネモは、その言葉を聞いて、顔をしかめた。そして、ハーブティーを一口飲んで言った。

「僕の仕事は、案内人。いわば、相談窓口です。葉空さん同様、今まで生きてきた中で、なんらかのことで悩んでいる人の相談を受け、この虚像の世界の中で、お客様自身で、今後の人生の向きを選択して、今後の人生の第一歩を踏み出すのをサポートします。そして、お客様は、悩みを解消すると、お客様自身が、今後の人生のスタートにふさわしいと感じているところへ強制的に転送されます。それと同時に、この世界の出来事は、時間が経つにつれて忘れてしまいます」

ここにきて、あの噂の正体がなんとなくわかった。あの男は、このネモさんがいる虚像の世界に迷いこんでしまったから。男が今までどこに行っていたかがわからなかったのは、記憶がなくなるから。ということは、解消すれば、この世界から出られるということだ。でも、俺はこれまでの短い人生の中で、嫌なこと、悲しかったことはあるけれど、明確に今までの人生の生き方を変えようとして、悩みもがいている記憶はない。それでも、最初にネモに聞かれて、進むと答えたのは、人間の心理上、人に、こうしなくていいのと今まで自分が考えたことのない提案をされると、試したくなり、妙に納得し、やらないと、という気持ちになるからだ。もちろん例外もある。ある人は、今まで進んできた道は信用しているた

め、人の意見にいちいち左右されない人もいる。でも俺はこうではない。自分自身、こういうことは、深くは考えようとしなかった。むしろ、考えたくもなかった。もう、あんな風に笑われたくない。

「お客様は、今後どのような人生を歩みたいかについて何か考えていることはありませんか」

とネモが質問してきた。俺は、
「特には、ありません」

と答えた。ネモは、少し顔をしかめた。

「じゃあ、なんではじめに進むと答えたのですか」

「なんとなく、後悔するかもと思ったから」

考えてみれば、失礼な話だ。ネモは、案内人という立派な仕事で、悩んでいる人が迷い込んできたと思ったら、何に悩んでいるかわかりませんと言われるんだ。申し訳ないと思いい、今まで、合わせていた視線をそらした。すると、しばらく沈黙が続いた末、ネモは口を開いた。

「お客様がくる前に、お客様のことは、知っていたはずなのですが、これほど重症だとは思いませんでした。葉空さん、今まで、思考と発言が食い違っていることはありませんでしたか。例えば、勝手に口が動くなど」

「こんなこと毎日のように起こります。なぜ、わかったのですか。口と脳が別のことをしているそんな変な気分でした。でも、いろいろな気を付けてみたのですが、直せなくて、もう諦めていて気にしないようにしていたのに」

「葉空さんの表情と言っていることが、あまりにも合ってしまったので。なぜこのようになってしまったのか、わかりますか？」

俺は、思い出せなかった。思い出したくなかったほうが正しい。でも、思い出して乗り越えることができたらもっと生きやすくなるのかな。心の中で、このような思考を繰り返している、ネモは、空になった俺のカップを持ち、急に立ち上がって、さっき入って行った奥の部屋に入り込んだ。そして、新しいハーブティーを持ってきた。そのカップを俺の前に置き、「どうぞ」と言った。その言葉を聞いて、俺は一口飲んだ。甘く優しい香りが、ふわっと広がり、味も、ほのかな甘みを感じられた。すると、突然視界がぐらりと動き、俺は青い花畑の中にいた。

オランダの風車の周りにあつた青い花畑のような空間だ。瞬間移動したのか。もしくは、ネモは、さっき飲んだハーブティーに何か仕掛けをしていたのか。催眠薬的な。試しに、ほほをつねってみる。痛い。夢じゃない？すると、人の気配を感じた。後ろを恐る恐るふりかえると、男の子が、立っていた。その男の子は、見慣れた制服を着ていて、頭の上に帽子が乗っていた。その制服は、俺が通っていた小学校のものだ。そして、その帽子には、大きく葉空と書いていて、小学四年生とわかる。赤いラインが入った帽子だった。さすがに小さい頃の俺との共通点が多すぎて、なんらかの現象で昔の俺が目の前にいるとしか思えなかった。

この頃の俺は、父が詐欺で捕まって懲役五年だったため、伯父に長い間引き取ってもらっていた。今でも、引き取ってくれたことは本当に感謝していること。だが、違和感はない。引き取ってもらった五年間も、俺は、この家族の人ではないのだとそう思っていた。だから、迷惑をかけないよう気を付けていた。息がつまりそうだった。伯父も、裕福ではなかったのに、俺の一人部屋を用意してくれた。とても狭かったが、一人になる時間を作れるように、配慮してくれた。学校から帰ったら、すぐ部屋に籠って、ご飯、お風呂、トイレの時しか基本的に部屋の外に出なかった。リビングに行く、伯父の家族三人が話していて、その光景が目映るたびに、俺は一人なんだと思うのが嫌だった。部屋から出てリビングに行くと、とにかく、肩身の狭い生活をしていた。伯父の家族は優しい人たちだった。いとこは、俺よりも年上で、俺の数少ない遊び相手だった。俺を実の弟のように接してくれて嬉しかった。でも、受験勉強が忙しくなってきた、遊んでくれる回数が減ってしまった。そして遊ぶことはなくなってきた。俺は、学校の友達なんていなかったから、唯一遊んでくれる兄のような存在の人を失い、ますます一人になった。そして同じ時期に小学校では、いじめが始まっていた。小学三年の時に、俺の父は犯罪者だという情報が学校中に広まっていた。小学一、二年の時に友達だった人も離れて行ってしまった。初めは、怖がって話しかけようとしなかったが、クラスの中心のような奴らが犯罪者の子と俺のことを呼ぶよ

うになり、俺は悪者扱いされた。戦隊ものや魔法少女の真似ごとをして俺を悪役だと決めつけて、ありもしない噂を流された。今思うと、まったく似ていないヒーローの真似だ。いわゆる偽善者に属すると思う。それでも、幼いころの俺は、実際みんなと違う家庭環境を思い詰めていたこともあり、自分分は、人と違うんだと思うようになってしまった。みんなから無視されて、ここにも俺の居場所がないんだと思った。また、聞こえるくらいの音量で陰口を毎日言われた。悪者に何を言っても許されると思われていた。

「男で僕って言うやつ正直ダサイよね」

「怖いとか嫌だとか言う言葉を使う人ってなんかかっこ悪いよな」

「男が花屋って変だよ」

「両親に育ててもらってないの」

……とか言われて、普通じゃない自分を人前でさらけ出すのが怖くなった。もっと馬鹿にされて、もっとひどいじめをされるのではないかと。俺は、深く傷ついてしまった。

小学四年生の梅雨時期、俺は、このクラスの雰囲気、普通じゃない自分がいやになって、学校を抜け出した。もう我慢の限界だった。家にも帰りたくなかった。本当に俺は悪いことをしたのか、なんで、俺ばかりこんなことを経験しないといけないんだ。雨の中走って走ってたどり着いた先は、川だった。行く当てなかなかったが、勝手に足が進んでたどり着いていた。ああ、もうつらい。俺だって、十分頑張ったん

だ。もう終わりにしたい。生きていく意味なんてないんだ。自然と笑いがあふれてきた。涙は出ているのに「なんで俺はいつも独りなんだ」叫んだ。聞いたことがあるが、自殺する人は、死にたいと思っっている人だけでなく、もう何もかも終わらせたいと思っっている人もいるらしい。川のほうに勝手に足が進んだ。そして、雨雲を見上げながら「全部お父さんのせいじゃん」と言っってしまった。一番言いたくない言葉だった。そこからの記憶はあいまいだ。こんな言葉を人生最後の言葉にしたくなかった。俺は、父が大好きだった。仕事している時は特にかっこよかった。そんな父に憧れていた。仮に犯罪者だとしても、父は父だ。シングルファーザーで、俺のためにいっぱい頑張ってくれていたのは知っていた。それでも、俺は父のために何か行動を起こそうとした記憶はない。ご飯を作ってみたり、洗濯物をたたんであげたりしたこともなかった気がする。申し訳ないと思っ、いつか謝りたいと思っっていた。死ぬのは謝っってからだ。それまで我慢しよう。その時の思考は、今考えていると変だった。死のうとしていたのに急に考えが変わった。そのまま学校に戻った。先生たちは心配しながら一言言っ。「心配したんだから。今後は、周りに迷惑かけないけません」と。ショックだった。今まで、誰にも心配をかけないように生きてきたのに。伯父の家族にもっと迷惑をかけてしまう。いろいろな感情がごちゃごちゃになった。なんで、こんなことになったの。俺は普通の子じゃないの。誰か助けて。苦しい。ごめんなさい。居場所

がない。誰か。本当の俺を見てよ。俺は、悪者なの。俺自身をだれか見てよ。視界がぐらっと傾いた。だんだん視界が狭くなっっていく。目が覚めると、保健室のベットで寝ていた。カーテンが開き、保健室の先生がのぞき込んできた。俺は立ち上がり、先生のほうに歩いて行っ。先生は体調を聞いてきた。俺は体を動かし、大丈夫だと答えた。先生は「体調のほうは問題なさそうだけど、なんか最近嫌なことでもあったとかないかな？」と聞いてきた。「特にはありません」なんだ、いじめられてるので助けてくださいって今なら言えそうな雰囲気なのに。なんで勝手に口が動いたんだ？「ご心配をおかけして申し訳ありませんでした。ありがとうございます」と笑っ、保健室を後にした。廊下を歩きながら、さっきの現象について考えながら、窓の外の景色を見ると、みんなはもう下校のもう放課後の時間だった。同時に、窓に反射した自分も映っっていた。その顔は、なんとも変で、笑っっているのだが、ひきつっっている笑い方をしていた。そう思っながら、教室にもどると、クラスメイトがほとんど残っており、俺を見っすぐ「流石、犯罪者の息子さんは、学校を抜け出すとか頭がおかしいね」と口々に言っ。いつもなら腹をたてて無言で帰るはずなのに、また勝手に口が動いて、「迷惑をかけてごめんなさい」と一言言っ。みんな、固まっ。俺も、脳内では、馬鹿にされていると思っっているが、口では、謝っっている。その状況に頭が一瞬真っ白になった。すぐ俺は、ランドセルを背負っ、教室からすぐ出た。その

日から、どんなに馬鹿にされても、腹が立たなくなった。誰にも干渉してほしくなくて、教室の隅で、本を読んで、まったくしゃべらなくなった。つらいと思わなくなった。感情の糸がぶちっと切れたような音がした。カラフルだった街並みもモノクロな世界に見えた。

つらかった小学校生活の二の舞にならないように、中学校に上がる時には僕だった口調を俺に変えた。人の前で、弱音を吐かないようにした。陰口で言われたことは、改善した。もう二度といじめられないように。

目の前の俺が言った。
「僕、苦しかったよ。馬鹿にされるの。本当のこと言いたかったよ」

気が付けば、元居た店の椅子に座っていた。向かいには、ネモがいる。

「記憶の旅はいかがでしたか。葉空さんが、飲んだのは、ナスタチウムというハーブティーです。ナスタチウムの花言葉は『困難に打ち勝つ』です。先ほど、勝手に思っていないことが口に出ると、おっしゃっていたため、過去に何かあったトラウマになっているせいなのか。それを乗り越えることができましたら、その癖は、なくなるのかと勝手に予想して、ハーブティーに少し細工をしました。魔法のようなものにとらえてもらって結構です。安心してください。体にはなんの害もありません」と彼は言った。体中の血が沸き上がった。

「そもそもなんでこんな過去を俺に見せたんだ。今でもいじめられないように、周りに合わせて生きていて、まあまあ友達もいる。今この過去を乗り越えて、自我を出したら、またいじめられるかも。そもそも父がこんなことをしなければ」

ネモはそんな混乱してぶつぶつ言っている俺を見て、「落ち着いてください。本当に自分の考えを言っただけでそうなると思いますか。多分そんなことはないと思います」と、さっきからのしかめた顔と真逆な、優しい顔でほほ笑んだ。だって俺はそれで小学校の時くるしんだぞ。ネモは、どういう意図で話しているんだ。ネモは、ハーブティーを一口飲み、再び俺に目を合わせてきた。

「小学生の一部はまだ善悪の区別があいまいで、悪いことでもみんながその方向に行っていたら、同じ方向を向く人がいて、その習性を肌で葉空さんは感じたのかも知れませんが、でも、世の中そんな人ばかりではないですよ。人類すべてが葉空さんを拒絶することはありません。だって、自分の意見を言っただけで、今まで過ごしてきたことは無駄にはならないはずですよ」

確かに。今までは、小学校という小さなスケールで考えていたが、過去を引きずりすぎると前に進めない。そもそも人間は、未来にしか進めないんだ。大人になって、意見を言う場はたくさんある。その中で、相手の意見を馬鹿にして、いじめめる大人がいると思うか。いたほうが、恥ずかしいし、かっこ悪い。過去を引きずって、今までと同じ生き方をしてな

んのメリットが残る？ 何も残らない。それだったら、過去の自分を乗り越えて進んで行くほうがいいに決まっている。自分なりに結論をだすと、ネモは、それを見て「初めてお会いした時より、顔が大分よくなっていますね。霧が晴れたようなそんな顔をしています。自分なりの答えができましたか」

僕は、大きくうなずいて、

「もう、自分を過度に偽ることはしたくない。本当は、父の仕事姿が好きだった。でも、友達から男が花屋ってと言われて、自分の考えは、間違っているのかもさらに思うようになってきて、余計に、自分の気持ちを相手に言うことが、怖くなったんだ。でも、過去を知って、ネモが、僕の話を実剣に聞いてくれて、過去を乗り越えられた今なら言える。僕は父と同じ職業に就きたい。もう、自分のことをはっきりと伝えるようになりたい」

それを聞いたネモは、ここにきて初めて、少年のような満面の笑みをしていた。

「いい決断ですね。お客様の進むべき道がいい方向に向いていることを祈ってこの花を差し上げます。花言葉は『成功』です」と言って、僕を連れ玄関のほうに誘導して、青い花、ネモフィラを渡してきた。そして、ドアを開けた。目の前には手に持った花と同じ花畑が広がっている。ネモは、「行ってらっしゃいませ」と言って、指を鳴らした。その直後、ものすごい量のネモフィラの花びらが舞った。

目を開けた。そこは、父が前働いていた店、ミリオンベル

だった。あたりはもう夕方、店の花についている水滴にオレンジ色の夕日がキラキラと反射していた。あれ、僕は今まで何をしていたんだ。なんだか心が軽い。カランコロン誰か店にきた？ 伯父が仕事しに来たのか。それにしても時間が変だ。いろいろ考えるうちに、その人が店に入ってきた。父の姿が目の前にあった。父は、とても驚いた顔をしていた。

「葉空、なんでこんなところにいるんだ」と父が言った。こっちはだっぴり知らないよ。なんでこんなところにいるんだ。父になんと説明しようか迷って頭をかこうとした。右手を動かすと手には青い花が握られていた。これは、ネモフィラだ。そう心の中で思ったら、自然と今まで体験したことを次々と思い出していった。僕は、ネモのところ、大切なことを決断してきたんだ。父に言わなきゃ。父の目をしっかりと見て言った。

「ごめんなさい。お父さんが忙しい時、僕自身に何かできることはないかって、何かできたんじゃないかって、ずっと考えていた。本当に、ごめんなさい。お父さん一人に、全部抱え込ませて。僕、フローリストになって、この店で一緒に働きたい」

やっと言えた。父は、最初は、僕が急に話し始めたから、びっくりはしていたが、だんだんと、優しい表情で聞いてくれた。父が釈放されてから、あまり

家でしゃべっていない。お互い過去の話をしたくなかったのだろう。やっと、父に本音で話せた。今まで言えなかった

ことを言った。解放された気分だった。父は、僕の話聞いた後、目をつぶってこう言った。

「ごめんはお父さんが言うべきセリフだよ。葉空は、何も悪くない。それなのに、今まで苦労を掛けた。お父さんのせいなのに、いろいろ背負わせて、本当にごめんなさい。もっと早く話せばよかった。でも、過去の話をして、もっと葉空に嫌われるのが、怖かったんだ。不甲斐ないお父さんで迷惑ばかりかけたね。今までのことを許してほしいとは思ってない。ただ、償わせてくれ」

父の顔にも僕の顔にも涙が流れた。僕は、青い花を見てこう言った。

「ありがとう、ネモ」

それから一年後、僕は、フローリストになるために勉強に励んでいる。失敗することもある。それでも、前を向いて生きていく。今は、夏だ。一年前僕は、急に生き方を変えた。なんで変わったかは知らない。でもその日から、僕はあんなに嫌いだった入道雲が好きになった。あの堂々としている姿が今では自分の生きる理想となった。でも、ひとつだけ気づいたことがある。僕と入道雲は、似ているところがあると思う。入道雲は、雷や激しい雨を降らせる厄介者だが、過ぎ去ると爽やかな青空が広がる。人はそれを見て、美しいと歓声を上げる。僕も、小さいころ嫌なことを言われて批判されたが、今は、高校の友達に本当と自分をさらけ出すことができようになる。友達も、僕のことを肯定して、間違

っていたら、教えてくれるいい友達に巡り合えた。僕の人生は、これからも続いて行く。自分の考えを偽らない人生を歩んで行こう。苦しい時もあるけれど、精一杯生きて行こう。僕の勉強机には、乾燥した、ネモフィラが飾ってある。

Amore macchiato

伊集院高等学校 二年

畑山 倫平

夏が近づき次第に日の出も早まっている、五月の明け方。一人の青年が、まだ息の白い街を歩いていた。長らく革靴の硬い足音を響かせて、あるテナントビルの前で立ち止まる。

薄暗い階段を上がって二階にある喫茶店『薄明』の入口に立った。小さく深呼吸をして肺の空気を入れ替え、肩の力を抜く。まだ閉店の看板がかかったままの冷えた扉を開けて、青年はほのかに明るい店内へ足を踏み入れた。

涼やかなドアベルの音。早くから仕事を始めていた一人の店員が、磨き上げた灰皿を置いて振り返った。耳にかかった髪をかき上げ、青年の前に立って僅かに見上げる。

肩ほどの亜麻色の髪と濃い茶の瞳。端正な顔に人懐っこい笑顔を浮かべて、店員は青年の暗い目を見つめた。

「新しく入った人だよ。店長から聞いてるよ」

青年の元に歩み寄ると、店員は馴れ馴れしく言った。

「熱烈的なプロポーズをされたとか何とか」

「そこまではしていません」

その答えに、店員は嬉しそうに笑みを浮かべる。

「残念、店長はまだ来てないよ。僕は弓削深苑(ゆげみその)。僕はこの職が長いから一応先輩として沢山頼ってくれて構わないよ。あ、別に君に後輩然としろと言うわけじゃないからね。なんなら僕が年下だし」

そう自己紹介をして、青年にも視線で促す。

「規矩です。規矩業身(きくわぎみ)」

彼は素っ気なく名乗って頭を下げる。弓削は笑顔のまま、ずいっと規矩に顔を寄せた。鼻先が触れるほどの距離であまりに真っ直ぐ覗いてくるので、思わず彼は一歩後退りする。

「君の瞳はコーヒーみたいだね」

それを見て笑いながら言う弓削に、規矩は顔をしかめた。

「…それは褒めてるのか貶してるのか、どっちですか」

「やだなあ、僕、コーヒーは好きだよ」

目を細めて楽しそうに言う弓削を、規矩は見つめる。その視線に気がつく、にやにやとまた違った笑みを浮かべた。一つ咳払いをして、弓削は手を差し出してきた。

「仲良くやっていこうじゃないか、規矩くん。規矩くんって

なんだか語呂が悪いね。きつくんと呼んでもいいかな？」

「規矩でいいです」

「真面目だなあ。もっと楽にしていよ」

言われると規矩は肩をすくめ、伸べられた手を取った。

「じゃあ規矩、これからよろしく頼むよ」

「よろしく願います、弓削さん」

二人は軽い握手を交わした。ほんの小さな予感と共に。

それから一年が経った。七月の初旬、雨が降り頻る空気の重い朝。規矩は傘を手に職場に続く道を歩いていた。

突然後ろから誰かにぶつかられ、振り返る。

「悪いね、入れてくれないか」

規矩に寄りかかるようにして、弓削が立っていた。

顔の上にかざすワイシャツの袖はひどく濡れている。下に履いた風通しがいいはずのリネンのズボンも、雨粒を吸って重く揺れていた。規矩は自分の隣に弓削を入れた。

「いやあ、家を出た頃は晴れてたんだよ」

「折り畳み傘ぐらい常備すればいいだろ」

話しながら歩いていると、数分でビルに辿り着いた。傘を畳む規矩の横を、階段の方へと弓削がすり抜けていく。

その時見えた表情に、規矩は違和感を覚えた。

「どこが悪いのか？」

弓削が一瞬立ち止まる。顔は陰になって見えなかった。

「……そんなことないよ」

弓削はそれだけ言って店に上がる。規矩もすぐ追った。

ちらほらと客が入った午前を過ぎて、二人は休憩室で顔を突きあわせた。「雨も強いままだし、もう客は来ないだろう」と言って、店長が長い暇を与えたのだった。

規矩は腕組みをして壁にもたれかかり、弓削は椅子に座って相對する。扉越しのホールで流れているジャズと、雨粒が壁や地面に叩きつけられる音がBGMになっている。

天気と政治の話が終わると、途端に部屋は静かになった。

「結構伸びてるな。切ろうかなあ……」

前髪をねじりながら呟く弓削。それに規矩は曖昧な相槌を打っただけだった。弓削は何か言いたげな顔をする。

規矩自身、この時間にどこか居心地の悪さを感じていた。いつもよりずっと、二人の話が弾んでいなかった。どうにかしたいと思う感情を、重たい無気力が押し潰す。

「……もうちょっと話してくれてもいいのにさ」

弓削はそう言う口を閉ざした。言い終わるのと同時に、まるで待っていたかのように雨が急激に激しさを増す。音が途切れることなく続き、部屋の中はほんのり暗くなった。

「——君にはバレたみたいだけど」

雨音の濁流が見せた間隙に、たった今思い出ただけと言わんばかりの何気なさで、弓削は口を開いた。

「昨日、彼女と別れたんだ。それが円満とは言えない互いに辛い別れだったから、これでも少し傷ついているんだよ」

その言葉が、今までの会話の中でもわずかに異質な響きを持つていることに規矩は気づいた。彼はちらりと弓削に視線を向けた。数瞬の間目を合わせ、すぐにまた下に戻す。

弓削を見た時、規矩の口の中には苦い味が広がっていた。すぐにでも吐き出して洗い流したくなるような苦みだった。堪えきれず、彼はおもむろに口を開いた。

「……それは俺に何を期待しているんだ。慰めか？ 友人の紹介か？ それとも、ただの自分語りなのか？」

弓削が規矩を睨んだ。規矩はすぐに口を閉ざして、自分の発言を恥じた。視線から逃げるように目を逸らす。

「……いいさ、分かってたんだ」

手元を見たまま吐き捨てるように弓削が言う。その声が、規矩の耳を刺す。小さな後悔が心の底に転がった。

「弓削……」

「何も言わないでくれ」

先を塞ぐように弓削が言い放つ。

口を閉じ、規矩は浮かせた背中をゆっくりと壁に戻した。

弓削も俯いたまま黙っている。沈黙がぬらりと現れ、二人を隔てた。淀んだ空気が肺を満たし、呼吸さえも億劫にする。

規矩の全身に湿気が纏わりついて、溺れているかのように息苦しい。これだから、規矩は雨の日が嫌いだった。

「まあ……僕のせいか……」

弓削の深い溜め息が、規矩の胸を抉った。

ゴールのない時計の針がぐるぐると回る。動けない規矩の肩はさらに重くなっていく。そのまま数分が過ぎた。

弓削が脚を組み替え、机に頬杖を突いた。ゆっくりと息を吸って、吐いて、また吸って、やっと声に出す。

「君が好きだ」

その言葉は、ネジのように潜って規矩の心の底に届いた。いくつかの相反する感情が、せめぎ合いながら溢れ出る。

規矩は弓削を見た。弓削は目を合わせようとはせず、ただ机の一点を見つめていた。規矩はゆっくりと口を開く。

「すまない」

視線は床に向いて動かない。弓削も同じ場所を見つめて、唇を蠢かせた後に「そっか」と呟いた。

再度沈黙が降りて、空気が粘りと重みを増す。

弓削は組んでいた脚を解いて体を机に倒した。枕代わりの両腕に額を寄せ、眠るように目を閉じる。それを確認して、規矩は壁から離れた。そのまま部屋の入り口まで歩く。扉のノブに手をかける寸前で、びたりと止まる。

「……弓削は、駄目なんだ」

しばし悩んで、彼はそれだけ言うともた顔を上げた。ドアノブを握り、ぐいと押し開ける。その瞬間、人一人分の温度がぬるい部屋から抜けていった。代わりに、少しだけ乾いた空気とジャズのリズムが潜り込んでいく。

「何なんだよ、それ……」

投げやりな弓削の声が飛ぶ。振り返る前に、扉が閉じた。胸の痛みと口の苦さが離れることはなく、一歩一歩が鈍重に響いた。規矩はよろめくようにしてホールに入る。

やはり客はいない。無人の空間は広々として見えた。

「どうした規矩。まだ休んでいいぞ？ どうせ客は来ないだろうから。この大雨は、しばらく止まないらしい」

部屋から出てきた規矩に、店長の淵藤仄香（えんどうほのか）が話しかける。床や机やカウンターを掃除し終えて暇になった淵藤は、商売道具であるコーヒポットを磨いていた。

「弓削は？」

淵藤が問う。規矩はただ首を振ると、無言でカウンターに座った。何をしてもなく、下を向いて黙り込む。

淵藤はしばらく規矩の様子を窺うに留めていたが、器具も手入れし終えて手持ち無沙汰になると、彼に声をかけた。

「淹れたげようか」

「……ありがとうございます」

やっと顔を上げて答える規矩に、彼女は笑顔で頷いた。

温めたサーバーにセットした布のフィルターで、蒸らしたコーヒー粉を濾して注ぐ。一連の作業を流麗に進める淵藤の姿に、規矩は見惚れたような溜め息をついた。

その時間は、規矩にとつて実に贅沢な至福の時間だった。

何と言つても彼は、その技術に惚れ込んでここにいた。

五分ほどで規矩の前にソーサーとカップが差し出される。

彼の薄暗い瞳によく似た水面がカップの中で波打つ。湯気と共に立ち昇る香りを吸い込み、縁に口を付けた。

一口含んで飲み下し、小さく息をする。その様子を淵藤は微笑みを浮かべて眺め、自分のカップを傾けた。

彼女のカップと規矩のカップがソーサーに置かれ、かちりと陶器がぶつかる鋭い音が二つ、重なって生まれる。

「……美味しいです」

規矩が呟く。淵藤は満更でもなさそうに笑った。飲み干す頃には、彼の表情も少し和らいでいた。

規矩が席に着いてから、いくらかの時間が経過した。空気中を満たしていた雨粒はぱらぱらと音を立てる程度になり、

濁っていたジャズもすっかり澄み渡っている。雲の隙間から細く射す光が、ガラスをすり抜けて磨かれた床を這った。

淵藤は、規矩に向けていた視線を自分のカップに移した。

「迷いは覚めたかい」

そう言つて、また規矩の瞳を見つめる。

「……すみません。もう大丈夫です」

思い詰めた顔で答える規矩に淵藤は笑みをこぼすと、手元ですっかり冷めてしまったコーヒーを一息に飲み干した。

「そうは見えないけどね。老婆心だが、話だけでも聞くよ」

「……なら、一つだけ」

カウンターに肘を突いて身を乗り出す淵藤に、規矩は長く頭の中に渦巻いていた悩みを塊で吐き出した。

「恋は、どうすれば愛になるんでしょうか」

それを聞くと、淵藤は呆然としたように口を開いて、数回目を瞬かせた。そしてすぐに口元を引き締め、目を細める。

「君は馬鹿真面目だなあ……そんなこと悩む意味はないよ」
ソーサーを置いて、淵藤はふっと笑う。

「……まあ悪くはないけどね。悪くないってことは、つまり善いことだ。私だって、意味がなくても悩むことはあるし。

……さて、君の若々しい悩みについてだが、私に言えることはない。代わりに、私の話でも聞いてもらおうかな」

淵藤はカウンターをぐるりと迂回すると、規矩の座る隣の椅子に真っ直ぐ前を向いて座った。彼女の方へ向き直ろうとする規矩を、淵藤はひらひらと手を振って止める。

「こつちを見なくていいよ。あんまり私らしくない顔をして
いる気がする。自分がまだ、こんなにも乙女だったなんて。
やだよ、私は大人のお姉さんで売ってるのにさ」

そう言う淵藤に従って、規矩もカウンターの方向を向いた。
顔を合わせることなく、淵藤は話し始める。

「こうやってさ、自分に余裕が出てきた時には、恋とか愛み
たいなことを真面目に考えるのだから人間としては善いこと
だと私は思うんだよね。単純な動物じゃなくて、心を大事に
している生き物でいたいから」

淵藤は左手の薬指の付け根で輝くプラチナ製の指輪に触れ
ながら、少しずつ言葉を文章として紡いでいく。

「前言ったと思うけど、この指輪、今の恋人とのペアリング
なんだ。事実婚ってやつ。あの子はそれを、喜んでくれた。
いつもツンツンしてるのに可愛いよね。一生を連れ添いたい
って思ったよ。事実婚なんていう真似事をしたって私は何ら
満足しなかった。大人気ないけど、結婚したい、縛りたいっ
て気持ち芽生えてきたんだ。愛ゆえに言えば聞こえは
いいけど、その愛だつて出処が分かっちゃいない」

規矩は、淵藤が自虐的に笑うのをその声から感じ取った。
「恋と愛の違いは何か。愛と性愛の違いは何か。性愛と恋の
違いは何か。その答えは分からない。違いがあるのかすらも
私は分かってないのさ。答えがあるなら教えてほしいよ」

初めこそ饒舌だったが、語るうちに話の方向性を見失い、
淵藤は唸りながらテーブルを指先で叩いた。

「え〜と…話はおしまい。役立たずで悪いね。まあ、これ
で分かったら。こんなことを悩んでも見苦しいだけなのさ。
君は若いから、悩んだっていいけどね。まったく、若いのは
いいね。この年になるとウキウキ青春もできやしない」

淵藤の話を頭の中で反芻していた規矩だったが、ふと彼女
の口ぶりに疑問を抱いて、規矩は思わず尋ねた。

「あなた、何歳のつもりですか」

それを聞いて、淵藤はおやと首を傾げる。

「君こそ、私をいくつだと思ってるんだよ」

規矩が淵藤を振り返る。彼女はそれに対して、満面の愛想
笑いを浮かべた。しばらく視線で意味の通らない会話を繰り
広げた後、逡巡した末に規矩は数字を口にした。

「二十…七、八ですか？」

規矩の言葉に、淵藤は吹き出して笑った。

「ははっ、気遣わなくていいさ。私はもうアラフォーだよ」
空っぽのカップが乗ったソーサーを取り上げながら、淵藤
は飄々と言った。呆気に取られて、規矩は目を見開いたまま
淵藤の顔をじっと見つめる。

「…：見た目は、信用ならないものですね」

絞り出すようにして、規矩は呟いた。

「それでも外見は大事なものだよ。大概人は初対面の相手を
見た目で判断するし、そのまま恋に落ちることだってある。
外見を磨く人間はそれを理解していると分かるからこそ信頼
できるし尊敬できる。ま、偽るのは善くないけどね」

淵藤は二組のカップとソーサーをシンクで水に浸け、食器洗いの道具を手を取った状態で軽く伸びをする。

「……しかし、肉体と精神の齟齬というのも、一つ問題か」

淵藤がぼつりとこぼす。規矩はその言葉に反応して淵藤の顔を凝視したが、しかし何も言わずただ考え込んでいた。彼女の視線に気がつく、誤魔化すように下を向いて言った。

「あなたは中身も見た目くらいに若々しいですよ」

「子供っぽいつてか？ くくく。まあ、その通りだよ」

お世辞に見せかけた本音を素直に受け取ると、淵藤は口笛を吹きながらカップを洗い始めた。ジャズに合わせながら、アドリブさえも挟む高度な口笛だった。

それを聴きながら規矩は机を見つめる。結局、淵藤が食器を洗い終えるまで、彼はそうし続けていた。

「煙たくしてもいいかな？」

淵藤が煙草とマッチを取り出して眼前に示しながら言う。こくりと頷く規矩に「どうも」と応えると、彼女は煙草を口に咥え、慣れた手つきで箱からマッチを一本抜き出した。

箱の側面で擦って、揺らめく小さな火を灯す。じわじわと降りてきたところで、淵藤はマッチから煙草に火を移した。

緩く長く煙を吸う。役目を終えて灰皿に落ちる燃えさし。完全に燃え尽きる前に、その上に灰が散った。

「煙草もコーヒーも恋人も、全部にどこか依存しているよ。そういうものに頼っていないと、実際私達は山あり谷ありの人生になす術がない。だからきつと、悪いことじゃないさ」

薄く煙を吐き出して、愉快そうに淵藤が言う。火に当たらないよう後頭部で纏められた長髪が、肩の上を過ぎて胸元に流れる。遠くの曇り空を眺めながら煙を吸う彼女に、規矩はどこかヴェンテージの陶磁器のような温もりを感じた。

「君も吸うかい」

「いえ、今は」

「ん。まあ百害あって一利なし、吸わなかったって損はない」
そう言いながら、淵藤は再度煙草を咥えた。

細長い煙が換気扇に吸い込まれていくのを見つめる規矩。ゆっくりと動く煙の筋に、時の流れまで遅く感じられた。

規矩の頭の中で思考が巡る。不快感はなく、心地良さまである思案だった。淵藤の話は、規矩の悩み事に蜘蛛の糸こそ垂らさなかつたものの、そこにはほのかな光が射していた。

また灰が落とされた。淵藤の咥える煙草は既に半分の長さまで短くなっている。香りが漂い、また消えていく。

「……悪くないなら、全くそれで善いのさ」

手元で煙草を燻らせながら、淵藤がぼつりと呟いた。

その時、突然休憩室の扉が開き、弓削が飛び出してきた。

「すみません仄香さん。私、気分が悪いので帰ります」

言うや否や、返事も聞かずに店の外の階段へ消えた。

「おう。お大事に……」

淵藤の声が虚しくホールに響く。弓削が出ていったドアを見据えると、目を細めて規矩の方を振り返った。

「追いかけてなよ、規矩」

淵藤がごく真面目な口調で言う。しかし規矩は、揺れ動く瞳でただ彼女を見つめ返すだけで、何も言わない。

「店は心配いらぬ。どうせ雨で客は来ないだろうし、元々一人で回してたんだけ。一日分の給料はちゃんと出してやるから、まあ私に任せて追いかけて」

淵藤は笑って、力瘤を作るように腕を掲げて見せた。それでもなお、規矩は弓削を追うことに躊躇して、ただ淵藤の顔を見つめるばかりだった。それに彼女はやれやれという風に肩を竦めると、脅すように煙草の小さい火を向けた。

「まったく、今更尻込みとはね。ほら、さっさと行きな」

言われてようやく、規矩はのっそりと立ち上がった。その目を見て淵藤は頷き、煙草を灰皿に押しつけた。

「いつまでも迷うな。頑張れよ」

背中を押してくれた淵藤に律儀に頭を下げ、彼は駆け出した。傘を片手に、濡れた階段を慎重に降りる。

傘を広げて、雨に吹きつけられながら外の通りへと出た。その時、馴染んだ声が背後から彼を呼び止めた。

「規矩」

振り返ると、階段の陰に弓削が立っていた。大雨の中で、傘も差さずに、濡れた瞳でただ規矩を見つめていた。

「入れてよ」

弓削は無表情でそう言った。雨に濡れた服が輪郭に沿って張りついて、曲線的な肉体の造形を際立たせていた。滑らかな素肌の上をいくつも大きな雫が流れていく。

規矩の目に、弓削は薄く輝いて見えた。うつすらと施されていたメイクも落ち、雲が覆う薄暗い空の下で今にも蒸気に溶け出てしまいそうなほど、か細いものに感じた。

その一瞬、彼は弓削から目が離せなかった。

規矩は何も言わず弓削に近寄ると、傘の縁を弓削の頭上に差し出して、なおも強く打ちつける雨粒から守った。

どちらからともなく、二人は歩き出した。

「…ごめん」

わずかに一歩前を歩く弓削が、ぼつりと言う。目線はじつと足先に向けられている。規矩は長く細い溜め息を吐いた。

「謝るくらいなら初めからするな」

そうは言うものの、弓削の住むアパートの一室に辿り着くまで、彼が弓削を傘から追い出すことは遂になかった。

「流石に少し寒いな…。待っていてくれ」

そう言って弓削はシャワールームに消えた。規矩は座卓と座布団一枚しかない部屋の前に、一人置いて行かれた。

天井のそばで大きく唸るエアコンを廊下から見つめ、規矩はただ立ち尽くす。傘に打ちつける雨の音が耳の奥に残っている。外ではもう雨が弱まり、部屋はいやに静かだった。くぐもったシャワーの音が家の奥から聞こえる。

「今日の私は濡れっぱなしだな」

しばらくして、着替えた弓削が戻った。笑いながら言い、部屋の入り口に立ったままだった規矩を中に引き込む。

部屋の電気は点いていない。曇り空が未だに明るかった。

灰色に光る窓際に並んで座り、弓削は規矩の方を見る。

「色恋で、眠れなくなつたんだ。馬鹿みたいだろ」

弓削は開口一番にそう言った。

「ほら、私はこんなんだからさ。恋愛って全然できなかったんだよ。初めて付き合つたのが仄香さんで、次がもう……」

そこで一瞬、声が止んだ。一呼吸挟んで、弓削は続ける。

「……昨日別れた彼女だ。振られたんだよ。愛想を尽かされたんじゃない……むしろそれは、私の方からだった」

弓削の声音が話すごとに沈んでいく。らしくない、と規矩は思った。彼の知らない弓削が、そこにいた。

「セクシャルフルイディティ——性の流動性。男と女、僕と私が混在している。コロコロ変わって、保ってられない」

潤んだ弓削の目から、一滴だけ涙が溢れる。

「私のそれは、特別極端なんだ。男の僕でいる時は、恋人である彼女にとっても心惹かれる。けれど、女の私が出てきた時にはもう、その気持ちを忘れてしまう。二重人格のように、私は人への好意が切り替わってしまうんだ」

規矩は静かに話を聞いていた。その知識は持っていたが、弓削がそうであるというのは初めて知ったことだった。

「僕は彼女を愛していた。私もそれでよかつたはずなんだ。なのに私は裏切つた。彼女のことも、自分のことも」

それから弓削は黙り、また口を開くまでに一分をかけた。「……初めて君と会つた時、何か特別なものを感じていた。後になって、それが一目惚れだつて気づいたよ」

規矩も当時、何か波長が重なり合うような感覚があった。それを思い出したが、今は何も言わなかつた。

「君が自認を重要視するゲイだつて聞いて、私はやっと安心したんだよ。私でも君に愛してもらえらるつて。それに、君が私のような人間じゃないと分かつたから」

弓削は苦々しそうに顔を歪ませる。

「だけど君への好意を意識した時から、段々と女である私が増えてきていた。それじゃ私は愛してもらえないと思つた」

そこで、がらりと弓削の口調と雰囲気が変わつた。

「だから僕は、君の前では男であろうと振る舞つたんだ」

そのことに、規矩は気づいていた。自己認識は思い込みでどうにかなるものではない。偽れば現れる、小さな違和。

規矩はそういつたものを見逃さなかつた。

「ねえ、規矩。やっぱり僕は、愛せないかな」

弓削は首を傾げて覗き込むようにして目を合わせた。

「……違うんだよ、弓削」

だが、規矩は自分の手のひらを見つめて言う。

「男だから好きになるとかじゃないんだ、俺は。……女性を好きになれないんだ。女性だけに、恋をできないんだ」

拳を握りしめる。彼の言葉に、弓削は呆然とした。

「俺自身も、正直自分を理解していない。ただ、女性というものが、やはりどうしても、相手として許容できないんだ。冒瀆的なほどだが、俺には変えようがない。ただの恋では、

そこまでの垣根をこえることができなかつた」

規矩は実情を打ち明けると、そこで口を閉ざした。弓削が全身から力が抜けたようにうなだれる。

「……そういうことかよ」

弓削が震える声で言った。俯いて垂れた髪は濡れて艶めいている。エアコンがかたんと小さな音を立てた。

「ならもう、どうしようもないじゃないか……」

弓削は膝を抱えて動かない。規矩は思わず手を伸ばした。

弓削の頭はまだじんわりと湯上がりやりの熱を宿していた。

「気安く触るな……」

くぐもった声で言う。規矩は無視して、そのまま撫でた。ぐしゃぐしゃと髪が乱れる。弓削は動かなかった。

嗚咽の声を聞きながら、しばらく規矩は頭を撫で続けた。

「……やめろ。もういい」

弓削が規矩の手を払いのけて立ち上がる。その時には既に太陽は落ちていて、部屋の中は暗くなっていた。

「十分だ。こんなことに付き合わせて悪かった。帰りなよ。」

私のことは、突き放してくれて構わない」

弓削は規矩の顔を見ないで、しかしはつきりと伝えた。

「いや、無理だ」

「……は？」

だが規矩は、あっけらかんとそう答えた。

「なんでだよ……私のことはもういいんだ」

「いや、俺は弓削が好きだから」

眉ひとつ動かさず、規矩は堂々と宣言する。

「……それは」

「これは、友情的な意味でも、恋情的な意味でもだ」

規矩は弓削の目を真っ直ぐ見据えた。

「弓削のことは男だと思ってるし、女だとも思っている。

どちらか一方ではなく、その両方が弓削だと思ってる。俺は弓削の恋人にはなれないし、ただの友達でもいられない。当然、どっちつかずでは満足できない」

「……欲張りなんだな」

否定せず、規矩はただ頷く。

「だが、正直に言えば、俺は悩むのが下手なんだ。一度悩み出すと答えが出るまで他のことが考えられなくなる。だから

今回は、悩む前に適当に区切りをつけることにした」

立ち上がって、弓削と視線を合わせる。

「今はまだこの関係でいいんじゃないだろうか」

ずっと考えていたことを、規矩は口にした。

「……それじゃ何も変わらないよ」

「そうだろうな、しかし、悩めば答えが出るとも限らない。俺はこれ以上苦しみたくないし、苦しませたくもない」

口を歪める弓削を無視して、規矩は話を進める。

「苦悩は睡眠の邪魔をする。眠れなければ、生活にも支障が出る。当然仕事にもだ。当然そんな頭では、悩みが解決する

はずもない。それに加えて、夜には魔力がある。人の思考を暗くする。夜に悩むのはよくないことだ」

そして規矩は、弓削に手を差し伸べる。

「だから、今日はもう寝よう。一緒に」

「……思っていたよりも変なやつだな、君は」

強引に話を進める規矩の姿にすっかり毒気を抜かれた弓削は、呆れながらも笑って彼の手を取った。

そうして、一人分の布団に、身を寄せ合って寝転がる。

「……こうしてただ誰かと寝るといふのは久しぶりだよ」

居心地が悪そうに壁の方を向いて、弓削が言った。

「結局、問題は何か一つ解決していかない。私はまだ君のことが好きだし、君と一緒にいたいと思ってる。こうして同じ布団に入ることを、変に意識する自分がいる」

「そうか。俺もだ」

「……知らなかったよ。規矩は素っ気ないし。私と話してるよりも、仄香さんと話してる方が楽しそうだから……」

話しながら、再度寝返りを打って規矩の方を向く。

「そうか？ いつも緊張してるだろ。俺は淵藤さんのことを尊敬しているから。弓削と話してる方が、素でいられる」

「……そっか。知らなかったよ」

安心したように笑って、弓削は規矩の肩に顔を埋めた。腕を握って体を寄せる。早鐘を打つ心音を、規矩は感じた。

「……この気持ちは不純なものなんだろうか」

弓削がぎゅっと規矩の腕を抱き寄せながら呟く。

「どっちでもいいんじゃないか」

素っ気なく答えて、規矩は瞼を閉じた。慣れない環境の中しばらく眠れなかったが、弓削の寝息を隣に聞くと、緊張が

溶かされた。いつの間にか、深い眠りに落ちた。

翌朝早く、規矩は嗅ぎ慣れた甘い匂いで目を覚ます。布団は自分一人だけだった。起き上がり、軽く背筋を伸ばす。

頭の中は、もう曇っていなかった。

「おはよう。君も飲むだろ？」

先に起きていた弓削がキッチンから現れた。両手に持った湯気の立つマグカップを卓上に置く。

「間に合ったみたいだね。空を見てごらん」

弓削が示すままに、規矩は窓の外を見上げた。

澄んだ早朝の空には、薄い雲がかかっている。その下を、淡い光と影の筋がいくつも走っていた。

「反薄明光線だ。『薄明』の由来でもある。そう簡単に見られるものじゃないぞ。君は運がいいな、僕も三回目なのに」

弓削は、規矩の横に立って楽しげに笑いかけた。

「昨日はありがとう。何だか、心が浄化された気がするよ。今までに比べて随分と楽になった。夜が明けた気分だ」

晴れやかな顔で、弓削は言う。

「それでいい。悩むのはいいが悩みすぎるのは悪い。上から目線で説く訳じゃないが、悩み事なんてのはこれから増えていくばかりだ。うじうじと悩んでいる暇はない。太陽の光を浴びてコーヒーを飲みながら考えるのが、きっと丁度いい」

そう言って、温かいマグカップに手を伸ばす。キャラメルマキアートが入れてあった。一口飲んで、甘ったるさに少し

酔う。奥に潜む苦味が、爽やかに喉から鼻に抜けていく。

「うん。これからもちゃんと、自分のことを悩んでいくよ。

ああ、勿論、君とのこれからのこともね」

そう言つて、弓削はふわりと香るような微笑みを湛えた。やはりどうしようもなく、規矩はそれに惹かれるのだった。

「好きだ」

規矩が言つた。本心を隠そうとは思わなかった。そして、それは弓削も同じことだった。

「ごめん。僕はまだ、前の彼女のことを好きなんだ」

「……そうか」

二人の間を沈黙が流れる。規矩の心は、清々しかった。

「僕のことは深苑と呼んでよ」

空を眺めながら、ふと弓削が言つた。

「俺も、業身でいい」

規矩もそれに、素っ気なく応えた。

弓削が別の部屋から持ってきた煙草に火をつけて、二人でふかす。煙は窓の外、空の高くに消えて雲に溶けた。気恥ずかしさも、煙草の煙たさにかき消えた。

甘いマキアートを一口飲んで語り合う。伸びた髪の話、切った髪の話。憧れの人の話、嫌いな人の話。飲み終わる頃には太陽が昇つて、反薄明光線は消えてしまつていた。

その時ふわりと風に乗つて、雨上がりの匂いがした。それを肺いっぱい吸い込む。規矩は少し雨が好きになつた。空になつたマグカップを覗いて、二人は思いを馳せる。

「店長の方が美味しい」

同時に言うと、顔を見合わせ声を出して笑つた。

その日の『薄明』は昨日よりも賑わいを見せた。テーブルが客で埋まり、店内は煙草とコーヒの香りで満ちていた。……よし、あらかた注文は終わったかな。あゝ、疲れた。こんな晴れの日、煙草が吸いたくなるね」

一息ついて、換気扇の出力を強めながら、淵藤が言つた。店内を見渡してもコーヒの尽きそうな客はいない。それを確認してから、ようやく三人は肩の力を抜いた。

「じゃあ業身、僕が店の外を掃除してくるよ」

笑顔で規矩にそう言うと、弓削は機嫌良さそうに入り口の方へ向かった。それを見て、淵藤が規矩に擦り寄ってくる。

「……何、そんな感じ？ 今朝も一緒に来てたけど」

「ただ煙草の火を分けた仲ですよ」

「ふうん……ま、悪くないならそれで善いけどね」

言つて、弓削を見送る。完全に扉が閉じると、淵藤は少し照れくさそうな顔で振り返り、声を抑えて言つた。

「……私も業身と呼んでいい？」

規矩は一瞬呆気に取られ、そしてすぐにくすつと笑つた。淵藤は驚いたように、規矩の顔を見つめて瞬きする。

「……規矩が笑ってる」

「何なんですかその反応。業身って呼ばないんですか？」
「だって初めて見たよ。いつもムスツツとしてるからさ」

「俺だって笑いますよ」

規矩はまた無表情に戻し、心外だとばかりに抗議する。

「ほら、いつもその顔。もしかして私が嫌いなのか？」

「何でそうなるんですか」

「だって規矩、私の前では全然笑わないし、ずっと他人行儀だし、なんなら一年以上も一緒に働いてるのに、私の年すら覚えてくれていなかったじゃないか」

「そもそも教えてもらった記憶がないです」

「……教えた記憶もないな。訊いてくれてよかったのに」

「恐れ多いですよ」

「本当かよそれ」

規矩が微笑んで言うと、淵藤もまた嬉しそうに笑った。

そうして話しているところに、からんとドアベルが鳴る。

そちらを向くと、弓削が店内へと戻ってきていた。

「仄香さん、鯉淵さんが来ましたよ」

そう言う弓削の背後から、小柄な女性が顔を出す。淵藤の

恋人が店を訪れたのだった。左手が小さく光る。

カウンターの内側から、淵藤はにこやかに出迎える。

「やあ桜子。こんな場所にしても大丈夫かい？」

淵藤の言う通り、店内に煙が漂っているのを鬱陶しそうに

払いながら鯉淵は歩いてきた。

「そんなの、お前と暮らしてんだからもう諦めてるよ」

彼女は肩をすくめると、笑って淵藤の前に座った。

「コーヒー奢ってくれ。カプチーノがいい」

「はいはい、分かったよ。二人は？」

振り返って尋ねる淵藤。規矩と弓削は顔を見合わせると、

「じゃあ、キャラメルマキアートを二つで」

と弓削が規矩の代わりに言った。

「へへ、珍しい。まあ任せてよ。みんなブラックばっか頼むもんだから、腕が鈍ってないといんだけど」

そう言って、淵藤は作業に取り掛かる。

豆を挽く音、コーヒーの香り、沸いた湯の中で弾ける泡。

静かな店内が、ジャズと煙とコーヒーで溢れていた。

コーヒーを抽出する間も楽しそうに笑い合う淵藤と鯉淵。

規矩はそれを静かに眺めていた。煌めく陽光が窓から射す。

規矩には二人が眩しく輝いて見えた。

とくとくと抽出器から液体が流れて、三つのマグカップと

一つのデミタスに落ちていく。深い豆の芳香が薄茶色の雫に

凝縮したような、なめらかで濃厚なエスプレッソ。

マグカップのエスプレッソに、泡立てたミルクが注がれて

いく。それは純粋なコーヒーを汚しているようにも映るが、

砂糖と共に入れたミルクはコーヒーの強い苦みを和らげる。

ほのかに甘みのある優しい風味は、案外悪くないものだ。

「はい、お待たせ」

淵藤が二つのカップを二人の前に差し出した。さらに甘い

シロップで味付けした、香り立つキャラメルマキアート。

規矩と弓削がカップを持ち上げ、一口飲む。そして同時に

「やっぱりね」と、どこか誇らしげに笑うのだった。

ドラマチック殺人

伊集院高等学校 二年

元山 道

000

あの日の景色を未だに覚えている、只々鮮明に頭に残っている。家族も同僚も友人も恋人までもが殺された、どうしようもないほど残酷で奇妙でドラマチックなあの事件を。今までにないほどの感動をくれたあの事件を。

さてどこから話そうかな、確か始まりはちょうど三十年前の四月一日エイプリルフル。

001

当時二十三歳の私は警察官になったばかりだった。私は警察署に配置されて、初めての仕事であるパトロールに駆り出されていた。その年はまだ春だというのに暑かった。三十六度の炎天下でアスファルトも溶け出そうとしていた。むくむくとした白い入道雲を食べてやろうだなんて考えていた。すると、一緒にパトロールしていた先輩、名前は石川微動(びどう)だったと思う。石川先輩がソフトクリームを奢ってくれた、そのソフトクリームが異様に美味かったのを覚えている。それから私と石川先輩は町を隈なくパトロールして回った。

いかにも犯罪が起こりそうな路地裏も見て回ったが、特に何も起こらず平穏であった。その後、道も整理されていない山をパトロールしていると、山の開けた場所に怯えている表情をした人間が二人倒れていた。二人に声を掛けてみようと思ひ、近づいてみると、何かを踏みつけてしまった。弾丸だった。二人は死んでいたのだった。私は死体と認知した瞬間、理性を失ってしまい、倒れて、次に目を覚ましたのは交番だった。多分ここで私の導火線に火が付いたのだろう。私は発狂して、死体に向かって「幸せそうだ、幸せそうだ」と連呼して倒れたらしい。石川先輩は応援を呼んで適切な現場保存をしたあとに私を警察署まで運んでくれたそうだ。

このあとの話は石川先輩から聞いた話なのだが、銃殺された人たちは夫婦だったらしい。しかも指輪には四月一日という文字が刻まれていたそうだ。つまり婚姻が成立した日に殺されたのだ。一つの銃弾で。私は、犯人はどうしようもない悪党だと思ったと同時に、夫婦は幸せに死んだのだなとも思った。正確にいうと女の方は多少幸せな様に見える、男の方は絶望と幸せが混ざり合っていると感じた。

私が初めて関わった事件は夢の秘密基地事件と名付けられた。

002

あれから私は、寝る間も惜しんで働いた。犯人を見つけ、何故やったのかどうしても聞きたかった。どうしても気になったのだ。聞き込みをした家は二百を超え、フルマラソン二

回分は歩き、証拠をかき集めようとした。それなのに、犯人の尻尾すら掴めなかった。そして一年程経って調査は打ち切られたが、私はあきらめきれなかった。たった一つの事件、たった二つの命、見つからない証拠、これに時間を掛けるのは無駄だと感じていたが、知りたいという欲望だけが増していった。日々の仕事と並行して、がむしやらに探した。私の必死さを心配してくれて同僚の田中正も捜査を手伝ってくれた。田中と調査していく日々は楽しかった。例えると夏休みに森を探索する小学生の気分だった。それから田中とは他愛もない話で盛り上がり、私らは仲良くなった。

半年後に私たちは一つの手がかりを見つけることになる。

003

いつものように森を捜査していたら一匹の猫に出会った。よく覚えている、漆黒という表現がぴったり合う、体には不気味な程の真っ黒な毛を纏い、顔には黄金色の目が二つと白色の立派な髭を蓄えていた。その猫に魅入られてしまって、僕と田中はパンドラと名付けた。パンドラは不思議な猫だった人間に恐れるどころか、私たちの主導権を握っているような感じがした。パンドラはじつとこちらを見つめ、ついて来いともいうような感じだったので、私たちはパンドラについていった。

パンドラは私たちを大木に導いてくれた。そしてパンドラは上をじつと見つめ森へ姿を消した。私たちは上に何かあるのかと思いい木を夢中で登った。木の上には鳥の巣が二つあっ

た。一つには死にかけの雛が四羽いた。もう一つの巣には弾丸が置かれていた。死にかけの雛も目に入らなかった。そのぐらいい私の中で弾丸は輝いていた。事件の手がかりが見つかったからだ。嬉しかったとても嬉しかった。しかし、田中と事件を捜査するのも終わりだと思わずに少しだけ寂しかった。私と田中は銃弾と雛を警察署に持ち帰った。田中は雛を責任もって育てると言った。優しさが滲み出ていた。

その後、夢の秘密基地事件の捜査が再開されると思っていたが、証拠も綺麗に拭きとられていた弾丸は無力で、夢の秘密基地事件は未解決事件の一つに名を記した。

004

夢の秘密基地事件から一年が経過し、私は時間に余裕を持つようになった。田中と遊んだり、他の同僚や石川先輩と飲み会にも行くようになった。部署の対人関係も良好で、幸せな時間を過ごしていた、連休を貰い実家にも顔を出せ、両親をそこそこ高い洋食屋にも連れて行くことができ、親孝行もできた。あとは彼女でも出来たら人生微塵の不満もないなと思っていた。

ある日、地元付近を散歩していたら高校時代の先輩で、今は部署の先輩である五月雨日傘（さみだれひがさ）さんに出会った。五月雨先輩は不思議な人で、人のことを名前では呼ばずに、動物や昆虫の名前で呼んでいた。私は猫ちゃんと呼ばれていた、理由を聞いたことがあるのだが目つきが悪く、つんつんしているからとのことだった。どうやら五月雨先輩

は彼氏に振られて傷心中だったらしく、飲みにつき合わされた。

「猫ちゃん、聞いてよ、元彼酷いんだよ。私が犬より猫が好きって伝えただけで不機嫌になるんだよ。おかしくない？ ひどくない？」

五月雨先輩は机に突っ伏しながら言ってきた。

「先輩は人を動物の名前で呼ぶから誤解されたんじゃないですかね」

「そうかも、猫ちゃんありがとう。やっぱり私には猫ちゃんしかないね」

当たり障りのない返事をしただけでも笑顔で答えてくれる五月雨先輩は輝いて見えた。

数杯飲まされて、五月雨先輩は満足したのか解散することになった。その日の夜はなんだか寝付けなくて、淡い月に見とれていた。月が動くにつれて月を追っかけようと思ったりし、実際酔いのせいで月が沈む方向も分からないのに何故か走りだしていた。

そして気が付いた、私は日傘さんに恋をしたんだと。

005

私の初恋は日傘さんに奪われた。恋の力は偉大なもので、日常生活にもより一層やる気が出た。まだ付き合ってもないのに凄いものだ。私は必死に努力をした、振り向いてもらうために。

私は仲が良く高校時代も同じ友達の黄薔薇エリカ（きばら

えりか）に相談した。

「単刀直入に言うと好きな人ができてしまったんだ。」

カフェに黄薔薇を呼び出して、率直に聞いた。

「早いよ、こういうものは雑談後にするものだ。私は考えているんだが。まだコーヒートの一つも注文してないし」

私は少し焦っていた、恋というものは人をダメにするのかもしれないと思った、その後私は黄薔薇とコーヒーが来るまで思い出話で盛り上がった。

「よし、相談を聞く準備も出来たし、話、聞くよ。」

黄薔薇はいつの間にか頼んでいたケーキとパフェを頼張りながら言った。

「実はさ、日傘先輩のことを好きになってしまったんだ。」

「日傘先輩って五月雨日傘さんだよ、同じ部活だったから分かる。いい人だよ。」

黄薔薇はうつむいたまま言った。

「どうすれば、日傘さんと付き合えるかな。」

「とにかく、たくさん話しかけてたくさん遊びに誘って、告白すればいいと思うよ。」

黄薔薇は涙を浮かべながら言った。

「どうしたんだ、泣きそうな顔して気分でも悪いのか？」

聞くべきじゃなかった。

「いや、さっきのパフェが冷たすぎて頭がキーンとなっているだけだよ。私用事思い出したから帰るね。」

黄薔薇はそう言って走って帰ってしまった。

今思うと私は彼女を傷つけてしまった。そして、私は二年後この選択を後悔することになる。

006

私は日傘さんに猛アタックしまくった。遊園地に遊びに行ったり、好きなものを聞いたり、洒落た店にディナーに行ったりした。私は彼女の優しさに惚れた。彼女は車に轢かれそうな子供を身を挺して守っていた。私は日傘さんを守りたいと思った。それから半年後に地元の河川敷で告白をした。

日傘さんは笑顔で告白を受けてくれた。幸せというのを実感した。会うだけで楽しく、見るだけで心が躍り、考えるだけでどんなに悩んでも落ち込んでいても全てを塗り替える喜びがあった。この日常がいつまでも続いて欲しいと思い、居るか分からない神に何度も祈った。

しかし、事件は起こり始める。大きな事件が。

007

日傘さんとの結婚を目指して、私はこれまで以上に仕事に精を出した。始業時間の一時間前に来るようになり、田中と雛の世話をして仕事をするようになった。

警察官になり四度目のエイプリルフール。いつもどおりに出勤すると泣き声が聞こえてきた。

「なんで、なんでだ、なんで俺はこんなに馬鹿なんだ。なんで気付いてやれなかったんだ」

田中が泣いていた。事情を聞いてみるとどうやら四羽の雛のうち一羽が死んでいたらしい。私たちは雛を警察署の庭に

埋めて簡易的な墓を作った。

「雛も田中に育ててもらって幸せだったと思うぞ」

「そうかな」

「きつとそうだ」

私は妙な胸騒ぎがした。エイプリルフールにいい思い出がないからかもしれないが、何故か落ち着かなかった。

始業時間になり私達はいつもどおり仕事していたが、いつも場を盛り上げてくれる田中が元気をなくしていて空気が少し悪かった。

しばらくして静寂の空間に一本の電話がかかってきた。雪飴（ゆきあめ）署長が電話をとり叫んだ。

「立てこもり事件発生！ 立てこもり事件発生！ 場所はパン工場、今すぐ向かえ」

すぐにまた電話が鳴った。雪飴署長が電話を取り、再び叫ぶ。

「時限爆弾が町中で確認された。直ちに解除に向かえ」

私の予感は的中し、立てこもり事件と爆弾事件という二つの大きな事件が同時に動き始めた。前代未聞の事件発生に警察署内はざわついていった。

今思えばここで違和感を持つべきだった、この日誰かが殉職することなど私達は知る由もなかった。

008

私と石川先輩はパトカーを走らせ、パン工場まで向かっていった。

「頑張つて犯人を捉えて今日は早く仕事終わらせような！」

石川先輩はいつもよりテンションが高かった。

「何かあったんですか」

「実はさ今日仕事終わったらさ三年付き合っていた彼女にプロポーズするんだ」

石川先輩はニコニコと笑った。私は石川先輩の話聞いて日傘さんのことを思い、少し頬が緩んだ。

「絶対に成功させてくださいね」

石川先輩は「ありがとな」と言ってくれた。

十分程経ちパン工場に着くと銃声が聞こえてきた。すると、慌てた様子の工場長がでてきた。

「助けてください！ 突然銃を持った男が襲ってきてうちの社員が人質に取られてるんです」

「こっちは！ 急いでください早く」

私たちは工場内に案内してくれた。犯人の目的は謎だが、ドアの向こう側から狂気が溢れていた。

石川先輩は突入する前に私に言った。

「犯人は銃を乱射している、今回は命がけになる。俺は先輩だが今回お前がもしものことになっても助けない。だからお前も俺がもしものことになっても助けるな。犯人確保を優先しろ」

石川先輩はやっぱりかっこいい、私はそう思った。

600

犯人の玉切れと同時に私達は突入した。

「殺すぞ」犯人が声を荒げて銃を向けてきた。相当頭に血が上っているようだ。

「てめえだな、俺から日傘ちゃんを奪ったのは、お前が猫とかいうやつだな。日傘ちゃん言ってたぞ！ 犬より猫派だつてな！ 犬と呼ばれていた俺より猫と呼ばれてたお前の方が好きということだろ」

「二年かけてやっと見つけた。お前を殺すために今まで計画してきてやっと叶うんだぜ。元カレから今カレに向けた最高の殺し、プレゼントだ。しかも、オーダーメイドってやつだぜ。笑えよ、喜べよ、猫ちゃん。」

彼の狂気は人間をとうに超えていた。例えるなら飢えた熊と対峙している気分だった。

「お前に猫ちゃんと呼ぶ資格は無いぞ。」

私は彼にそう叫び、銃を向けたが彼は対策していたようで、無駄だった。

「動くんじゃねえぞ！ 銃も下ろせ。さもないとこの女を殺すぞ、お前のお友達を。あと俺のモノにならないと日傘ちゃんも殺す。」

愉快に笑い叫びながら人質を見せてきた。そこに居たのは黄薔薇だった。

「俺の目的は一つだ。日傘ちゃんと別れる。それか死ぬ」

私は別れたくなかった。これほどの幸せを手放したくなかった。私は死のうと思った。

「殺せ、私は日傘さんとの夢を捨てられない。そのかわりに

私を殺したら黄薔薇や先輩を解放しろ。あと世間に迷惑をかけるな」

「潔いじゃあねえか。じゃあ死ぬ」

犯人は私に向かって発砲してきた。しかし、弾丸が貫いたのは私ではなく石川先輩だった。

「体が勝手に動いちゃった。お前のせいじゃない、犯人絶対捕まえるよ。」

それが石川先輩の最後の言葉だった。犯人は黄薔薇を解放し、私の死を確認するために近づいてきたところを捉えた。

後々の調査で犯人は、日傘さんの元彼氏だった切牙犬（きりばけん）ということが分かった。一人の勇敢な警察官の命が奪われた惨い事件は、切牙立てこもり事件と名付けられた。

〇一〇

三月三十一日の今日、何故か僕はこの老人の話を聞かされることになった。しかし、この変な話はいつまで続くのだろうか。話も下手だし、徐々に話もおかしくなっているような気がする。

「石川先輩を殺してしまった罪悪感は徐々に大きくなっていった。自分のせいだが仕事で罪滅ぼしをしようとして日傘さんの仲も以前よりは悪くなっていった。それから一年たった五度目のエイプリルフルにまた大きな事件が起こった」

「どうやらまだ話は終わらないらしい、ここからは第二部というところかな。」

〇一一

自分のせいで石川先輩を殺してしまい、仕事で罪滅ぼしをしようとしたのに、日傘さんの仲も次第に悪くなっていった。

それから一年たった五度目のエイプリルフルまた大きな事件が起こった。

私はエイプリルフルが嫌いになっていた。また誰かの死を見るのかと怖くなった。そんな気分を抱えつつ出勤すると、田中が泣いていた。どうやらまた難が死んだらしい。私は逃げたかった。また人の死を見ることになる直感的にそう感じた。私と田中は以前と同じく簡易的な墓を作って、仕事を始めた。午前を耐え抜き安心していたところに、一本の電話がかかってきた。雪飴署長が電話を取り内容を伝えた。どうやら女性の声でこのように言ってきたらしい。

「大事なことなので一回しか言わない。今日街中に八個の爆弾を仕掛けた一時間ごとに爆破していく」

私達は前回の事件同様いたずらを疑った。前回は爆弾の捜索に人手を割いてしまった。今回は騙されれないと思っていたら、警察署付近で爆破が起こった。

私達はすぐに爆弾回収に取り掛かった。私は田中と一緒に回収に行ったのだが、一つも爆弾を爆破させることなく六個の爆弾を回収できた。残りの爆弾を探しているとある女性に出会った。

「さよなら大好きな人」

黄薔薇であった。黄薔薇は両手に爆弾を握りしめて言った。

彼女は切牙と同様の雰囲気を感じていた。

「少し喋るよ。私は君のことが好きだったんだ。青春の全部に君が居たんだよ、君と一緒に居られるだけで幸せな気分になれたんだ。分かるだろう。君も好きな人がいるんだから。」
彼女の言葉を聞いて過去の自分を殴りたくなった、私は彼女の気持ちに初めて気付いた。

「思い出を全部爆破したい。青春の全部を爆破したい。君を消せるだけでいい、君の正義感が大好きだ。君の優しさが大好きだ。だから今さよならだ。吹き飛ばしちゃえ」

彼女は爆弾を投げて来た。爆破した。爆破された場所は私達が学生時代によく遊んだ公園だった。子供がいないのが不幸中の幸いだった。

「次は当てるよ。覚悟してね。」

そうやって、自分の体に時限式の爆弾を縛り付け、自爆を試みたようだった。田中はすぐに気づき黄薔薇を抑えてくれた。田中は爆弾処理の経験があったが解除できず、黄薔薇を連れて遠くに走り殉職した。死体すら残らなかった。
「お前はいいやつなんだからさ、俺の分まで真っ当に生きて長生きしていい家庭作ってくれよ」

田中はそう言い残して去っていった。

この最悪な爆破事件は悪魔の爆弾魔事件と名付けられた。ここから私も徐々に考え始めた。身近に犯人がいるのではないかと。

012

悪魔の爆弾魔事件から約二年経っても私は当たり前だがまだ引きずっていた。石川先輩のこと田中のこと黄薔薇のこと全てにおいて悩んでいた。それを心配してくれた日傘さんは私を抱きしめて励ましてくれた。

それからエイプリルフルを迎えた。今年は特別に休みを貰った。エイプリルフルに仕事に行きたくなかった。そして今年の日傘さんに結婚のプロポーズをするために休みを取ったのだ。

私は完璧ともいえるデートの計画を立てて昼のレストランで日傘さんにプロポーズした。

「一生守り抜きます、一生幸せにします。日傘さん大好きです、結婚してください。」

人生一緊張したと思う。偽らず素直に言葉を伝えた。

「これエイプリルフルだから嘘でことじゃないよね？」
日傘さんは日傘さんらしい返答をしてくれた。

「エイプリルフルの嘘は午前までなんだよ日傘さん」
「そうなの。すごく嬉しいよ。末永くよろしくね猫ちゃん」

私は日傘さんと結婚した。人生の最高到達点だった。

私たちが市役所で婚姻届けを出した帰りに、銀行で強盗事件があった。私も日傘さんも正義感が人一倍強いので銀行に入った。

覆面の男が三人ほどいたが、素人らしく銃を持っているだけだったので、すぐに制圧し拘束した。日傘さんとガッツポ

ーズをして、雪飴署長に電話を掛け来てもらうことにした。私達は油断していた、覆面の男の一人が胸元に隠していた銃で私めがけて発砲してきた。私はそれに気付かなかった、打たれると思ったが私は床に倒れこんでいた。私はすぐに気づいた、石川先輩と同じように田中と同じように私を庇ってくれたのだと。

「猫ちゃん聞いて、もう長くないと思うから、私は勝手に打たれたんだよ、猫ちゃんは悪くないからね。猫ちゃんがいてくれて幸せだったよ、猫ちゃん愛してる。」

日傘さんはそう言い残して亡くなった。私は絶望した。

日傘さんが亡くなった事件は目隠し事件と名付けられた。

013

先輩が死んだのは私のせいだ、田中が死んだのも私のせいだ、黄薔薇が死んだのも私のせいだ、愛する日傘さんが死んだのも私のせいだ。私のせいで周りが不幸になる。死んでいく。もう失いたくない。全てを企てた犯人が私の一挙手一投足をすぐそばで見ていると確信した。犯人を見つけて殺す。そう誓った。理性のブレーキがもう聞かなくなっていた。

私は一つ犯人の検討がついていたので署長室を訪ねた。

「すこしお時間よろしいでしょうか？」

「いいよ。入ってくれ」

「一つお聞きしたいことがあるのですがよろしいでしょうか？」

「いいとも話したまえ」

私は雪飴署長におそろおそろ言った。

「夢の秘密基地事件、切牙立てこもり事件、悪魔の爆弾魔事件、目隠し事件、この四つの事件裏で手をひいているのはあなたですよ。雪飴署長」

「ほう、何故そう思ったんだい」

この反応で私の推理は的を射ていると確信した。

「否定はしないんですね。この四つの事件はエイプリルフールに起こっている。しかも私の周りだけで、それから全ての事件はあなたが名付けた、時系列順に縦読みすると、ゆきあめ”になり署長の名前が出てくる。夢の秘密基地事件と目隠し事件は無理があるでしょう。」

「勤がするどいね、人気がないところで話そうか」

ここで私の意識は途絶えた。そして目が覚めると森の中に居た。夢の秘密基地事件が起きた場所に拘束されていた。

「君が言ったことは正解だ。問点は多々あっただろう。夢の秘密基地事件でいえば、葉莢が発見されずに発砲事件になったり、猫に連れられた場所で弾丸を見つかったり。切牙立てこもり事件では人質が君の友人だったり、爆弾の件がデマだったり。悪魔の爆弾魔事件では黄薔薇君以外の爆弾が素早く回収されたり、一応立てこもり事件の時点で伏線は張っていたんだよ。最後に目隠し事件も君と五月雨君が休む日にちに合わせて手配したり、大変だったんだよ」

何のためにここまでするのか分からないが、理性を失いつつも私は気分が高揚していた。すると署長は森に火をつけ始め、私の拘束を外し、拳銃を向けながら言った。

「私は膨大な権力を持っている。私を殺さない限りここから君は出られない。私を殺したいならば継承者としてすべてを託そう。次期署長は君だ」

その言葉を聞いた瞬間私は発砲していた。

「いいね。その顔だ、最高に狂っている」

彼は幸せそうに死んでいった。そして今度は私が事件を起こす側になった。雪飴署長と似たような事件を。

014

僕は今廃工場に閉じ込められている。目の前にいる老人によつて。この男は今まで僕を拘束してぺらぺらぺらと武勇伝らしき話を語っていた。

「なんなんですか、署長、なんでこんなことを」

そう聞くと彼はゆっくりと言った。

「君は僕と同じようなものを持っていると思つてね、もう少し待っていてくれ」

それから十分ほどして何か焼けているような匂いがし始めた。あの男は火を放つたのだ。火は勢いを増して建物を襲つていった。

「待たせたね、後継者（こうつぎてへり）君」

僕の拘束を外しながら言う。

「ここに一つ防火服がある。そして、ここに一つ拳銃がある」
「何を言っているんですか？」

本当に怖かった、何をしたいのかが分からない、全身が震えている。

拳銃を投げて署長は言った。

「君が助かる方法は一つだ、その拳銃で私を殺すことだ。大丈夫君が私を殺してもバレはしないよ、私は膨大な権力を持っている」

炎は勢いを上げて建物を飲み込んでいく。もう悩んでいる時間もない。僕は何故か冷静になれた。床に置かれた拳銃を手に取り署長に向けて構える。

手の震えはもう無い。僕はトリガーを引いた。

燃え盛る炎の中、署長は幸せそうに死んでいった。

エイプリルフルに魅入られた男の話はここまで、第一部の完だ。これからは僕のドラマチックな殺人事件の話だ。

乞うご期待！

血塗られた齒車

市来農芸高等学校 一年

平尾 椰智

貴方は元気にしていらっしゃいますでしょうか。相変わらず前線は動かず、過酷な状況を耐え抜いています。先日のセルビア王国との戦いでは、数名の仲間が命を落としました。貴方が足を骨折していて良かったと私は思います。心身共に軍隊生活で疲弊し、今すぐにも貴方の腕に抱きしめられたいです。このままでは心が折れてしまいそうです。ですが、今年のクリスマスまでにはこの戦争に終止符が打たれ、貴方のもとへと帰りたいと思っています。

第一章 終焉の始まり

こうして手紙を綴り、実家へ届けられることを心から願っている。私はブルガリア帝国陸軍の一等兵スラヴィ・アリシアだ。開戦初期から従軍し、多くの仲間の命が失われながらも、戦争の終わりを待ち続けている。

「そろそろ作業に戻れ、今回は一筋縄ではいかぬ」
この声はボリス軍曹だ。鬼上官と言われている、私の小隊

では忌み嫌われている。彼の背負う過去の悲劇を知っている者は少ない。彼の過去に何があったのか、私はまだその真相を知らないが、ただその厳しさには理由があるのかもしれないと感じている。

「はいわかりました上官、いつもの砲台の監視ですね」
私が返事をする、スタイルズが疲れたように肩を落とした。彼は同じ階級の戦友で、開戦以来ずっと一緒に戦ってきた。彼の態度は、日々の戦闘の疲労と過酷な生活がもたらせたもので、どうしてもだるそうに見えてしまう。

「またあの砲台か……」
と、スタイルズが愚痴をこぼす。彼と私は長い間一緒にいるが、戦争の中で生まれたこの微妙な距離感もまた、一緒に過ごした時間が生んだものだ。戦線の前方には、ぼんやりと敵の砲台が見える。その前に立ち続けるのは骨が折れる作業だ。私達の小隊は、この砲台の監視を日常の一部として受け入れているが、その責任と危険がどれほどのものかは、実際に経験した者にしかわからない。

「また、変わらず同じ仕事だな。早く終わらせたいものだ」
スタイルズがつぶやく。彼の言葉に込められた無力感と諦めが私の心にもずっしりと重くのしかかる。戦争の疲れはどこにでもあり、彼もまた、その影響を受けているのだろう。「そうだな」とうなずき、彼の横に並んで歩み始めたその時だった。近くで兵士が倒れたと同時に、通信兵が駆け込んできた。

「たった今、セルビア王国軍が我が陣地に突撃を開始しました！ 完全な奇襲で、敵軍がすぐそこまで来ているためこの陥落も間近です！」

その訴える顔は青ざめ、息を切らせている様子がさらに周りの兵士の緊張感を高めている。

「セルビア軍の奇襲か……」スタイルズがつぶやき、眉を顰（ひそ）める。彼の顔には動揺と恐怖が隠せない。私もその言葉を聞き、心臓が激しく鼓動するのを感じた。これまでの戦闘とは比較にならないほどの緊急事態だ。

「何をぼさつとしている！ 銃を持って！ 機関銃の装填を行え！ 火砲も射撃準備を開始しろ！」

ボリス上官が声を張り上げて、ザワつく辺りの声を一蹴した。スタイルズは素早く機関銃を確認し弾薬を補充する。彼の手つきには無駄がなく戦友としての信頼感が感じられる。その横で私も砲台の周辺を確認し必要な装備を調える。心の中には戦いへの恐怖と共に、仲間たちを守るといふ強い決意が浮き上がっていた。

「スラヴィ、一緒にこっちにきて手伝ってくれ！」

スタイルズが声をかける。その声には、緊張とともに若干の焦りが込められていた。彼は、機関銃の近くで、弾薬の補充作業を急いでいる。

突然、砲台の遠くから爆発音が響き渡る。地面が揺れ、爆風が吹きつける。私は一瞬目を閉じ、その振動を身体全体で感じる。周囲の兵士たちが叫び声を上げ、慌てた様子で動

き回る。辺りは兵士の粉々になった遺体で血まみれだ。ボリス軍曹がその場に戻り、鋭い目で戦況を見守っている。彼の顔には普段の冷静さとは異なる緊張と集中の色が浮かんでいた。スタイルズと私は連携して機関銃を操作し始める。彼らの周囲には、戦友たちの息が切れる音やうめき声、銃声、砲撃の音が交差している。私は敵の動きを捉えようと必死で視線を走らせ、敵の動きを確認する。機関銃のトリガーを押さえ弾丸一発一発を命中させるのだ。容赦など必要ない。自分たちの命のため、たとえ負傷兵でもそれが子どもだとしても私はここを維持するために動くものすべてに弾丸を当て続ける。

「右から三人接近！ クソ、左からも来てやがる！」

スタイルズは必死に自分たちを守りながら、敵の位置を的確に味方に教えている。

「全員、死んでも持ち場を離れるな！ なんとしてもここを守守するのだ！」

ボリス軍曹の声が激しい戦闘の中で響いた。その声に応えるように兵士たちは再び気を引き締め、戦闘態勢を整えた。そして突然、私の視界が歪んだ。二度目の砲撃により周囲は轟音に包まれ強烈な爆風が二人を襲った。

「スラヴィ！ 伏せろ！」

スタイルズが叫んだが、すでに私には言葉を把握するほどの余裕などなかった。爆風が身体を押しつぶし、兵器の破片や砂塵が私の身体の上を飛んでいった。直後に兵士の叫び声

が聞こえたが、私の意識は遠のいていった。

「……がしだせ！ ……さがしだせ！ ……負傷兵を一人残らず探し出せ！」

目が覚めると、戦闘が終わった後の悲惨な光景が広がっていた。しかし、そこにはあきらかな違和感が存在していた。それに気づいた私はその場から動かさず息を殺した。

「あれはブルガリア軍じゃない……セルビア軍だ」

心の中でそう呟きながらもさらに深く身をかがめた。セルビア軍が銃を構えながら隊列を組んで進軍していく。私は身を潜めながら敵軍が通り過ぎるのを待った。しばらくして、敵が通り過ぎたことを確認すると、敵兵の遺体から消音機付きの拳銃を奪った。私の手はまだ震えていたが、意識は研ぎ澄まされたままだった。私は自分の目的を思い出し、仲間との合流を強く望んでいたのだ。

セルビア兵の声が冷たく響いた。

「残りのブルガリア兵を殺せ……一人残らずだ……負傷兵でも生き残らせるな」

ここに留まっていれば、確実に殺されてしまう。私はセルビア兵が後ろを向いた瞬間を見計らって動き出した。崩れた建物の陰に身を潜めながら、ゆっくりと、しかし確実に前進を続けた。足元に散らばった瓦礫の上を静かに歩き、視線は周囲の動きを常にチェックしながら進んだ。

戦場から逃れ、森の中に身を隠した。木々の間を進みながら私は周囲に耳を澄ませ、目を凝らして敵軍の動きを探った。

突然、私の耳に物音が響いた。私はすぐに立ち止まり、周囲の音に耳を傾けた。セルビア兵がパトロールしているのが見える。私は消音器付きの拳銃を手に取り構えた。正確に当てないとセルビア兵に自分の位置を知られてしまう。敵兵は木陰に立ち止まり、何かを確認している。その瞬間、私は即座に行動を起こした。兵士が振り返る前に、頭部を狙い敵兵を一発で仕留めた。

「この山を下りれば、前線を後退させた本隊と合流できるかもしれない」

私は再び山の斜面を進んだ。道のりは険しいが、仲間たちと合流するにはこの道を進むしかない。

「はあ……はあ……はあ……どれだけ進めばいいのだろうか。私は一体どこにいるのだろうか」

敵から逃れるため無我夢中で走り回ったが、一体どこにいるのか、どこに向かえばいいのか私にはわからなくなってしまっていた。山の中の野宿ほど危険なものはない。本隊が近くにあることを祈りつつ、疲れ切った身体を押しして無我夢中で走りまわった。

「光だ……光が見える！」

木々の間を駆け抜けると、そこにはブルガリア軍の陣地があった。多くの兵士が駆け回り、騒がしい。人ごみの中に、この戦争を大きく変えるであろう兵器をかすかに目にすることができた。私は、本隊に辿り着いた安心からか意識が遠のいていくのが分かった。

第二章 鉄の箱

意識が戻るとそこはテントの中であった。テントの中には多くの負傷兵がベッドに横たわっていた。看護婦たちは医師を助けながら、かいかいしく看護していた。テントから出ると外に異様な光景を見ることができた。そこには小型飛行機や鉄の箱のような物が多く並んでいた。この鉄の箱は、「タンク」と呼ばれていた。前後左右に可動する砲や機関銃があり、それはまさに移動する鋼の要塞のようなものであった。

「まさか、本物が見られるとは……」

私は帝国陸軍学校の時に士官達がうわさしていたことを覚えていた。

「ドイツ帝国では、陸上で戦艦の主砲と同程度の砲を載せる車両の開発をしているそうだな」

「また、そんな話を……。お前、この前はただの噂だと言っていただろうが」

士官たちは笑いながら話をしていた。

中央同盟国の主軸であり軍事大国であるドイツ帝国、その隣国で領地の拡大を推し進めるオーストリア・ハンガリー帝国、この二ヶ国により推し進められていた計画が陸上でも戦艦などのように巨大な砲を移動しながらなおかつ塹壕やトーチカなどを破壊しながら進める兵器、それが「タンク」なのである。どのようなものは聞いていたが実物がこれほどすごいものだとは思っていなかった。そして私は今からこれに

乗るのだという恐れも少なからずあった。帝国陸軍学校時代に、少しは兵器の構造や修理法などは学んだが本当に実現するとは一ミリも思っておらず、しかも自分自身がこのような兵器に乗るなど当時の私は考えてもいなかったのだ。

だがこの兵器が登場したことにより、各地の戦況は大きく変わっていった。ブルガリア帝国軍がじわじわとセルビア王国軍を追い詰めていることは確実だ。私たちが監視していた砲台一帯が敵軍に落ちたことにより戦況としてはあまり良いものとは言えない状況で、今回ここにタンクが派遣されたということは、死ぬ気で敵陣地を奪還し、そのまま敵の首都であるベオグラードまで進行せよという本国からの圧が司令官に重くかかっていたのであろう。地理的にはここが一番敵の首都に近く、砲台守備の敵兵も今は敵軍が少ないと司令官は判断したようだ。

私が気を失っている間に、仲間を数人連れて逃げ込められたボリス上官と私や整備兵を含めた七人が戦車に乗り、砲台陣地奪還の戦場へと進むこととなった。私たちを含め戦車は約六十台、装甲車はその二倍以上、そして航空機は二百機を超える正に大軍隊である。軍部からはこれ以上は出せない、次はないと釘を刺されたと上官より聞かされた。

朝もやの中、けたたましいエンジン音とプロペラ音が辺り一面に響いた。まず、先遣隊である騎馬部隊が偵察も兼ねて出撃。その後航空隊、戦車や装甲車などを率いる機甲部隊、そして歩兵部隊、火砲や野戦砲などの野砲部隊の順で移動し

た。砲台陣地の奪還とベオグラード陥落を目指す本格的な作戦が始まったのである。上官から、「敵は頑丈な要塞に守られている……各自報告を怠るな」という命令があった。

ドイツの革新的な発明が戦争を泥沼化し、世界は破滅の道へと確実に進んでいるのであった。時刻は進み日が落ちかけブルガリア帝国軍の先遣隊が砲台陣地に到着したころ、その砲兵陣地には敵兵の姿はなく、同盟国であるオーストリア・ハンガリー軍の、最強と恐れられているグルツペンハイマー率いる部隊がいたのだ。

「なぜ、オーストリアの軍がこの陣地にいるのだ……」
彼らを通った後は降伏者の虐殺や金品の略奪が行われ、まるで悪魔に襲われたような凄惨な状況になるとうわさが飛び交っていた。本国からは、彼らがいるのであればあとは任せ、敵の首都に進軍せよと指示があったため、全軍は、そのまま前進した。

それから二日後の夜、ブルガリア帝国軍はベオグラードを囲むように配置をし、野戦砲や航空機の攻撃など総攻撃することとなった。耳をつんざくような砲撃音や航空機による爆撃の音が響いた後、ベオグラード奪還作戦が開始された。首都ということもあって、対空砲陣地や要塞線が幾重にも敷かれており、砲撃や爆撃では大きなダメージは与えられなかった。だが、ブルガリア帝国軍の奇襲により敵軍は多くの死者を出したようだ。我が機甲部隊の目的は、まず歩兵の天敵であるトーチカや塹壕を破壊することである。

「三時の方向に自爆兵、四時の方向から機銃掃射」

圧倒的な兵器の数や戦術の差などから、セルビア軍は押されていき、陥落も時間の問題だろうと思っていたその時であった。「もう少しだ……もう少しで敵の首都に着くぞ……」と、私は言って兵士を奮い立たせた。

突如として背後の上空より航空機とは思えないものが敵の首都を一瞬にして破壊したのである。上空には大きな爆発による雲が出来上がり、爆発の影響なのか、まだ敵の首都から五百メートル離れているにもかかわらず私たちの所まで爆風が届いた。すさまじい攻撃で、私を含め周りの兵士は皆、目を丸くしたまま立ちすくんでいた。

「全員！ 何か掴め！ 爆風がくるぞ！」
本国より伝達があり、敵の首都が壊滅したとともにセルビア軍は降伏を宣言した。そして、セルビア領はそのままブルガリア領として併合されることとなった。

ブルガリア帝国軍がセルビア軍に勝利したということ聞き、別戦線にて戦闘中だった帝政ギリシャやルーマニア王国も降伏を宣言、バルカン半島での戦争は実質的に一つの兵器の力により終幕した。

戦後の調印では、帝政ギリシャ、ルーマニア王国、セルビア王国はブルガリア帝国が全土を併合、軍隊はブルガリア帝国軍として全て接收された。第二次バルカン戦争は、ブルガリア帝国軍が強大な軍事国家へと作り上げられるための基礎となった。

第三章 再び回る歯車

第二次バルカン戦争が終幕した一週間後、ヨーロッパの火花はバルカンの地から広がった。イタリア王国、オーストリア・ハンガリー帝国、ドイツ帝国、バルカン連邦（旧ブルガリア帝国）の四か国からなる四国軍事同盟とフランス、イギリス、ロシア帝国、アメリカ合衆国からなる通商連合との世界大戦へと発展していった。だが、バルカン戦争に終止符を打ったドイツの新兵器による脅威によりお互い牽制しあうこととなり、東部戦線も西部戦線も一向に進む気配はなく緊張した状態が続くこととなった。

しかし、開戦から六年が経った一九二〇年に、再び戦いの歯車が動くこととなる。それは、冬が終わり春が近づいてきたころだった。バルカン戦争は終わったが、バルカン連邦は軍備の増強を推し進め、ドイツ、フランス等の列強と肩を並べるほどの軍事国家となっていた。

「また、この軍服を着ることになるとは……」

バルカン戦争終結から約四年で私はバルカン連邦第二機甲部隊の第五分隊分隊長となった。私は再び戦地へと送られることとなった。

「兵器もだいぶ新しくなったな……」

私が四年前に初めて乗った戦車に比べ、改良され小型化していた。ドイツ帝国の兵器開発はすさまじかった。周りの士

官達からドイツ帝国は強大な戦艦や陸上の大砲の研究を進めているということを聞いた。

「はあ……何とバカバカしい……陸上で戦艦に搭載されているような大砲を撃とうなんてできないはずだ」

軍の研究者も言っていた。戦艦の主砲を台に載せて撃つと台ごとひっくり返ってしまうのだと。だが、ドイツ帝国は大型飛行船や大型戦艦などを開発し、戦場に登場させてきた。欧州での戦争が未だに終わらず泥沼化しているうえに、また新たに戦争をしようとしていた。だが、この戦争はバルカン連邦の一つのミスから始まったのだった。今、私は連邦の所有する潜水艦の視察員として乗船していた。

「ここが潜水艦の中か……ここは水の中だから死ぬときは簡単そうだな……」

「何をおっしゃるのですか、あなた方の戦場も同じようなものでしょう」

「ハハハ……そうだな……我々の戦場でも死ぬときは死ぬということだな」

その時、艦内に見張り員の声が響いた。

「方位百二十度、敵輸送船団発見」

「攻撃しますか、艦長」

それを聞いて、ふと「ひょっとして航路的にアメリカの商船ではないか」という思いが私の脳裏をよぎった。この時、もっと強く艦長に進言していれば戦争にはなっていなかったかもしれない。しかし、これは後にわかったことだった。

見張り員の声を聴き、すぐさま艦長は命令した。

「魚雷管、一番から四番装填！」

「装填完了！」

「発射！」

鈍い発射音と共に四発の魚雷が発射され、輸送船に命中した。

時遅く、本国より「人道的支援を行っているアメリカの船舶を攻撃するな」という命令がきた。命令を知らずに我々の潜水艦は攻撃してしまったのだ。このことで、アメリカは本格的に参戦してきた。

これにより一九二〇年六月、二度目の戦争が始まり、さらに何十年も続くことになったのである。

アルテシア戦記

加治木高等学校 二年

上別府 蒼真

二十歳になって少し経った頃。僕、ライヴ・レンシーは軍人になった。兵として、祖国であるアルテシア選王国の力になれるように志願して入隊した。僕の同期にはアーヴァという入隊してからの親友兼同僚がいる。アーヴァは弓の名手で、僕は射撃部隊の落ちこぼれだった。なぜ優秀なアーヴァが僕の友人でいてくれるのかは分からないが、ムカつくことはあるものの良い奴だ。

ある日、いつも通り訓練を済ませ、食堂で昼食を食べていると僕とアーヴァ含めた何人かが呼び出された。

「私は三・一・二・第四射撃小隊長、ロンガ・アーク中尉である。いきなりだが、君たちは本日付で二等兵卒業だ」

三・一・二とは第三連隊、第一大隊、第二中隊のことである。……ややこしい。正直言ってこういうことを覚えるのは苦労している。そんなことより、何だって？ 僕が二等兵卒業？ いったい何のことだろうか。

「現在行われているラバツカ王国軍との戦闘員が不足している。つまり、明日から君たちは一等兵。実戦配備となる」

言っていることの意味が分からなかった。僕が実戦配備？ 何を言っているんだ？ アーヴァや他の成績優秀者ならともかく、落ちこぼれの僕が戦場に向かうなんて、死ぬと言ってのようなものじゃないか。

「そしてそれに伴い君たちは三・一・二・四・第二分隊所属となる。分隊長はそのアーヴァ・レスト伍長だ」

アーヴァが分隊長、それに伍長。まあ、ありえない話ではなかった。問題はそこにはない。僕は知っていた。三・一・二・四・第二分隊なんてものは存在しない。いや、存在していなかった。つまり、新設された部隊だということだ。新設された部隊の初代分隊長には編成の権限がある。つまり、あいつは。

「おい、アーヴァ！ お前は僕を殺す気か？」

周りに聞こえないくらいの声で隣にいたアーヴァに話しかける。アーヴァはニヤニヤしてこっちを見るだけだった。

「おいその……ああそう、ライヴ・レンシー！ お前のことはよく聞いている。足を引っ張るんじゃないぞ！」

周囲からクスクスという小さな笑いが起こった。顔が赤くなるのを感じる。ああ、もう最悪だ。

「アーヴァ！ お前は一体何がしたいんだ？」

新しく配置された部屋で僕は叫ぶ。隣にも響いたのか、壁が叩かれた。今は隣人トラブルなど気にしている場合ではない。

「何がって……お前は俺の親友だろう？ 最も信頼している。それ以外に何の理由がある？」

こいつは自分の部隊に僕を入れ込むだけに収まらず、僕を副隊長に指名したのである。実質上の分隊のナンバー・ツーである。

「僕が落ちこぼれで役に立たないことくらい、君だって知っているだろう！ 上官だってきつとお前に失望しているはずだ。あいつの優秀さは人選には適応されていなかったようだってな！」

いつものようにからかいの言葉で返してくると思った。僕だって任命された以上は何とかしようと考えて、それを踏まえた上での冗談で言ったつもりだった。しかし、返された言葉は思いもなかったものだった。

「ライヴ。俺の人選が無能だと？ 俺は本気でお前のことを買っているんだ。謙遜のつもりかもしれないが、それは俺を貶す言葉になるんだぞ」

冷やかな目だった。アーヴァのこんな目は見たことが無かった。

「じよ……冗談だよ。僕だって選ばれたからには努力はするさ」

少し怯えたような声で僕はアーヴァに弁解する。

「でも、信頼を加味しても僕より優秀な人なんていくらでもいるだろう？」

アーヴァは一つため息をつくとき再び口を開く。

「何度も言わせるな。俺がそんなことも考えられないとも言いたいのか？ 俺はお前を信用している。それは人間としても、一人の射手としてもだ」

もしかしてアーヴァは本当に僕のことを買って配属したのだろうか。僕は実技、筆記ともに落ちこぼれの部類だ。そんな僕のどこを？ 思考をぐるぐると回す。

「おい、消灯時間だ。明日のマルロクサンマルには点呼があるから寝坊するんじゃないぞ」

こいつは僕に考える時間すら与えてくれないようだ。

その後、僕たちは部屋で眠った。一瞬のように感じた睡眠が終わると、朝の点呼が始まった。といっても僕は副隊長としてアーヴァの隣に立っているだけで特に何もしないのだが。「随分と格好がついているじゃないか。やっぱりお前は人の上に立っているのが似合っているよ」

「ドーも。もしかしてライヴなりの嫌みだったか？」

別にそんなつもりはないのだが。肩をすくめる僕をアーヴァは少し口を歪めて一瞥し、部屋に戻って行った。本当に今日から実戦配備なのかと疑問に思うような空気だった。

次に目を覚ました時に僕がいたのは戦場だった。そう思っってしまうほどの目まぐるしい日々が続いていたのだ。実戦配備というのは言葉の通りの意味だった。よっぽど我が国は軍人の頭数が足りていないのか、新兵にも関わらず前線近くに配備された。既に廃墟と瓦礫の集合体と化していたマルケス

ベルクからの遅滞戦闘及び撤退の援護。そして防衛ラインであるアルベル川沿岸要塞の防衛が僕らの任務だった。

現場の上官達への挨拶回りを終え、辺りを見渡して言った。

「アーヴァ、この戦線だけでも相当苦しい状況にありそうと思えるんだけど」

「いや、まだどうにかなるだろう。……先ほど見た上官の目はまだ死んでいなかった」

目？ こいつはそんなところを見ていたのか。まあ僕が見たところで何も分からなかったとは思いますが、つくづくアーヴァとの軍人としての差を実感する。

「この後はどうするんだ？」

「もう今日はすることもない。移動で疲れた体を休めるとしよう」

そうして僕たちは割り当てられた兵舎に向かい、少し早めに眠りに就くことにした。

「僕は今まで落ちこぼれとしてやってきたからね。こんな会議は初めてだったよ」

「まあ、そうだろうな」

朝の会議を終えた僕たちは、兵舎に戻りながら確認をし合っていた。

「それで？ 僕たちは結局どうなるんだっけ」

「お前は話くらい聞けるようになったらどうだ？」

「上官だらけで緊張していたんだ」

三・一・二・四・二直属の上部である三・一・二・四小隊長のロンガ・アーコ中尉だけではなく、その更に上の中隊長クラスの士官も参加していた。

「まず俺たちが配置されるのはアルベル川を越えた先にあるインターセツグ川だ」

「マルケスベルクとベルヴィアの間……アルテシア選王国とラバツカ王国の国境線となっていた川だね」

「そうだ。そして、そこからマルケスベルクに籠城している友軍の援護を行う」

「つまり川の向こう側から遅滞戦闘の援護をするってことか」
兵舎に戻り、分隊の仲間にも同様の説明をする。ここでも喋っているのはほとんどアーヴァだ。

「アーヴァ・レスト分隊長、質問があるのですが」

そう手を上げたのは同期のトリア・プリベータだった。彼は実技は特筆するほどの成績ではなかったが、筆記試験などの座学に関しては同期の中でもトップクラスの実力を誇っている。もちろん特筆するほどの成績ではないというのは僕よりは上ということでもある。

「マルケスベルクの友軍の状況はどのようなものでしょうか？」

「状況は芳しくない。市街地に立てこもっているらしいが、依然コモンル伯を中心としたラバツカ軍の包囲下にあり、食料や装備などの物資が不足しているようだ」

「それでは友軍が自力で脱出すれば人的被害が拡大するのではと愚考致します」

「では何か考えがあるか？」

「はい、私は小隊規模での射撃部隊による陽動作戦を進言すべきかと」

「……分かった。では文書にまとめておけ」

「感謝致します」

トリアの作戦立案能力はアーヴァ……もしかしたら、さらに上にまで届いているのかもしれない。アーヴァが勝算もないことを進言させるとは思えないからだ。ますます自分の配置に疑問を覚えてしまう。トリアの方が副隊長に向いているのではないか？

「おい、ライヴ。今日のマルサンマルマルに、射撃訓練場に来い」

「急になんだ？」

「詳しいことは後で話す」

「まあいいけどさ……」

三時になり、約束通り射撃訓練場に向かうと、アーヴァとトリアがいた。

「上官に進言した帰りだな。トリアも付いて行きたいと言うから連れてきた」

「アーヴァ分隊長がライヴ副隊長を直々に訓練すると聞き、興味を持ちまして」

「副隊長なんて付けなくていいよ。むしろ僕は君のことを尊敬しているんだ」

「それよりも、訓練だった？ わざわざ呼び出してやること

か？」

「よく考えて見ろ。トリアの作戦が採用され、陽動作戦の人員に選ばれたらお前がどうなる？」

「後方支援でも足手纏いレベルの僕が陽動作戦なんてやったら囮（おとり）にされてるうちに何もできずに死んでしまいうさだね」

「分かってるじゃないか」

僕を買って部隊に入れたのはお前じゃないかという言葉をなんとか飲み込む。

「それで？ どんな訓練なんだ？」

「よし。とりあえず二十メートル地点から人形に向かって弓を引いてみる」

そのとおりに二十メートル地点から人形を狙う。案の定うまくいかずに後ろの壁に矢が刺さる。

「次は六十メートルだ」

「ちょ、ちょっと待てよアーヴァ。二十メートルでも当たらないのに六十メートルなんて無理に決まってるだろ！」

「いいから引け」

ブツブツ文句を言いながら移動し、弓を構える。

「そのまま狙え……両目を開ける。片目で狙いを定めるな。角度は思ったよりも高く」

半分ヤケになって言われた通りに狙いを定め、矢を放つ。飛んで行った矢は人形の手前に刺さった。

「やっぱり当たらない」

「何を言っているんだ？ 六十メートル地点から放った矢の方が惜しい位置に当たっているだろう？ お前は元々遠距離の方が向いているんだ」

「……悔しいがアーヴァの言う通りなのか。僕は近距離からでも当たらないから遠距離は当たるはずがないという固定観念に囚われていたのかもしれない。」

「凄いですね、アーヴァ分隊長」

「俺は人がどんな才能を持っているか分かるんだ」

「やっばりお前は未来に生きているんじゃないか？」

「本当は自力で気付いて成長して欲しかったが、そんな時間もなさそうだしな」

「では次は射撃兵による陽動作戦の基本をな……」

アーヴァの顔が急に神妙な表情に変わると、最初にこう言った。

「敵の頭を突くんだ。指揮系統を崩壊させるのさ。そのためには……躊躇うな」

数日後。本格的に作戦開始となった僕たちはアルベール川を越え、マルケスベルクの南側のスタプト森林へ向かった。なんとトリアの作戦が一部採用されたようで、僕たちは射撃遊撃部隊として陽動を担うこととなった。

「いいか？ 俺たちの目標はコモンル伯軍の誘導だ。余力があれば敵戦力の消耗を狙う」

「了解だ」

「二時方面に敵騎兵！ 距離三百！」

三百メートル先の相手を先に発見できたのは大きいだろう。それに騎兵は弓兵の格好の的だ。森林という地形も相まって戦いやすい。僕たちの小隊は気付かれないように移動し、射程距離まで近づく。

「射撃用意！ ……放て！」

一斉に放たれた矢は、弾幕となり敵に襲いかかる。騎兵は馬が撃たれると落馬する。そこを第二陣の弾幕が襲う。そこそこの損壊を与えたと同時に走り出す。無事だった敵は笛を吹きながらこちらを追いかけてくる。

「ここからが見せ所だな」

アーヴァはそう言う矢を放つ。追っ手の一人は気絶したらしく馬から落ち、動かなくなった。ここからは逃げながら各自引き寄せるための撒き餌として一定の反撃を与え続ける。だが、僕の腕が役に立たないのはここだ。弾幕の一つとして一応の価値を持っていた僕の矢は、敵を狙う一本の矢になった瞬間に精度が低い意味のない攻撃に成り果てるのだ。

「やっばりアーヴァは凄いな……動款的にも軽々か。アーヴァは未来を見る才能でも持っているんじゃないか？」

「俺が未来を見られるとしても、せめてお前も今は見てほしいけどね、ライヴ」

アーヴァはそう言う僕を死角から現れた敵を射抜く。「じゃあ僕は過去でも見れば良いんですかね？」

トリアが横道から飛び出してきた敵の攻撃を避けながらそ

う話しかけてくる。

「ラバツカの伝統的な二重奇襲ですよ」

「二人を見ていると自分がただ守られているだけに感じるよ」

陽動は危険な任務だ。実際すでに小隊の一部は失われている。この二人がいるなら……と安心してはいけない。いつ敵の増援が来るかわからない。

「敵軽装歩兵を発見！ 恐らくコモンル伯軍の主力の一部です！」

その報告を聞いたとき、二つの感情が湧き上がる。陽動作戦の成功を確信した喜びと、逃亡の絶望さへの恐怖だ。

小一時間ほど逃げ続けた。全員息は絶え絶えで、最初は小隊規模だった味方はいつの間にか分隊規模まで減少していた。

「よく生き延びたな、ライヴ」

「役には立ってないけどね！」

「生きてるなら良いじゃないか。作戦は恐らく成功なんだ」

果たしてマルケスベルクの友軍は無事に脱出できたのだろうか。

「そろそろ追っ手も疲れたんですかね？ ラバツカの馬は速いですが、持久力はそこまでなんです」

ああ、もう安心なのか。初めての本格的な戦闘は成功……と言えるかは怪しいが、生き延びた。それだけで。

「て、敵兵が単騎突撃を！」

声が響く。次の瞬間、その声は途切れた。現れたのは、他

の兵よりも一回り大きい体を持った男。その服装から、ただのヤケが差した兵でないことが窺（うかが）える。

「コモンル伯……こいつはラバツカ王国南方伯のコモンル伯だ！」

コモンル伯。それは今回の戦争の主要人物であり、ラバツカ王国の英雄的人物。そんな人物がわざわざこんな所には……いや、この人数と練度では太刀打ちできない相手だ。脚がすくむ。ああ、本来の戦場はこういう場所なのか。目の前に迫る死に目を閉じようとした時。

「コモンル伯抑えたり！ おい、さっさとやれ！」

アーヴァがコモンル伯に飛び付いていた。しかし、その体勢だとコモンル伯を狙いづらい。どうするべきか……。その時、アーヴァの言葉が頭に流れてくる。

「躊躇うな、今を見ろ……」

腕が勝手に動き出していた。陽動のために機動力を得ようとすると必然的に軽装になる。至近距離で軽装の相手にロングボウを使えばどうなるか。それは弓兵である僕らは十分に知っていた。

「戦場で未来に生きる……か。なあ、アーヴァ。お前はどこまで未来に生きれば満足なんだよ？」

アーヴァは口を歪ませて僕を一瞥し、こう言った。

「アルテシアが勝つまで……だな」

僕はコモンル伯を、彼らを射抜いた。戦場で僕よりも未来に生きた男は、僕よりも早く戦争の結末にたどり着いたのだ。

バナナになった僕

種子島中央高等学校 一年

日高 晴央

転生と言えば、みんな異世界の主人公とか呼び出された勇者とかを思い浮かべるだろう。だが現実はそのなにごとでもない。転生するのはどうやら人間限定ではないらしい。つまり、俺のようにバナナに転生することもあるというわけだ。

ここはどこなのかも分からない。せつかく転生したつのに、バナナって……。なんて後悔しても変えられはしない。せめて美味しく食べてもらいたいな、なんてことを考えていたら誰か来た。目がないから見えないが、耳はないのに聞こえる。変な感じだ。

「お、バナナあんじゃん」

どうやら男が来たようだ。パツと手に取り、美味しいとも言わずに、食われた。つまらなかつたなあ、と後悔をしながら胃液に落ち、溶ける……。

ドタバタバタと言う音で目が覚めた。どう言う訳か、またバナナに転生している。今回は何故か、目が見える。バ

ナナに目が付いてるなんて想像もしたくないが、目が見えるのは有難い。それに耳もさつきと同じく聞こえるおかげで、さつきよりも状況が分かる。今度は家族のようだ。どうやら今度は小さな子供のおやつとして出されるようだ。小さく切って口に運ばれた。

「美味しいー！」

という声とともに、少しは食われてもよかつたかなと思えた。そして、俺は少し温かい胃液に落ち、溶けた。

ピツピツと言う音でまた目が覚めた。先程と同じで、目も見えるし耳も聞こえる。今度は病院の様だ。目の前で綺麗な人が眠っている。綺麗だななんて考えていたら、

「声？」

と聞こえた。周りには誰も居ないのに何言ってるんだ。と思っていたら、

「やっぱり！」

なんて言う。どうやら俺は、今回喋れるようになっていたらしい。つまり、思っていたことが全て筒抜けになっていたと言うことだ。俺は慌てふためいたが、とりあえず挨拶をした。

「凄い！ 喋れるバナナなんてものあるんだ！」

と、その子は無邪気に喜んだ。バナナになってから初めての対話だったので嬉しく、つい俺はその子に俺の人生と

ちよつとだけバナナ生のことなどを話した。その子は病気のせいか元気が無さそうだったが、反応豊かに聞いてくれていた。この子の名前は咲肌恵と言うらしい。綺麗な名前です、ね、なんて言うのを頬を赤くして喜んだ。

突然、この子に食われて終わっても、悪くないなと思った。思ったというよりバナナの本能（？）として感じたという方が近いかもしれない。

これは俺の推測だが、自分から望んだ人に望んで食べられると転生とかは終わる気がする。転生物のアニメや小説はだいたい目的を果たせられたら終わるからだ。だから、俺以外にもバナナ生を終えられず、ずっと食べられては転生し、食べられては転生するループをしているバナナがいるのかも知れない。

俺は彼女に俺を食べようお願いした。彼女も最初は反対したが、何度も頼み、理由（わけ）を説明し、ようやく悲しそうな表情を浮かべながら承諾してくれた。

俺は食べられた。

「美味しい、美味しい」と、今度ははっきりと聞こえた。温かい……。温泉のような胃液の湖で、俺は満足気に溶けていった。

蝉の声

大島高等学校 二年

大榮 奈穂

ミンミンと鳴き続けていたはずの蝉の鳴き声が一瞬にして消えた。母の、

「ねえ、晴斗。おばあちゃん家に行かない？ 一人で」

という一言によって。

母と二人、夕ご飯中この一言に箸を持ったまま固まってしまった。

「なんで？」

母の目を見ずに言った。

「今年はおばあちゃんが会いたって。それに、蓮斗は受験生だし、もう高二なんだから一人で行けるでしょ？」

「行けはするけど……」

あまり行きたくないからと否定を遠回しに言ってみたが、「なら大丈夫よ。バッグもキャリアがあるし、おばあちゃんから色々借りれば良いしね」

きっぱりと返された。母の力は強いということを感じた夜だった。

そして迎えた出発の日。

「一応、見送りに来た」と、生意気をいう弟を連れて車へ乗り込むと、自然とおばあちゃんの話になる。

「良かったー。俺は行かなくて。電波届いても通信遅いし、何もないじゃん。あそこらへん」

「そんなこと言わないの。今は昔と変わっているかもしれないでしょう？」

「そんなすぐには変わらないって」

「気分転換にはなるだろうし、空気が綺麗だから過ごしやすいはず」

と母が弟の言葉に被せ、話が途切れた。

「いつてらっしゃい」

「お土産よろしく」

そんな声に押され、電車に乗り込んだ。立っている数人によそに、椅子に座る。ホームを見ると、もうそこには誰もいなかった。

目的地。降りるのは、僕一人。バスに乗り込む。外気に触れていたのは一瞬のはずなのにムワツとするのが肌にくっついて気持ち悪い。夏特有だろうか。空には今にも降り出しそうな薄暗い雲が広がっている。いくつもの無人のバス停を過ぎる。

僕からは畑とその間あいだに挟まれ窮屈そうにしている小道しか見えないが、その人気のなさにちよつとした恐怖をも感じる。懐かしい景色が目に入り始め、バスは止まった。キ

ヤリーを引き降ろし、おばあちゃんに声をかける。

「元気にしとった？」

そんな軽い会話を交わす。

ゆったりとした声で話すおばあちゃんの、その声にふわふわとした気持ちが出てくる。

「今、膝は大丈夫なの？」

今年五月上旬に膝を壊した僕。部活で陸上をやっている僕は、学校で階段から落ちた。自分の失態であるがために何もぶつつけられずに、心の中に居座られている。考えるだけでもやもやする。そのため、今でもあまり話題にしたいくない話だ。

「そう？　なら早速家に向かおうかね」

路駐されている車に驚くと、

「こんなもんよ、田舎だから駐車場めつたにないし、通る車もないのよ」

驚いたのに気が付いたのか、飄々と言われた。

カタカタと音を鳴らしながら揺れる車。おばあちゃん特有のにおいのするシート。車の見当たらない道を眺めながらラジオを聴く。開けた窓から入る、湿った空気と草のにおいを楽しんだ。バス停から一時間もかかった道のり。

「はい到着。ここがおばあちゃん家ね。覚えているかな」

五日間だけどゆったりしていつてね」

「うん。五日間お世話になります」

久しぶりのガラガラ戸を引くと、小さい頃これで遊んだな

あと思い出が浮かんできた。記憶の中での配置と変わらないなど考える自分に苦笑しながらも入る。

「ほら、手を洗っておいで。その後、おじいちゃんにお線香をあげるから」

促されるまま荷物を部屋に置いて、手を洗う。仏壇の前に行くのと、もう準備をしており、隣に座って手を合わせ、笑顔の祖父に、線香を家族分、お供えした。

夕ご飯の準備をしようと立ち上がるおばあちゃんの背中に続き台所に行くのと、

「晴斗は良いのよ、お客さんなんだから。もし暇だったらお散歩でもしておいで。何も無いけど都会と比べて涼しい風はあるはずだから、ね」

言われてしまったため、靴を履き外に出る。蝉が遠くで鳴いていた。畑にいる人などと目が合うのは少し気まずかったが、挨拶をすると驚いた顔をしながらも返してくれるのが面白かった。カラスが鳴き、本格的に日が沈み始めた時に帰ると、座卓には、ご飯に味噌汁、漬物にナスの煮浸し、肉じゃが、ひじきなどたくさん並んでいた。

「ちよつとはりきつちやってね。たくさん作っちゃったけど残してもいいからね」

食べ切った料理たちはとてもおいしかった。

「おいしかったよ、ありがとう」と言いながら、流しに食器を持っていくと、おばあちゃんは目を大きく開き、

「本当？　もうこんなにお世辞が上手になったのねえ。食器

も運んでくれてありがとう」

と笑ってくれたので、嬉しくなって家ではめったにやらない食器洗いを手伝った。

洗い終わるとお風呂をすすめられた。しっかりと浸かり、脱衣所を出ると、たわいもない話をしてその日は終わった。

朝起きると八時で、久しぶりに使った布団をたたむ。部屋を出ておばあちゃんを探すも見つからない。戸の独特の音が聞こえた。向かうとトマトや茄子の入ったお皿を持つおばあちゃんがいた。

「おはよう。起きたの。今からご飯出すからまってね」
のんびりと言うおばあちゃんと朝ごはんを食べ、午前はまた外を散策しに行く。昨日とは違って、少し生暖かい風があった。

周りの景色は、薄暗かった昨日とは違い、太陽が照って明るかった。石垣をよけ道路に出る。歩道はなく、道路の端っこを歩く。色を失ったまま連なる家々の石垣から顔を出した木の枝や蔦が邪魔に感じる。草の緑が目に入る。穏やかな風に揺られるハイビスカス。畑の草の匂い。どこから川の音もする。おばあちゃん家にきてまだ一日もたっていないが、この時間のもの静けさ、自分が整うようなこの空気感に、僕はこの場所が好きになった。

午後はすることがない。太陽が上がりきったおかげで暑くなり、とろけた僕におばあちゃんが畑の手伝いをすることを提案してくれた。ネットの屋根のある野菜たちは、今朝食べ

たトマトやナスだけでなく、ゴーヤーやヨモギ、ピーマンに島バナナまであってびっくりだ。そうやって午前と午後で分ける生活が三日続いた。心が満たされホクホクだった三日目の夜、寝かけた時に急にお手洗いにいきたくなくなった。襖を少しスライドしたところで電気が差し込んで、おばあちゃんが起きていることがわかった。その上、座敷で誰かと電話している。ポリウムをマックスにしているのだろう。相手の声がもれ聞こえている。電話が終わるまで待とうかなと思いつき、戻ろうとした時、自分の名前が聞こえてドキッとした。

「晴斗は今どんな様子？ 元気にしてる？」

聞こえた相手の声は、僕のお母さんだった。

「うん、元気だよ。手伝いもしてくれるし、外にも毎日散歩行ったりして、楽しくしているよ」

「そう、なの。家ではなんか重々しい空気纏っていたし、聞いてあげられなかったから気分転換には良いかもと思って」
僕はそんなに苦しそうに見えていたのだろうか。母には。少しの嬉しさと心配をかけてしまったという罪悪感的なもので頭はぐちゃぐちゃになった。お手洗いにいくのさえも忘れて、掛け布団に潜り込む。おばあちゃん家で初めてあまり眠れない夜を過ごした。

意識が戻った感覚がして目を開けると、朝だった。暗いままのスマホに浮かぶ自分の酷い顔に、あの話が嘘ではないことを実感した。あの母の声と話を聞いて何もする気にはなれなかった。午後になると、おばあちゃんが畑に誘ってくれた

ことで外に出たが、蟬がうるさすぎるのか、作業中にしているおばあちゃんとの会話があまり耳に入ってこない。

「晴斗。ちょっと休憩しようか」

と声をかけられた。まあ、誘われたのなら。と木の下にあった年季の入った椅子に腰をおろす。

「昨日の夜のあなたのお母さんとの電話、聞いていたでしょう？」

と聞かれて、驚きながらも頷いてしまった。流せば良いのに、馬鹿正直に答える自分に笑ってしまう。

「誰にも言わないから聞かせてほしいな」

真剣な目に押され、伝わるように簡潔に言えるように考えを回転させる。

あの日から思っている。僕には何もない。頭がいいわけでも、社交性があるわけでも、ましてや数多くの友達などいない。そのうえ、唯一頑張っていた、自信を持てた陸上さえできない。陸上を好きなものとして部活に入った。頑張ってるレーの選手になったこと、フォームだけでなく、スピードまで気にしなければいけないこと。いっぱいいっぱいになりながらも楽しんでた。膝については僕自身の不注意だし、人に話したところでどうかなる話じゃない。もう走れないと感じた時には、人が陸上をしているのを見て羨ましく妬ましい気持ちだった。つい先日まで仲間だったはずなのに応援したいというプラスの気持ちを抱くことができなくなっていた。だから、僕は陸上をやめた。同じ部活動生が、同じチ

ームの人が、僕のけがの話だけでなく、僕自身の性格や外見、行動のことまでも話していることに気づきなくなかった。ぼつぼつと話していく。口に出すことで、僕自身のこと、もやもやしていた部分が晴れてきた。きっと、僕も、誰にも伝わらない、とどこかで感じていたのだろう。話し終えた僕をおばあちゃんはどう思っただろう。話し終えた僕はぬくもりを感じた。抱きしめられていた。決して居心地はいいとは言えない姿勢だけど、もう少しこのままでもいいと感じた。

「話してくれてありがとうね。私は晴斗の気持ちを想像するしかない。けれど、何時でも聞くことはできる。遊びにだって来てもらっても構わないし、電話でもいい。だから、一人で抱えないでほしいなって、思うの。晴斗がよければいい。今回のこと晴斗のお母さんに話してみない？ 時間はかけていいし、直接じゃなくてもいい。心配していたから、少しだけでも話してみない？」

これまでは話したくなかった。いや、今でもあまり気は進まない。でも、おばあちゃんと話していて、お母さんにも話していいかもと心の中の一割は思えるようになった気がする。「広々とした空だね。野菜が元気に育つこの夏が、ばあちゃん、一番好きなんだよね」

空を見上げたら不思議なことにきつきまでうるさく思っていた蟬の声が、僕らも頑張っているんだ、という声に聞こえてくる。それをエールに頑張ってみようかな、そう思えた。

四番目のボタン

鹿児島実業高等学校 二年

前原 夷吹

私は一人、とある病室に備え付けられていた机に向かい、手紙を書いた。私は梅干しのような顔をしたもう古い先短い老人であり、記憶障害を患っていて、過去にあったいろいろな思い出が、深い霧で覆われてしまったかのように思い出せなくなっていた。

それでもまだはっきりと覚えている事がある。あなたと過ごした三年間。私の人生の中で最も幸せで、最も悔やんだ三年間だ。だが、その三年間もいざれ忘れてしまうかもしれない。だから、まだ思い出せるうちに、まだ私の手が動くうちに、手紙を書こうと思う。手紙を読んだらいつでも思い出せるように。あなたを忘れないように。

三十年ほど前のある日、私は椅子に深く腰を掛け、煙草に火を着け、じつと資料を眺めていました。そこには、ある人物の情報が記されていて、私はその資料に間違いはないと確信したとき、深く、長く、渦を巻いているかのようなため息をつきました。

七歳。資料に記されていたあなたの年齢は私の五分の一にも至りませんでした。私は、散った花弁が地に落ちるほどのほんの一瞬の人生に、私の手で幕を閉じることとなったのです。

「ああ、疲れた、そうだ、私はもう疲れたんだ」

私の声は誰にも届くことはなく、渦巻くため息と共に消えていきました。

昼過ぎ、拘置所の長い廊下を歩いてあなたのいる牢へと向かいました。

鉄格子の奥は薄暗く、一つだけの小さな窓にぶつかる雨の音が牢の中がかすかに響いていました。初めて見たあなたは牢の隅で腰を落とし、遠い目をして窓を眺めていました。

あなたは、肩まで伸びた黒い髪に、透き通った茶色の目をしていて、少しサイズの大きい赤橙色の囚人服を着ていました。三日ほど前に、裁判所から判決が下された後すぐにこの死刑囚専用拘置所に来たらしく、この場所に来た時点で三年以内に必ず死刑が執行されてしまうのです。当時は少年法や再審制度はありませんでした。

そしてあなたが死刑執行されるまで、見張りや身の回りの世話などをするようになったのが私でした。その時の私は、この仕事が嫌で嫌でたまりませんでした。

私はあなたに簡単な自己紹介をしました。そしてあなたにも名をたずねてみました。するとあなたは、こちらに少し視線を向けて小鳥のようなやわらかい声で自分の名を答えたの

です。耳をすませば今でもあなたの声がどこか遠くから聞こえてくる気がします。今度はあなたが私に質問をしてきました。

「お母さんはどこ？ お母さんの風邪はよくなったの？ お母さんに会いたい」

返答に困りました。今朝見た資料には、あなたの母親はすでに亡くなっていると書かれていたからです、しかもあなたの手によって。

死因は毒殺。事件当時、家には母親と娘のあなたの二人しかおらず、扉や窓には全て内側から鍵がかかっており、外部からの侵入の痕跡もありませんでした。

事件前、一カ月の人の出入りも母子と配達業者以外ありませんでした。つまり母親に毒を盛ることができるのはあなただけということになります。

だがあなたが自分で毒物を入手したとは考えにくく、誰かが毒物をあなたに渡したことになりますが、警察はそこまで調べませんでした。面倒だったのでしょう。

悩んだ末に私は分からないと言答えました。

「お母さんは、風邪をひいているのか」

私はあなたの話に合わせてお話をしました。

「うん、お母さん、いつも夜遅くまで、お仕事がんばってたから……」

「そうか」

「だからね、元気になるお薬を上げたの。そしたらそのあと

お母さんがたくさん咳き込んでたおれちゃったの」

私はその話を聞き、ひどく悲しい気持ちになったのと同時に多少の怒りも覚えました。元気になるお薬とは恐らく毒物。

母親思いの優しいあなたに、誰が騙して毒物を渡したのか。

「誰が君にお薬を渡したんだ」

「おじさんだよ」

叔父……、あなたの母親には弟がいると資料に書かれていた気がしました。本当の犯人は彼か、と疑いましたがこれ以上話を掘り下げるのはやめました。再審制がなかったので、どれだけ調べてあなたが無実であるという証拠を見つけても意味がなかったからです。生憎、その当時の私には法を改正させる金も力も気力も持ち合わせてはいませんでした。

私はそのまま適当にあなたとの話を切り上げて、自分の部屋に戻り、それまで愛用していた煙草を全て捨てました。

それから二年と十カ月ほどの月日があっという間に流れました。私はあなたに拘留所での三年間を幸せに過ごしてほしいと思ひ、できる限りの事はしたつもりです。こっそりおいしいものを食べさせたり、所長に無理を通して内密に遊園地や動物園に連れて行ったり。

ですが、その度に所長から、

「あまり囚人とは親しくするな」

と、注意を受けていました。

所長が言っていることは重々理解していましたが。親しくすればするだけ、あなたの死刑執行がつかなくなってしまいうから

です。私も今までは囚人と一定の距離を保つことを心掛けてきたつもりでした。ただ気付けば、今あなたにしてあげられることは何かと考えていました。

あなたは普段、無口で感情を表に出すことは滅多にないで、喜んでくれていたかはあまり分かりませんが、周りからも、口数の少ない父親と娘に見えると言われるくらいには二人の仲は深くなっていたと思います。

九歳になったあなたは、身長も髪も伸びて顔つきも少し大人びていました。あなたが着ている囚人服の四番目のボタンだけが不格好に下を向いているのは、取れてしまったボタンを私が縫い直してあげたから。あなたはその時に珍しく自分の過去の話を話し始めました。

「昔お母さんに教えてもらった事があるの、すべてのボタンには意味があるんだって」

「ほう、一番目は」

あなたは一つずつボタンを指さしながら答えました。

「一番目のボタンの意味は自分への愛、二番目は一番大切な人へ送るボタン、三番目は大切な友人へだって」

「じゃあ、四番目は？」

あなたは少し口角を上げ、

「内緒」

と、答えました。私もそのあと別の仕事が入っていたので追及する事は出来ませんでした。

あなたは自分が死刑囚で、もうすぐ殺されてしまう身であ

るということをすでに理解していました。私はあなたが大人になった姿を脳裏に思い浮かべては、やっぱりこうなんじゃないか、ああなんじゃないかと次々にせていくのが寝る前の恒例行事になっていました。私はあなたの将来がとても楽しみになっていたのです。だがそれと同時に着実にあなたの死は近づいていました。

それと私は少しずつではありましたが、着実にあなたの事件の真相に迫っていました。事件の調査をしていた警察官に話を聞いたり、実際に現場に足を運んだりして。無罪になるわけではありませんでした。少しでもあなたの事を知ってあげたい、その一心でした。

あなたは叔父に毒物を渡され、それをこっそりコップ一杯の水に入れて母親に飲ませると指図されました。あなたは、ただお母さんをただ喜ばせるつもりでやった。ですが、その毒が原因で母親は死にました。母親にかけられていた保険金は全て叔父に渡ったそうです。叔父が住んでいる家を訪ねましたが、すでもぬけの殻でした。

私はあなたに、一週間後に死刑執行が行われることを伝えました。ですが、私の予想とは裏腹にあなたはひどく落ち着いていた様子で、「分かった」とたった一言発したのを今でも覚えています。

死刑執行前日、私はあなたを殺すことにひどく恐怖を覚えていました。所長の所へ行き、執行には立ち会いたくないと言いました。逃げようとしたのです。すると所長は、

「べつに構わない」

と、意外にもあっさり認めてくれました。

「ただし、お前が立ち会おうが立ち会うまいが、あの子が死ぬのには変わりはないぞ」

と、所長が強い口調で言いました。

その言葉を聞き、我に返りました。自分はただ現実から逃げていただけだと気づき、声を絞り出して、

「すみません、やはり私を少女の死刑執行に立ち合わせてください、せめて私の手で……。それに最後をしっかりと見届けてあげたい」

「承知した……。だからあれほど囚人とは親しくするなと言ったのだ」

と、所長はため息をつきながら言いました。

あなたにとつて最後の夜がやってきました。あなたは最後に一緒に夜を明かしたいと言ったので、鉄格子を挟んで私は廊下で、あなたは牢の中でお互いにぎりぎりまで敷布団を近づけました。ここ一週間は逃げられては困ると周りの人々から言われ、外へあなたを連れ出すことは出来ませんでした。

私にとつて、今までで一番充実し、思い出に浸った夜でした……。この三年間の出来事を初めから二人で語り合っていました。アルバムを一ページずつゆっくりとめくるように。

ふとあなたが私の目を見て、自分の事をずっと忘れないでいてほしいと言いました。私は、

「忘れるわけないだろう」

と、あなたに語気を強めましたが、あなたはそれでも心配だったのでしょう、相変わらず下を向いていた四番目のボタンを千切つて私に渡し、これをずっと持っておいてほしいと、それでまたいつか縫い直しに来てほしいと、あなたは私に言いました。私はボタンを強く握りしめ、あふれでてきそうな熱いものをぐっと堪え、

「いつかまた、必ず縫い直しに行こう」

と、約束しました。幸せがずっと続いてほしいと願いながらも、目からあふれ出しそうになっているのは暗い現実に対する悲しみでした。

死刑執行当日、あなたは朝から、一番好きなハンバーグを食べていました。これがあなたの「最後の晚餐」となりました。一通り食べ終えたあと、あなたは私に最後の言葉を伝えてきたのです。シンプルな言葉でしたが、私がこれまでかけられた言葉の中で一番心に染みしました。

今までありがとう。私はその一言で全てが報われた気がしました。私はいつの間にかあなたを抱きしめて、

「ごめん、ごめん」

と、謝罪の言葉を繰り返していました。私はこの時ほど自分を悔いた日はありません。

あなたは死刑が執行される密室へと向かい、私はその隣の部屋へ入りました。そこには五つのボタンが壁に取り付けられていました。私は五つのボタンの正面に立ち、本能的に四番目のボタンの前に立ちました。残りのボタンの前には、適

当に選ばれた同じ役職の人達四人がそれぞれのボタンの前に立ちました。これからこの五人で一斉にボタンを押し、機械を作動させます。しかし五つのボタンのうち四つは偽物で、あなたを殺すに至るボタンは一つだけです。

昼の十二時ぴったりにあなたの死刑が執行されることになりました。この壁の向こうに、このボタンの向こうにあなたがいるのだ、私は足をかくかくと震わせていました。

十二時五十九分四十五秒、ボタンの前に立っていた一人が時計を見てカウントダウンを始めました。十五、十四、十三、十二……、四、三、二、一。

カチツ。私はボタンを押しました。押したつもりでした。ですが私には押せませんでした。あなたへの思いが、それを阻んだのです。

他の四人は苦しい顔を見せながらもしつかりとボタンを押していました。しかしあなたを殺す機械が作動することはありませんでした。私を含めた五人は一瞬でその意味を理解しました。私の目の前のボタンがあなたを殺すと。

四人は私から目をそらしました。私は歯を食いしばって泣きました。ですが泣きながら、震えが止まらない右手を左手でつかみ、指先をボタンに近づけました。強くつかんだ左手の爪が右腕に食い込み血が出ていました。あなたの顔が走馬灯のように頭の中で駆け巡っていました。

カチツ——。ボタンの向こうから機械の作動音が聞こえました。私は壁に両手を押し付け泣き叫びました。

その後私は仕事を辞めました。

良く晴れた日に公園のベンチで、楽しそうに遊ぶ子どもたちを眺めていました。すると一人の少年が、私の右の手のひらを指さして「そのボタン、何？」と声を掛けてきたので、「これは大切な人からもらったボタンだよ」

と、返しました。すると少年は、

「ママがボタンには意味があるんだって言ってたよ」

私はその言葉を聞き、とっさに四番目のボタンの意味をたずねました。少年は少し驚きながらも、

「大切な家族へ……、だよ」

私はそれを聞いて、涙が止まりませんでした。あなたは私を大事な家族だと思ってくれていた。それなのに、私は、私は……。

私はあなたの思いに報いるため、二度とあなたと同じような境遇に陥る子が生まれないようにと、動き出しました。

資金を集め、同志を集め、法改正のための票を集めました。そして、長い時間をかけて少年法と再審制を行うことができました。

それともう一つ、あなたが死んでから今までずっと続けてきたことがあります。それは手芸の練習です。今度は上手にボタンを着けてあげられるように。

私はあなたに最後にありがとうと言われたとき、謝罪ではなくこの言葉を掛けるべきだったと後悔しています。

「私は幸せだった、ありがとう」と。

りんご、それからミルクティー

鹿児島実業高等学校 三年

松元 莉乃

高校生活が終わった。三月いっぱいには高校生だとかいうのは一旦なしにしよう。俺の高校の卒業式は金曜には済んでいて、晴れて数週間合法無職である。深空（みそら）は公立高校だったから、少し遅れての卒業式を今日終えた。諸々の別れをおぎなりに済ませたらしい彼は、昼過ぎに連絡をよこした。

「制服デートでもしないか？」

馬鹿じゃなかろうか。そのときちょうど飲みきった炭酸飲料の缶を、それはもう漫画のように握りつぶしたものだ。アルミ缶は思っている以上に柔らかい。深空特有の表現に逐一反応していたら身が持たない。とにかく、デートなんてものではない。そもそも彼とはデートをするような仲でもない。気持ち悪い。要するに、制服を着て散歩し、感傷に浸ろうというわけである。卒業式が終わったその日に一旦クリーニングに出すとか言って帰りつくや否や俺から身ぐるみ剥がしたくせに、ブレザーは元のまま確かに玄関の壁にかかっていたので、ずぼらな母には図らずも感謝することになった。

まずは母校へと言うから、待ち合わせた中学の校門前に向かった。既にそこに立っていた深空の、学ランの金色に輝くボタンは上から二番目が欠けていたが、あえて触れはしなかった。もう転勤なんかで数少なくなった教科担任なんか適当に「早いねえ」だの「これからも頑張ってるね」だの話して、特に面白味もない再会を果たした。

そのあとの行き先は特にないそうで、どこへ行くともなかったの校区をぶらぶらと。なにぶん田舎なもので、深空の言ったようなデートスポットが付近にあるなんて都合の良いことはない。畑のど真ん中にある古墳公園に行って、古墳を一周してみたり、なにか歴史的に重要な塚の数を数えてみたり、時間と心に余裕の有り余った小学生のようなことをしていた。

古墳公園にある東屋の、四角形に並んだ三人がけベンチに深空が真ん中で外側を向いて座るから、ベンチには左右にひとり分ずつの余裕がある。隣に座るとなんとなくバランスが悪い感じがして、反対側に深空と同じように、背中合わせの形で座った。

「謝恩会とか行かなかったのか」

卒業式後に設定されているはずの食事会に行っていたら、深空がこの時間にここにいることはない。別日だったのか、行かなかったのか。ふとそんなことが気になってしまった。

「親、来ないからね」

顔は見えないが、少なくとも負の感情はこもっていないかつ

た。けれど、俺のところは生徒だけでも参加できたから、親が来ないというのは、会に出ない理由にはならない気がした。深空のところは親同伴じゃなきゃ参加できない可能性も捨てられないが、深空の中で、卒業というものは重くない、そう感じた。

「高校どうだった、三年間」

謝恩会に参加しなかった理由が親関係だけだったら、仮にも別れの間ではあるからもつと悲しそうにするはずだ。それなら、高校生活に不満があったろうか。確かに、第一志望の進学先ではなかったと記憶しているが。

「わお。大和、私を疑っているのかい」

こちらを振り返ったのか、深空の声が通りやすくなった。頭の良いやつは嫌いだというわけでもないが、心をすくい上げるような言動には鳥肌が立ってしまう。俺もベンチをまたいで深空と向き合った。彼は目を細めて眉と口角とを片方だけ上げた。今まで高校生活について聞くと、深空は「まあまあ」とか、「特に」と、ことばを濁していた。聞かれるのが嫌なのかと思っただけあまり触れてはこなかったが、深空の様子からすぐにその思惑には勘づかれたらしい。なにを続ければ良いかわからなくなってしまうと、妙な沈黙が風と一緒に流れってきた。けれど本当は、深空は気を悪くはしていなかったよ。うだ。

「別に楽しくなかったわけではないけれどね」

苦笑をたたえながら深空が言う。

「君よりも優先すべきかと言われたらそうでもなかったかな」
気障っぽく言っても仕方がないぞ、高校生活の尊き友人らを蔑ろにするなかれ、だ。俺の精一杯の不満な顔を見てふつと笑った深空は、それからなにも言わずにまたくるりと背を向け、自分ひとりで公園をあとにした。障害物のない、土と草が混ざってどろどろした田んぼ、車の通る気配のない農道。贅沢に、ランウェイのように歩いている彼を呆然と見ていると、しばらく行ったところで深空は振り返り言った。

「ほら、行かないのかい」

目の前でぱちんとなにかが弾けたような気がしてやっと俺はベンチから剥がれた。小走りで彼を追う。深空も走って追いつかれまいとしたが、すぐに疲れ果ててしまったようだ。簡単に追いついてしまったとき、既に彼は手を膝について肩で息をする始末だった。

「無茶すんなよ……」

ずっとこうだったと思い出しながら、深空の背をさすり、すっかり上がってしまった息を落ち着かせる。頭が良くて、歌も上手くて楽器も弾けて、それなのに運動はからつきし。こんなにも典型的なインテリキャラは今どき見当たらないぜ。
水を飲みたいと、深空は言った。来た道を辿ったもう少し先に大きな道があって、沿線にコンビニエンスストアがあるからそこまで歩こうと提案する。深空は肯定も否定もせず体を起こして歩き出した。ふたりきりのときに、なにを話していたか、少し考える。深空はどちらかといえば寡黙だし、俺

もそんなにぎやかな方ではないから、ふたりで過ごすときは互いに黙ったまま。別に嫌ではないのだが。

「お金、今日は持っていないよ」

そんなことを考えていると深空の方から話が始まって、驚いてしまった。それからそのことばをなんとか理解して、大きなため息をついてみせる。

「一本なら奢ってやる、返さなくていいからな」

ズボンのポケットに入っている薄い財布の存在を確認して言うと、深空はすまないね、とそんなこと思っていないように返すんだ。

水が飲みたいと言って来たくせに、凶々しくミルクティーを選ぶ深空は存外したたかだ。数十円の差額はこの際見逃してやろう。自分の分の炭酸飲料を捕まえてレジへ。

「あら、卒業式帰りね」

レジのおばさんに話しかけられると、なにを返せばいいかわからなくて愛想笑いをする。ただし、深空にはそれが適用されない。

「そうなんですよ、もう社会からは逃れられませんね」

理解しているなら、財布くらい持ち歩いて欲しいものだ。

「しっかりとした子ねえ。はい、三百と十六円ね」

財布には五百円玉が一枚しか入っていなかった。田舎の柄に合わないセルフ精算機はお金の投入口に「新札・新硬貨OK!」とポップなシールが貼ってあって、おかげで必要以上に申し訳なく思うことは避けられた。ざらざらとやかましく

たくさんの小銭が精算機から吐き出される。レシートは取らない。不要レシート入れの紙が、ああ、溢れた。見て見ぬふりをしながら礼をして、さあ行こうかというところで、レジのおばさんはまだ深空に話しかける。

「第二ボタンの子とじゃなくてよかったの」

その顔は、この上なくニヤニヤしていて、だから俺はこういうおばさんに嫌悪感がいくらかあって。俺すら入り込めないような深空のプライベートにずけずけと土足で侵入されているような気がするからだろうか。別に俺が第二ボタンの子でも悪くないだろ。……いや、悪いに決まっている。気持ち悪い。そんな漫才を脳内で繰り広げながら、当の本人はどうだろうと彼を見る。いつでも涼しい顔をしている深空は、こんな下世話な話でもやっぱり涼しそうにしていた。

「今日は友人と過ごしたいそうで、残念ながら振られちゃいましたね」

眉を少し下げて言う彼の本心はなにもわからない。なにを言っても、本当はそうは思っていない、みたいな顔をする。

おばさんは興味が失せたらしく、話を無理に切り上げた。

「あらそう。それじゃあ、ありがとうね」

購入済のペットボトルを掴んでコンビニを後にする。

「なんだかなあ」

自分で思っている以上に不満だったようで、おばさんの耳に入らないところまで来たところでひとりでこぼれた。「どうしたんだい、そんなに大きな声出して」

「……俺から聞いていいか」

察しの悪いふりをしている深空の質問は無視して、新たに質問を被せる。

「もちろん」

「誰と付き合ってたんだよ」

渾身の神妙そうな表情ができていたと思うのだが、深空はそんな俺なんか気にせず、一瞬動きが止まったかと思えば肩がくつくつと笑い出す。

「なるほど、キューピッドは誰に矢を射ったのかわからないというわけだ」

深空の例えはいつも難しい。その例えから読み解くならば、俺が深空とその相手のキューピッド、つまり仲介役になった……。

「なんのひねりもない、たやすい問題。むしろ問題にすらならないくらいだと思っただけだ」

「……アリアか」

こくりと頷く彼を見て、俺はなんだか全身から空気が抜け出ていったような、そんな気がした。アリアは同じく小学からの同級生で、昔から共に笑い合った仲だろ。お前らだけ幸せになるなよ。とはいえ、長年付き合うか付き合わないかはざまを漂っていたふたりだから、今更気づいたとて、さほど目新しいものでもない。けれど、それでも、そのはざまを漂っていた理由は深空の頑固で硬派な性格のせいだから、聞きたいことはたくさんある。心変わりの理由とか、告白はど

ちらからとか、そりゃあ俺だってまだ男子高校生だ。合法無職だとかなんだとかも一旦なしだ。嫌いなタイプのおばさんのように畳み掛けたいところ、そうはなりたくないと思う。どうやって切り出そうかと悩んでいると、深空自ら口を開いた。

「春から、お付き合いさせてもらっていた」

ペットボトルのキャップを開けて、ひとくちミルクティーを飲んでから、彼は歩き出す。

「そして今日、お別れした」

深空にならって口に含んでいた炭酸飲料を吹き出すのは耐えたが、かわりにものすごい勢いでむせてしまった。そんな俺を氣遣う様子はなく、欠けているボタンホールをなぞって彼は言う。

「絵に描いたような良い反応をしてくれるね」

爽やかな権化のような雰囲気は今ほっと清々しくして彼は言うのだ。

「これはね、アリアの戦略的撤退なんだよ」

芝居がかった手の動きを追ってみたが、深空の言っていることはいまいちわからない。

「はあ」

適当に間の抜けた返事をして、続きを促す。

「私は春からここらを離れるだろう」

「まあ、聞いてないが」

相槌をできる限り穏便に打ったつもりだったが、深空の気

には留まったらしい。

「あら、言ってなかったかな」

横断歩道は押しボタン式で、深空が小走りで赤いへそのような突起を押し込みに向かった。

「進学は首都圏にね」

「へえ、おめでとさん」

報連相が得意でない節は今までも度々あったが、それにして度も過ぎやしないか。別れの際くらい、こちらにもさまざまな準備はあるのだから早めに知っておきたかったし、言っていたかどうかくらいは覚えておいてほしいものだ。

「アリア、かわいらしいんだよ。関東といえば、こちらよりもはるかに都会じゃないか」

ほどなく信号が青になって、深空は横断歩道の白い部分だけを踏む。足が長いからわざわざ踏んでいるようには見えな

い。
「もっとかわいい女の子がいたら、心置きなく、なんて言って。アリアがいちばんなのになあ……」

どの面を下げて。俺は弱くて、口に出せなかった。恋愛が絡むと人はだめになると言うけれど、惚けた深空なんか、本当は見たくなかった。

「ああ、悲しい」

先に渡り終えて、こちらを振り返らない彼がどんな顔をしているかは知り得ない。ただ、そのことば以外で彼の気持ちは表現できなかったのだろう。俺はしかし、どうも同情でき

ずにいた。そんなだから、かけるべきいい文句が思い浮かばなくて、黙って横断歩道を渡り終えた。

「私ら、いつから連みはじめたんだろうね」

出し抜けに深空は言う。彼の独特な言い回しは今に始まったことではない。だから「連む」ということばに反応はしなかった。ずっと黙ったまま、しばらく歩いていた。また口を開いたのは彼の方だった。

「小学時代から学び舎を同じく……だけじゃあ説得力がない。そう思わないかい。大和、くん」

今度深空は、新たに建てられた歩道橋を上り始める。本当にやることなく、話だけでも手持ち無沙汰で、広い幹線道路のあちとこつちを行ったり来たりするほかないように。

「嫌に他人行儀だな、音無さんよ」

腹の底に溜まる冷たいなにかを、間違って吐き出すことのないように優しく言う。

「まずは」

上り切って顔を上げる。深空は欄干に乗り出して、トラックばかりが通る道路を見ていた。

「宇宙人が侵略してきたんだ」

俺のとんちきな話に深空がぱっとこちらを向いた。彼は、俺が十年かけてやっとはじめて見る、仰天した表情をしていた。

「それで、地球の命運を任せられた、ミソラとヤマトだ」

適当すぎる作り話で、そんな顔を見ることができて、なかなか良い気分だった。深空は珍しく声をあげて笑った。

「なんだい、それ」

夕日が沈む反対側の、白い空が好きだ。深空とは反対側の欄干に背を預ける。

深空は覚えていないのかもしれない。結局今までよくは聞けていないが、彼は夢の中で俺に出会ったらしい。よくも確信もなく、怖がらず話しかけたものだ。幼いゆえの無鉄砲さかとも思ったが、今でもそんな一面が変わらなくて、今日も驚いてしまった。俺は、比べれば変わったところばかりで、そうやってどうしようもない大人になってしまっただけだ。

俺はもう、目の前の少し悲しげに笑っている男に対して、本当にいろいろな気持ちを抱いてしまっただめだった。幼いころから付き合って、積もり積もった怒りがあつた。やっと上手を取った優越感があつた。出会いのときを忘れていて欲しい期待と、覚えているかもしれないという不安があつた。覚えていないなら、その方が都合だから、俺からは言わない。知らなくたって、覚えていなくたっていいこともあるからだ。そのころの俺なんか、今よりもはるかに人として最悪な性格をしていたから、そのことも都合良く忘れていてくれたら良い。

「じゃあそうだな。私は、中身がくだいのは、私を見ているように気に入らないんだ」
深空は言う。

「だからこの際、彼らは……一旦、地球を守り切ったとして考えることにしよう」

そもそもふたりはどういう関係だったのか、使命を成し遂げてこれからどうするのか、これからふたりはどういう関係でやっていくのか、深空は訊ねてきた。

「知らない。そんなの、わからないって」

だって、適当に言ってしまったんだから。

「でも私たちなら、手に取るようにわかる」

深空は空に手を伸ばす。手首を軽く捻る動作は、俺には果物をもぎ取ったように見えた。それはきっと、俺らの関係なんだろう。どんな味がするのか、彼は知っているのだ。なんか、りんごとか、美味いやつだったらしいな。まずくなければ、いいな。どうしてか悲しくなってしまうって、視界から彼の姿が消えて、かわりに歩道橋の茶色の床版で埋めつくされた。

「……俺には、さっぱりだよ」

「あら、それじゃあ私のひとりよがりってわけだね。今日は裏切られる日なのかな」

俺だけが、こんな煮え切らない思いをしていたのかとついに証明されてしまって、ちゃんと理解していたはずなのに腹が立って仕方がない。深呼吸をしたら、鼻を冷たい空気が通って突くような痛みが走った。お互いに、少し黙った。

「ねえ」

深空がこちらを振り返ったようだから、顔をあげてみる。

「あ、え、待っておくれよ。なんで泣いて……」

慌てた様子で彼がそんなことを言うから、泣いていないと返そうとした。が、わざわざ彼が嘘を言うことも考えられないので、試しに目尻のあたりに指を置けば、冷え切ってしまった指は熱い液体で濡れる。驚きと共に、そんなに軟弱だったかと笑ってしまった。アニメなら、涙を流していることに気づいた瞬間、もっと溢れてしまうのがお約束だけど、そんな都合の良いことはやっぱりなくて、少し擦ったらもう湿り気はなくなってしまう。なぜか、生きていることを実感できる。

「お前ってさあ」

深空はこういうときにどんな行動を取ればいいのかわからないように、俺がそうしている間ただ心配そうにあたふたと声をかけ続けていた。申し訳ないがそのことばを俺はひとつも覚えていない。

「情緒に欠けるよな」

もう泣いていないというのに、差し出してきたしつかりアイロンまでかけられている紺色のハンカチは使った形跡がなく、こいつ卒業式でも泣かなかったな……と簡単に予想させる。まあ、こいつのことだから当然か。

「へ？」

「青春を謳歌した尊き級友よりも大事にしてる友達がさ、泣いてるんだぜ」

もう泣いていない。その代わりに、どうしようもなく面白く

なってきた、からかってみる。今日は深空の新しい表情開拓記念日だ。

「俺じゃなくて、アリアだったらどうすんだよ」

「なに、どういうこと」

「そんな慌ててないでさ、なにも言わずに優しく抱いてやるとかできないのかよ」

深空は面食らいつばなしだ。いつも大人っぽい雰囲気が出されているのに、紳士的な行動はできないらしい。なんて面白いだろう。

「今？ 今するのかな」

とか言って深空が長い腕を広げて迫ってくるもんだから、もう俺は笑いが止まらなくて困っている。

「俺もう泣いてないって、気持ち悪いな」

行く手を遮る腕を払って俺は駆け出した。階段の前まで走って、未だ目をまんまるくしている彼を振り返る。

「帰ろうぜ」

途端に知らない表情はどこかへ消えてしまって、深空は元の通り穏やかに笑った。

「そうだね」

車を呼ぶか訊ねられたが、深空が大丈夫ならと断った。俺の家はまだ近いが、彼のはそれなりの距離がある。だから、深空が良いなら、と思ったのだが彼はそのときは迎えを呼ばなかった。

「ああ、もう、腹立つ」

幹線道路から一本外れると、もう車通りはがらがらだ。数時間前に立ち寄った中学校からは生徒が大勢出てきていて、とことん時間を無駄にしたことを自覚させられる。

「なんのことかな」

「たぐさんあるぜ。親友だと思ってたやつが、いつのまにかリア充になってて、そんでいつのまにか非リアになってたこと。ちよつとくらい俺が知ってても良かったろ。あとその薄ら笑いとか、あとは……」

「そんなつもりじゃないんだけどな」

苦笑いしながら彼はペットボトルのキャップをひねる。紅茶の香りはまだ鮮明だ。

「ところで私も困ったことがあるのだけど」

「なんだよ」

ミルクティーをまたひとくち飲んで、丁寧にキャップをつけてから、彼は指を折ってなにかを数えている。

「君のことがまったたくわからなくなっちゃった。付き合い十数年目にしてふりだしに戻った気分だよ」

これには少しびっくりしてしまった。俺のなにが深空にそう思わせたか心当たりがなくて、きつと彼もこんな感覚だったのだろうか、深空とは逆に、少しだけ理解ができた気がする。

深空は俺の家の前まで一緒に来てくれた。迎えを呼んで、来るまでは一緒に待つと、団地の階段のいちばん下にふたりで座った。人が来ることはほとんどないと思っていたが、そ

ういえば中学生の帰宅時間で、何回か立ち上がって道を開けることになった。場所を変えると言う頭は、残念ながらそのときは働かなかった。

「出発日は？」

「……四月の、二日の予定だけど、なにかあるのかな」

一回ゆっくりと瞬きをしてから、彼は答える。

「見送り行くわ。あと、それまでに飯行こうぜ」

ちようど、くすんだピンク色の軽自動車かふたりの前に止まった。車に乗り込む前に、深空ははにかんだ。

「また後で連絡するよ。どこに食べに行くか考えておくれ」

別れは、重くない。車は薄情にもきつきと行ってしまったが、そりやそうだが俺は悲しくはなかった。飯に行ったあと、見送ったあと、また会えるんだろうと、根拠のない樂觀的思考に飲み込まれた。

制服に染み付いてしまったのか、ミルクティーの甘い香りがする。

鷹とねずみ

鹿児島情報高等学校 二年

竹波 芽生

町外れの一番山に近い村。自然豊かで静かなこの集落。のはずだが、朝からおばさんの叫び声が響き渡った。

「ギャアアア！ ねずみいい！」

冷蔵庫から盗み出したらしいチーズを抱えて部屋の床を駆け回るねずみ。スリッパを片手に叩き倒そうと追いかけるおばさん。

「お前もう来るなって言っただろうがぁ！」

狙いを定めてスリッパを振り下ろす。パアンと音がしてねずみはひよいと避けてしまった。

「おっと危ない！」

ねずみは開いてる窓を見つけてピョンと外へ飛び出した。

「アイツう……」

後ろからおばさんの悔しそうな声が聞こえてくる。

「へへーん、どんなもんだい！ アタイの逃げ足あ、世界一つてもんだ」

今日もおばさんとの鬼ごっこに勝利したねずみは、満足げに茂みまで走っていった。人目につかない場所まで来ると、

伸びきった草の陰に隠れて一服ついていた。

「さあ、お楽しみ時間だ。アタイの愛しのチーズちゃん、早く食べたくて仕方なかったよう」

甘い匂いを深く吸い込み、チーズにかぶりつこうとしたその時、後ろから草を踏む音がした。びっくりして振り返ると、薄汚い野良猫が一匹。

「へへへ、うまそうなネズミだぜ」

野良猫は舌舐めずりをしながらゆっくり近づいてくる。ねずみは慌てて逃げ出したが、長い尻尾を掴まれてしまった。

「もう逃げられないぞ。お前は今からおれの腹の中さ。いただきます……」

「待って……あれ、なんだ？」

猫が、ねずみが指差す方を振り返る。青い空から黒い何かがちらに向かつて来ている。それが何か先にかかった猫は、ねずみのことを忘れて勢いよく走っていった。その黒い何かが見界を覆うほど大きくなってから、それが何かねずみも理解した。急いで逃げようとしたが時すでに遅しである。その大きな黒い何かは鷹であった。その光る爪でねずみを捕まえ、空を飛んでいった。

山の中の高い木の上にある古ぼけた巣に、ねずみは投げ出された。

「う、いてて……なに」

ついた尻をさすりながら顔を上げると、大きく翼を広げた、自分をここまで連れてきた鷹がいた。あ、食べられる。そう

思つて生を諦めた。ぎゅっと目を瞑つて、食べられるのを待った。

「……あれ？」

近づいて来ていたはずの鷹は、ねずみを通り越して、巢の奥へ行きそのまま伏せてしまった。ねずみは開いた口をどうにか閉じ、鷹の様子をうかがった。鷹は目を瞑り、静かな息の音を立てている。

「……食べ、ないのか？」

ねずみの一言に鷹は目を開けた。鷹と目が合ったねずみは動けなくなつてしまった。

「食うつもりはない。俺もかなりの歳だ。ちょこまか動いてるやつらをとつて食べるほど元気でもないのさ」

ガラガラとした低い声で呟くと、また目を瞑つた。ねずみは不思議に思い、そのまま鷹を見つめていた。

「どうした。これは俺の気まぐれだ。逃げるなら、今のうちだぞ」

鷹にそう言われ我に返つたねずみは、鷹の巢から這つて出ていった。

鷹は小さな物音で目が覚めた。顔を上げると、昨日逃げたはずのねずみが、「うんしょ、うんしょ」と巢に登つて来ていた。ねずみは芋虫をくわえていた。

「なんのつもりだ？」

「だ、だつてあんた、アタイらみたいなの食えないんだろ？だから、ほら」

ねずみは啜えてきた芋虫を鷹の目の前へ投げた。

「助けてもらったからな。礼の一つくらい、な？」

ねずみの顔はこわばつていた。鷹はふっと小さく笑い、

「おかしなやつだ」

と呟いた。そして鷹は、ねずみから差し出された芋虫を食べた。ねずみはしばらく鷹の巢に留まつて、少し離れたところから鷹を見ていた。

それから毎日、毎日、ねずみは鷹の巢に虫を持ち込んで来た。お互いに言葉を交わすようになり、少しずつ距離も近くなつていった。

「今日は天気が良い。外へ出るが付いてくるか？」

「アタイが？　わりわり。逃げ足は世界一だが、流星にアンタほど速くは動けないよ」

「ならば乗ればいい。俺の背中に」

ねずみはぼかんと口を開けた。

「アタイが？　アンタの背中に？　やめてくれ、怖いよ。振り落とされたりしないだろうね」

「確かに俺は年老いた。だがな、俺はこの道四十年。飛行技術はベテランよ。さあどうする。行くか？」

「行く」

ねずみの威勢のいい返事を聞いた鷹は満足そうにして少しだけ翼を広げ、ねずみが乗りやすいように屈んだ。その背中にねずみはピョンと飛び乗り、丈夫そうな羽を二枚見つけて両手で掴んだ。

「羽が抜けたらどうしてくれる」

「アタイが掴んだくらいで抜けやしないだろう」

鷹は低い声で大きく笑った。その笑いにつられ、ねずみもクスツと笑った。

「それじゃあ行くぞ。準備はいいか？」

「もちろん、いつでも……」

広げられた鷹の翼の影に覆われた。ねずみはその大きな翼に心を奪われた。鷹は空気を切り裂くような甲高い声を一つ上げ、高い高い木にある巣から勢いよく飛び降りた。そのまま地面に向かって加速する一方だ。

「何がベテランだ、嘘つきいい！」

ねずみは鷹の背中で落ちる落ちると悲鳴を上げて、目に涙を浮かべていた。鷹はふっと笑った。ねずみはぎゅっと目を瞑った。一瞬、重力が重くのしかかる感覚がして、目を開けるとさっきまでねずみと鷹がいた森がずっと下に見えた。カラスの群れを見送り、雲をかすめて行った。初めて目にした空の景色。ねずみの開いた口はなかなか閉じられなかった。そして何かを思い出したように頭を振った。

「アンタこの、バカ！ 死ぬかと思っただじやないか！」

ねずみはその小さな手で、鷹の背中をポカポカと叩いた。

「いやあ、すまないな。お前さんが面白かったもんで」

そう言って笑う鷹に、ねずみは頬を膨らませた。

「まったくひどい奴だ！」

しばらくして、鷹の飛行が落ち着いてきた。

「なあなあ、雲に近づいてほしいんだ」

そう言ってねずみは近くに見えた厚い雲を指差した。

「構わんが」

鷹は体を傾け、ねずみが指差した雲に近づいていった。ねずみはワクワクし、手を伸ばした。

「落ちるんじゃないぞ」

ねずみの小さな手のひらに、さらさらとした感覚がした。

「うわあ……雲って掴めないんだな」

「なんだって？ 雲が掴めんだと。何を阿呆なことを言ってるんだ」

「あのねえ、こちら生まれ初めて初めて空飛んでんだ。アンタとは違うんだよ」

「はいよ」

ねずみは一度引つ込めた手をもう一度伸ばし、また雲に触れた。

「アタイさ、雲ってずっと綿菓子みたいなものだと思ってたからさ」

「綿菓子？ 一体なんだそりゃ」

「アンタ綿菓子も知らないのかい？」

勝ち誇ったようにねずみが鷹に言った。

「はあ……すまなかったよ」

ねずみはへへへと笑った。

「今度街に出たとき持って帰って来てやるよ」

鷹は楽しみにしているぞと言い、翼を大きく動かした。さ

らさらと雲の中を飛び、日の光に当てられた。青い空が広がり、とても静かな時間が流れていった。

「こんなに青い空は初めて見たよ……」

「お前は幸運だな。他に空の景色を知るねずみはどこにもいないぞ」

鷹にそう言われ、口元が緩むねずみだった。

「下に行くぞ。ちゃんと掴まってる」

鷹は翼をたたみ、下に向かって加速していった。雲を抜けると雨が降っていた。

「あれ、さつき降ってなかったのに」

「さつきは雲の上にいたからな。雲の上は雨は降らない」

「そうなのか……」

下に深い森が見えた。

「ずいぶん遠くまで来たな。下の森で休もうか」

そう言って森の暗い場所に降り立った。

「雨、強くなってきたな。アンタとアタイで休めそうな所を探そうぜ」

ねずみは鷹の背中から降りて歩き出した。その後ろに鷹がついていった。ねずみと鷹が歩いていると、近くにいた小動物は皆去っていった。

「おお、良さそうな所発見」

しばらく歩いて、小さな池のそばまでやってきた。池の隅には、雨を凌げそうな大きな葉がいくつも生えていた。

「ちよっと待ってな、アタイが見てくるよ」

ねずみは鷹を置いて一人で様子を見にいった。

「そのねずみの嬢ちゃん」

葉をかき分けていたねずみに声がかかった。声の主はシワだらけのイボガエルだった。

「どうも。どうしたんだい？　もしかしてお邪魔しちゃったかい？　いま雨宿りできそうな所を探して……」

ねずみは邪魔をしたなら申し訳ないと言ったが、イボガエルは首を横に振った。

「そうでない。お主はなぜあの鷹と一緒にいるのだ」

「なぜって、なんで？」

「なんでは……普通、お主にとっては恐ろしい存在じゃろうが。食われてしまうぞ」

「アイツがアタイを？　ありえないよ、アイツはアタイのこど食べやしないよ」

「優しい奴だと油断させていつかパクツと食われるかもしれない。肉食獣は信じられん、おっかない奴ばかりじゃ」

ねずみは一瞬黙り込み、考えた。

「確かにアイツは、本当ならおっかないヤツかもしれない。でも、アタイの命の恩人なんだ。信じてたいと思うし、アタイ、アイツのことちよっと好きなんだ」

笑顔でそう言うと、イボガエルは頷いた。

「若者は素晴らしいのう。好きにすればいいさ。嬢ちゃんや申し訳ないが雨宿りはどっか別の場所を見つけてくれんかのう。いくら嬢ちゃんが大丈夫と言えど、わしらにはおっかな

くてもう」

イボガエルは申し訳なきそうに言った。

「わかった。気にすることないよ、おぼあちゃん」

「この先もう少し上の方に行けば、あの鷹も休めるほど大きな洞窟があったはずじゃ」

イボガエルはその場所を指差した。

「ありがとう、おぼあちゃん！」

大きな声でお礼を言うと、ねずみは鷹の所に戻った。

「待たせたね。ここはダメだけど、もうちょっと上の方に洞窟があるってさ！ 行こう」

ねずみは元気よくぴよんぴよんと走り出した。鷹はその後ろをゆっくりとついていった。

あたりはすっかり暗くなっていた。ふとねずみが振り返ると、ずっと後ろの方に鷹がいた。心配して近くまで駆け寄った。

「年寄りには厳しいぞ、その速さについてこいと言うのは」

「悪かったよ」

「先に行け。体を冷やさぬうちに」

「……わかった。先に行って様子を見て来てやるよ」

そう言ってねずみはまた元気よく駆けて行った。

洞窟が見えてきた。

「うん、ここならアイツもゆっくり休めそうだな」

「一体どこのどいつだ？ こんな時間に……」

ふいに洞窟の奥から声が聞こえた。ねずみは少し姿勢を低くした。奥から現れたのは、目に傷のあるキツネだった。

「おやおや、小さなねずみさんじゃあないか。一体どうしたんだい、こんなところで」

ねずみは後退りながら恐る恐る答えた。

「えっと、遠くから来たもので、休める場所はないかと。雨も降ってるし」

ねずみの答えを聞いたキツネはハツとしたように話し出した。

「そうか君か！ 鷹と一緒にいるっていう、おかしなねずみは」

「あの……なんだって？」

キツネはクククと笑い、ずいとねずみに顔を近づけた。

「もうこの森じゅう君たちの噂で持ちきりさ！ 嬉しいよ、有名人に会えるなんて」

「あ、ははは……そりやどうも」

「そういや、君の相方はどこにいるんだい？」

「相方!? 鷹ならまだ着いてない。アイツ、おじいちゃんなんだ」

ねずみはくすりと笑った。

「ここじゃ寒いだろう。ついておいで、奥に案内するよ」

そう言ってキツネは歩き出した。

「でも鷹が……」

「大丈夫。鷹が着いたらまた迎えに行けばいいさ」

ねずみはキツネの後をついていった。洞窟の奥には、他にも数匹のキツネがいた。

「みんな見てくれ。噂のお客様だぞ！」

周りのキツネは一斉に笑い出した。ねずみは驚き、耳を伏せ後ずさった。

「大丈夫だ怖くない。みんな歓迎している」

一緒にいたキツネはそう言った。ねずみは恐る恐る周りにいるキツネに手を振った。

「そう言えばなんだが、君と一緒にいる鷹を知ってるよ」

「そうなのか？」

「ああ。忘れもしない、俺たちを襲った鷹だ」

「……今なんて？」

「そりゃあ信じられないよな。ずっと一緒にいた信頼できる相棒が、とんでもなくおっかない奴だなんてな。ちようどいい、聞かせてあげよう」

キツネはねずみと向き合い腰を下ろした。周りのキツネたちも顔を上げた。

「あれはまだ俺たちが幼かったときのことだ。あの鷹は、俺たちの住処にやって来て、飛びまわり、皆をあの鋭い爪で斬りつけたんだ」

「信じられない、アイツがそんなこと……」

そういったねずみをキツネはジロリと見た。

「見ろこの傷を！ まだ一人で狩りもできない俺に、あの鷹がつけた傷だ」

キツネはねずみに傷を見せつけるように顔を近づけた。痛々しい傷を見たねずみは、なんだか急に虚しくなってしまう。

「俺だけじゃない！ みんな傷ついた。周りの奴らを見てみる。みんな幼い頃につけられた傷だ。傷のせいで親も長くは生きられなかった。だから俺たちはあの鷹を許さない。そうだよなあ！」

そうだそうだと周りのキツネたちから声が上がった。ついにねずみは何も言えなくなり、行き場をなくした手が宙に浮いていた。

「今日この森に来てから、自分たち以外の生き物を見かけたか？ 見かけなかったらう。それはなぜか、あの鷹がいるからさ。みんな怖がって隠れているよ」

ねずみはすっかり黙り込んでしまった。洞窟の外から甲高い鳴き声が聞こえた。

「君も気をつけたほうがいいよ。アイツは、怪物だ」

最後にキツネはねずみの耳元で呟いた。そして、何も言わず、ねずみを洞窟の入り口まで誘導した。ねずみは重い足取りで洞窟を出ていった。鷹が入り口の近くで待っていた。

「ここだったのか。どうする？ 雨は止んだが、休んでいくか？」

ねずみは下を向いたまま何も言わなかった。

「どうした、何かあったか」

「なんで、襲った？」

「何をだ？ 一体どうしたんだ」

何がなんだかわからない鷹は戸惑ってねずみに聞いた。

「キツネたちを襲ったって」

「どこでその話を……」

「子どももいたんだろ？ どうしてそんなひどいことができる!？」

ねずみは声を張り上げて鷹に言い放った。鷹は動揺するばかりで、ねずみとまともに話すことができなかった。

「待って待って、どこのどいつからその話を聞いたのかは知らないが、いくつか誤解があるぞ。俺は……」

「アンタがそんなことするなんて思ってたよ！ 必要最低限、生きるためなら仕方ない。でも……」

重く苦い沈黙が流れた。

「今は、話したくない」

そう言ってねずみは一度も鷹を見ないままその場から走って行ってしまった。

夜になり、真つ暗な森の中をねずみが走っていく。口を開け、息を乱し、目指す場所もなく、ただひたすらに走っていた。鷹が過去にひどいことをしたなんて、信じたくなかった。でも事実であるから受け止めなくてはならない。だがねずみにとってそれはどれだけつらいことか。

ガサガサと葉の揺れる音がした。何か近くで走っているのがわかる。ねずみは立ち止まり、辺りを警戒した。後ろか

ら大きなものが近づいてくる気配がした。振り返ると、さっきのキツネがいた。

「びっくりした。どうしてアンタがここにいるのさ」

「君が心配だったんだよ。ほら、さっきあんな話をしてしまっただろう。あの鷹とも気ままずくなってしまったんじゃないかって」

ねずみは引きつったような笑みで近づいてくるキツネを振り払うように、そっぽを向いた。

「心配とか、余計なお世話！ さっきとどっか行ってくんない？」

「まあまあ、そんな寂しいこと言わないでよ」

ねずみはそのままくるりとキツネに背を向け歩き出した。またキツネの声が聞こえた。

「ところでさ、腹は空かないかい？」

その一言で周りの茂みから、洞窟の中にいた数匹のキツネが現れた。

「えっと、なん、なんだって？」

「今日は雨が降って狩りに行ってないから、みんな腹が減ってるんだ。美味そうな獲物が目の前にいるのに、逃したらもつたないだろう？」

キツネたちはケラケラと笑い、少しずつねずみに近づいて行く。ねずみはキツネたちに囲まれた。

「……アタイか」

「理解がはやくて助かるよ」

そしてキツネはねずみに飛びかかった。ねずみは慣れたようにひよいと避けると、茂みに飛び込んだ。

「いいさ、じっくり楽しむでしょう」

キツネたちの気味の悪い笑い声が森にこだました。ねずみはどこに向かえばいいかもわからぬまま、ひたすらに走って遠くに行こうとした。突然横からキツネが一匹飛び出してきた。ねずみは驚いたがなんとか避けて、そのまま走った。またキツネが飛び出した。左右から交互に無数に現れるキツネたち。

「アンタら一体何匹いるんだ」

茂みを抜け、ねずみが入れるほどの小さな穴が木に開いているのを見つけた。その穴に飛び込もうとした。しかし、目に傷のあるキツネが行き先を阻んだ。ねずみは急停止し、急いで逆方向に逃げようとしたが、キツネに尻尾を掴まれてしまった。バタバタと暴れてみたが離される予感はない。

「アンタ、ひどいやつだね」

「ひどいやつ？ ククク、『必要最低限、生きるためなら仕方ない』だろ？」

鷹との会話を全部聞かれていた。ねずみの体の底から言葉にならない感情が溢れてきた。

「テメエ、この野郎！」

キツネはねずみを口元まで運んでいった。ねずみは目を閉じた。ふと遠くに甲高い鳴き声が聞こえた。キツネたちもすぐに空を見上げた。

「くそッ、どこにいる？」

ねずみはキツネが空を見ている間に自分の尻尾をキツネの手から引っぱり出した。

「おい、逃げたぞ！」

ねずみは空を見渡した。そして星空のわずかな光で浮かび上がった黒い影を見つけると、その場でぴよんぴよん飛び跳ねだした。キツネが、ねずみをもう一度捕まえようとしたとき、鷹が足を目一杯広げねずみに近づいた。一瞬だったが、鷹はねずみをしっかりと掴み、キツネの頭を掠めて飛んだ。キツネが悔しそうに吠えるのが下から聞こえた。

「…：なんで場所わかったんだよ」

「なんとなくだ」

鷹は体を丸め、ねずみを背中に乗せた。

「怪我はないか」

「尻尾の皮がちよつと剥けただけ。へでもないよ」

そうか、と鷹は頷いた。ねずみは何も話すことができなかった。先に鷹が口を開いた。

「あの話だが」

ねずみは少し顔を上げ、風の音に邪魔されぬよう耳を澄ました。

「キツネを襲ったのは本当の話だ。俺の子どもたちがあのキツネらにさらわれた。取り戻そうと共にキツネの所に行った妻は食い殺された。子どもたちもはらわたが散らばっているのを見つめることしかできなかつた」

ねずみは何も言えず、固まってしまった。

「悪かった。こんなことに巻き込んで」

「アタイ、アンタにひどいこと……」

突然、鷹がぐらりと大きく揺れた。ねずみは焦ってバランスをとった。鷹はそのままゆらりゆらりと降下していった。森の出口に近い所で着地し、ねずみは鷹の背中から降りた。

「なあ、どうしたんだよ……」

鷹は少し荒い息遣いをしていた。

「気にするな。年寄りのくせして動きすぎただけさ」

鷹はふっと笑って見せた。鷹の笑った顔を見るといつも安心するはずなのに、今のねずみは安心できなかった。

「帰ろうか……俺たちの巢に」

ねずみは静かに頷いた。だが突然鷹が声を上げてぐらりと地面に倒れた。後ろからキツネが飛びかかったのだ。ねずみは後退り、目を見開いた。鷹は翼を激しく動かし、キツネの牙から抜け出した。

「あのときの借りはきっちり返してもらうぜ、ジジイ」

キツネはまた鷹に飛びかかった。鷹は飛び跳ね、爪でキツネを掴む。彼らの戦いに気を取られている間に、ねずみの後ろから別のキツネが現れた。

「おい！ そのねずみから離れろ！」

鷹は掴んでいたキツネを振り払うと、ねずみのもとへ飛んでいった。ねずみを捕まえたキツネに突っ込み、ねずみを庇うように翼を大きく広げた。

「逃げる。俺が追っ払っている間に」

「無理だ、アンタを置いて行けないよ」

「どうした、逃げ足は世界一なんだろう？ さあ行った。月の反対側に向かって走るんだ」

そう言うと、鷹はすぐにキツネとの戦いに戻った。ねずみは何度も振り返りながら、言われた通り月の反対側へ走った。鷹とキツネの唸り声が響き、バタバタと激しい音がしている。ねずみは立ち止まった。これ以上進むことはできない。振り返って鷹の所へ走った。キツネの鋭い牙と爪で削がれた鷹の羽根が辺りに散らばっていた。羽根には赤いものが付いていた。鷹とキツネたちは戦っているうちに人間の民家が見えるところまで移動していた。

「さつきとくたばりやがれ、老いぼれが！」

「老いぼれとは心外な……かかってこい、若造ども」

数匹のキツネが同時に鷹に飛びかかった。鷹はキツネを一匹一匹、素早く攻撃していった。吹っ飛ばされたキツネたちは起き上がるのに苦労しているようだった。そんな中、目に傷のあるキツネだけが、勢いを失うことなく鷹に食らい付いた。鷹の首に噛みつき、四肢で羽根をもぐように引っ掻く。鷹は苦しそうな声を上げて倒れ込んだ。鷹の爪もキツネの胸元に食い込んでいた。

「鷹と言えど所詮はただの老いぼれだ。お前に勝ち目なんてない」

キツネが低い声で鷹に言った。鷹は抵抗のしようがないよ

うで、動くことができなかつた。

「おい！」

その声を聞いたキツネは、鷹から目を逸らし、声の主を見た。ねずみが少し離れた所に立っていた。

「おい！ そのお前！ よくもアタイを丸め込もうとしたな」

「小さくて何もできないくせに大口叩いてんじゃねえぞ、ねずみ如きが」

「アンタらだっておんなじようなもんだろう。キツネは普通単独で行動するもんだって聞いたぞ。なのにアンタらは数匹で行動している。それはなぜか、アンタら臆病でビビってるだ！ 所詮一匹で行動もできない臆病者なのさ！」

「生きたままはらわた引きずり出してやる！」

怒りに溺れたキツネはねずみめがけて勢いよく走った。ねずみはキツネが追ってくるのを見ると一目散に走りだした。

「どこ行きやがった！」

「ここだよマヌケめ！」

さっきの場所からだいぶ離れた所まで二匹は走って来た。キツネもねずみも息が乱れていた。ふとねずみが姿を消したのでキツネは立ち止まって辺りを見渡した。

「お前こそ臆病じゃないか。何度も隠れながら逃げるなんてよ」

「アタイは逃げるが勝ちなのさ」

キツネの目の前にねずみが現れた。

「そこか、覚悟しやがれ食ってやる！」

キツネが勢いよく走ってくるが、ねずみは動こうとしなかつた。もう食べられてしまいそうな距離になり、ねずみは思わず目を瞑った。次の瞬間、キツネは叫び声を上げて立ち止まった。キツネの後ろ足は、人間が仕掛けた罠にガツチリと掴まれていた。

「テメエ誘導しやがったのか！」

キツネが罠から抜け出そうと暴れると、罠に繋がっていた紐についた鈴がチリンチリンと鳴った。どこからか獵犬の吠える声が聞こえてきた。キツネは真っ青になり、一層激しくもがいた。後から付けてきた他のキツネたちが顔を出した。「お、おい！ お前たち！ 助けてくれ、こいつを外してくれ」

獵犬と人間の足音がだんだん近づいてきている。目に傷のあるキツネは仲間たちに懇願したが、他のキツネたちは目を細めて、ケタケタと笑い去って行ってしまった。

「おい！ 俺を置いて行くのか？ この裏切り者どもめがア！」

ねずみは人間が来る前にその場から立ち去った。急いで鷹のもとへ向かった。

浅い呼吸を繰り返す鷹を見つけ、ねずみは駆け寄った。

「アンタ、ひどい傷だ……どうすればいい、しっかりしろよ」

ねずみの小さな手で鷹の首から流れ出る血を堰き止めようと試みるが、血は止まることはなく溢れ続ける。ねずみはどうにかしようと近くを見渡した。鷹は小さな声でねずみに話

しかけた。

「おい、お前はここから離れろ。じきに日も昇る。人間たちが動き出すぞ」

「嫌だ、アンタと一緒に帰るんだ！ あの森まで。また背中に乗せて飛んでくれよ。な？」

鷹は力を振り絞り片翼を広げ、ねずみに被せた。

「体が冷えているな。寒かったろう」

「そんなことどうでもいいんだよ！ アンタの傷を早くどうにかしないと……」

「最後、助けられたな。いい歳した身で恥ずかしい」

ねずみは首を横に振った。そんなことない、アンタは立派に戦ったと言いたかった。だが言葉が喉に突っかかるばかりで、声に出して言うことができなかった。

「俺の人生ろくなもんじゃないと思っていたが、終わり良ければ全て良しと言うだろう。お前さんのおかげで退屈せずには済んだよ」

そう言っ鷹は目を閉じた。

「そんなこと言うなよ、そんな死ぬ前みたいなこと言わないでくれ」

ねずみは鷹を揺すったが、鷹からの返事は無かった。

「なあ、おい？ 起きろって、朝が来るぞ。人間が出てくるから、早く帰ろうぜ。なあ……」

やっぱり鷹が返事をするとはなかった。

「なあ！ 起きろってば！ アタイまだアンタにごめんもあ

りがどうも言えてないんだ！」

ねずみは声を荒らげ、そう言った。そして短く情けない声を何度も上げた。鷹の翼の下に潜り、日が昇るのを待った。

陽の光に照らされ温かさを感じるのと同時に鷹が冷たくなっていることに気づいた。しばらくして、低く地面に響くような音が聞こえてねずみは目を開けた。鷹の翼から顔を出し、

辺りを見渡した。大きな人間の乗り物が近づいて来ていた。あの車が人間の出したゴミを集めて行くのを見たことがあった。

車が止まり、男が二人降りて来た。そして鷹とねずみに近づいて来た。とうとうねずみは鷹の翼の下から抜け出して

近くの茂みに隠れた。

「うわ、こりゃ派手にやったな。鷹なんて珍しい」

「キツネかなんかと喧嘩でもしたんだろう。きつきと乗せちまおう」

そう言う人間は鷹を持ち上げて袋に入れ、車の後ろに付いている大きな口に放り込んだ。そして再び車に乗り込み、行ってしまった。ねずみは茂みから出て来て、散らばった鷹の羽根を拾い上げた。羽根を抱えて走りだした。鷹と共に過ぎた山に帰るために。

野良猫が声を上げて集まっていた。猫が見ていたのは、巢から落ちてしまったカラスの雛だった。まだ飛ぶことができないように、ぴいぴい鳴くばかりだった。猫がカラスの子に食らいつこうとした時だった。

「どけどけどけーい！ ねずみ様を通るぞ！」

一匹のねずみが猫の頭を踏みつけ、素早い足取りでカラスの雛を掬い上げると一目散に走り去って行った。山の中の安全な木の下まで来ると、ねずみはカラスの雛を地面に降ろした。

「あ、ありがとう……」

「いいってことよ」

「ねずみさんって、すごく速いんだね！ 僕びっくりしちゃったよ」

「そりゃあ、アタイの逃げ足あ、世界一ってもんだ」

満足そうにそう答えたねずみ。

「いいなあ、僕もあなたみたいに速く動けるようになりたいよ」

「なれるさ！ 大きくなればな」

ねずみはカラスの雛の頭を優しく撫でた。カラスの雛は嬉しそうに微笑んだ。

「ところでアンタ、親はどうしたんだい？ どこにも見当たらないじゃないか」

「父さんも母さんも帰ってこないんだ。最近この森に人間がやって来て、ずっと僕たちを探してるんだって。母さんがいなくなっただけからなにも食べていないからお腹ぺこぺこだよ」

悲しげな声で話したカラスの雛をねずみは持ち上げ、頭に乗せた。カラスの雛は楽しそうに「きやつきゃ」と声を上げた。

「ようし、それじゃあアタイが飯を用意してやる。そんで、アンタを立派なカラスにしてやるさ。だから、アタイを背中に乗せて飛んでくれよ。もう一度空の景色が見たいんだ」

「空の景色を見たことがあるの？ いいなあ、僕も早く見に行きたいよ！」

「アタイも楽しみで仕方ないよ」

ねずみは楽しそうに、自分がみた空の景色をカラスの雛に話し始めるのだった。

贈る言葉

立石 富男

好きな故事成語はいくつかあるが、この頃よく使うのは「飲水思源」。これは日本が中国と国交回復した時、日本の首相を出迎えた中国の首相が握手しながら言った言葉である。水を飲む時に井戸を掘った人の苦勞を忘れてはならない、という意味なのでいろんな出来事に当て嵌めることができる。この言葉を今年度の講座生たちに贈りたい。意味を真に理解するなら、学校生活でも社会生活でも役に立つと思う。

さて、今年度の文芸ゼミナールだが、参加者は少なかったものの作品的には例年に比べても遜色のないものが揃った。各人の努力の成果である。特に目についたのは、推敲を大事にするという姿勢だった。書き直してくるたびに良くなった作品が多かったのである。これは嬉しかった。二人の講師が毎年口を酸っぱくして言う言葉だったからだ。このことは必ず身に着けてほしい。今後書いていくなかで自分を大きく伸ばす武器となるはずである。

私たちが教えたのは基礎である。家作りを考えればわかることだが、何事においても基礎はおろそかにできない。だから時には些末なことも口にしたけれど、土台作りには欠かせないと思っただからである。今後さらに小説に真剣に向き合っていく人もいると思う。文は人なり。文章を呻吟して紡ぎながら、自分自身も磨いていくことを期待したい。

オノマトペと読点

出水沢 藍子

七回目の文芸ゼミナールが終わり、みなさんの作品が出揃うと、講師は校正作業に掛かり、二月の作品集発行に向けて腕まくり開始です。ストーリーがなかなか進まず、仕上がりが心配されていた人も、予定期限内に仕上げてゴールイン。安心しました。さすがです。

ゼミの間は、みなさんの新鮮で奇抜な発想に驚いたり、読みのうまさに聴き入ったりしていたため、つい見落としていたことも多く、改めて読み直してみてもオノマトペの多さと、読点の少なさに気が付きました。

※誰もが使う紋切り型のオノマトペを使うと、文章が子供っぽくなります。「雨がざあざあ降っている」「ドアをパタンと閉める」と書かずに、「雨が降っていた」「ドアを閉める」とストリートに書いて、その情景は読者の想像に委ねたほうがいいですね。誰かが作ったオノマトペを安易に使うことによって、書き手は自分で観察することを止める、それがこわい。

※読点はどこで打たねばならない、という決まりはありませんが、読者が読みやすいように、文意が取り易いようにという作者の配慮が生きる場所です。読点も文章のうち、あだやおろそかにはできません。

小説の神は細部に宿るといわれます。細かい部分に注意を払い、自分の小説世界を創り上げていかれますように。

講座の様子

開講式 7月7日



講座



特別講座 10月27日



閉講式 1月19日



	月・日	曜	時 間	回	月・日	曜	時 間
第1回	7月7日	日	12:30～16:30	第5回	10月27日	日	10:00～16:00
第2回	8月4日	日	12:30～16:30	第6回	11月10日	日	12:30～16:30
第3回	8月25日	日	12:30～16:30	第7回	12月15日	日	12:30～16:30
第4回	9月15日	日	12:30～16:30	第8回	1月19日	日	12:30～16:30

編集後記

県内の高等学校九校（うち離島二校はオンライン受講）から十一人の高校生が本ゼミナルを受講し、作品制作に情熱を注いできました。全八回の講義を通して、講師の先生方からの御指導をいただき、ここに、令和六年度版海音寺潮五郎記念文芸ゼミナル受講生作品集『潮音く若人の樹』が完成の運びとなりました。

受講生たちは、学業や部活動などで多忙な中にも、自分の作品を書きあげたいという思いを胸に、本ゼミナルに参加しました。「書くことが好きだ」という共通の思いで繋がり、合評会では互いの作品に対して、読み手の立場、書き手の立場に立って意見を交わしながら、それぞれの技術を高め合いました。

先生方には、受講生一人一人に対して丁寧に御指導いただくと共に、作家の文章から表現を学ぶ講義（学習会）等の場も設けていただきました。

第十一集に収められた作品は、どれも受講者のみずみずしい感性と個性を感じられるものとなりました。

最後に、本作品集を上梓できましたのは、ひとえに、立石先生、出水沢先生の熱意ある御指導の賜物です。この場を借りて感謝申し上げます。

令和六年度海音寺潮五郎記念
文芸ゼミナル受講生作品集
潮音 く若人の樹く

令和七年三月

編集・発行

鹿児島県立図書館